
新世紀エヴァンゲリオン 天地君の受難

camiiyu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新世紀エヴァンゲリオン 天地君の受難

【Nコード】

N9742Z

【作者名】

camiiyu

【あらすじ】

鷺羽さんの実験中に美星さんによる暴走でエヴァの世界に飛ばされた天地君の物語です
新世紀エヴァンゲリオンと天地無用！魍皇鬼のコラボです

受難（前書き）

物語に対する指摘等は受け付けますが、批難等は受け付けません
ご理解の上お読みください

受難

新世紀エヴァンゲリオン 天地君の受難

「ある日の鷺羽ちゃんの実験室のこと、

鷺羽さんお手紙が来てますよ、と美星さんが実験室に
来ました、その時天地君はいつものごとく、
鷺羽ちゃんの実験に付き合わされていました。」

「ぜ〜〜〜〜つたいあんたはそこにある計器に触っちゃだめだよ。」

と念を押して、手紙を読み始めました。

（またかと天地君はあきらめの境地で
二人の様子を眺めていました。）

（は〜〜〜〜ああ）

また何か起こるんじゃないかと、あきらめつつ
心配してたところ、やっぱり何か起こりました
お約束ですね、美星さんはボタンを押しました。

Yの付く竜の落とし子のマークのアニメに

出てくる、三悪人の緑色の服着た方がボタンを押すように。

「ぼちつとな。」

「あららららら。」

と実験中の計器が暴走を始めました。

「何やってるの」

と、鷺羽ちゃんがあわてて計器をいじり始めましたが暴走を始めた計器は止まりません。

天地君はあきらめの表情で巻き込まれました。

「やっぱり~~~~~こうなるのか~~~~~」

煙が晴れるとそこには天地君がいませんでした。

鷺羽ちゃんはキーボードを操作しつつ天地君の搜索を開始し始めました。

あらゆる次元をもちろん自分の神としての能力を駆使して、

津名魅はもちろん訪希深にも協力してもらって、

あらゆることを試して、

やっとのことで見つけることができました。

それは、それは、

<新世紀エヴァンゲリオン>

というアニメの世界にいる痕跡を

見つけることができました。

といってもまだこちらからのアクセスの仕方が見つからないので、

こちらからの呼び掛けはできませんが、見つけたいうことをみんなに話しました。

「美星さんあなたという人はきいいいいいいいいい。（阿重霞さん）」

榎木家の面々はすごく心配してます。

樹雷王家の方々は心配半分面白半分です。

というように悲喜こもこもですが、

そして、鷺羽ちゃんの出番です

「任せなさい、宇宙一の天才科学者に任せなさい。」
と胸を張りました。

次は天地君のお話になります。

受難（後書き）

さてさて、始めりました。

新世紀エヴァンゲリオン 天地君の受難
どんなお話になるか、どうぞご覧下さい。

中（前書き）

シンジと天地のお話

中

西暦2015年の世界に飛ばされた天地君です。

ある人物の精神に憑依することになりました。

飛ばされた当初はあわてていたため状況判断ができませんでしたが、時間がたつ間に平静を取り戻し、ある人物との邂逅を果たすことになります。

ある人物は大けがをし、精神世界の中で天地君との邂逅を果たします。

もちろんある人物も混乱していましたが時間がたつとともに平静を取り戻しました。

（君は誰だい、俺は榎木天地っていうんだけど。）

（僕は碓 シンジといいます 怯えながら名前をいいました。）

（じゃあ、これからシンジ君と呼んでいいかな。）

（はい、ではぼくはどうやらいいですか。）

（そうだな、ちなみにシンジ君は何歳かな。）

（ちなみにシンジ君は何歳かな。）

（僕は14歳です。）

（おれは17歳だ。）

（じゃあ天地さんとよびますね。）

（うんそれでいいよ。）

（状況をきこうかな。）

（今病院にいるみたいだけど、なぜ病院にいるのかな。）

（ええっと

父さんによばれて エヴァとかいうロボットみたいなものに乗せられて

人類の敵とか呼ばれる 化け物を倒し気を失ってるからじゃないでしょうか。）

（そうか、いろいろあるんだな。）

（天地さんはどうして僕の中に来たのですか。）

（実はある人の実験中の暴走にまきこまれて、、、、、、、

あっはっはははは、

慣れてただけ、こんどはここに来たというかなんというか、

あはっははは、ふうふうふう、

君もいろいろあったみたいだね。）

（ええ父さんに捨てられたと思ったら、また呼ばれて、

うっうっうっうっうっうっうっうっうっうっうっうっう。）

（そうかつらかったんだね。）

シンジ君は泣き崩れ、俺に慰められて、泣き止んだところで。

（俺にできることがあれば何時でも頼っていいんだよ。）

といっても精神の中ですが

（天地さんてお兄さんみたいだ、裏切らない人みたいだ。父さんみたいには。）

（シンジ君は本当につらい目にあってきたんだな、あんなに泣くほど、、、。）

（シンジ君も俺みたいにトラブルに巻き込まれやすい体質なんだな、これは俺が支えないとつぶれてしまうかもしれないな、弟がいたらこんなかもしれない、よしシンジ君を支えてやろう。）

（まずはけがを治そう。）

天地君の備わった力、光鷹翼を展開する力を使って、目に見えない光鷹翼でシンジ君のけがを治しました

中（後書き）

天地君とシンジ君の邂逅です

では次のお話をお待ちください

中その2

精神に肉体がリンクしてることは、天地君には当たり前です。（この物語だけの設定）

(ええええええええええ、どういふことですか、天地さん。)

（俺の住んでる世界、いわゆる異世界でいいかな。）

（僕はその異世界では樹雷という皇国の皇太子の孫なんだ。）

(ええええええええええええええええええええええええ。)

(皇族の方なんですか、、、、)

僕なんかとは身分が違う遠い世界の方なんです。ね。

（ぼくなんか、ぼくなんか、ぼくなんか……）

(ちよつとちよつとシンジ君。)

自閉モードに入りかけの時に天地君があわてて言い訳をしました

（落ち込まないでよシンジ君）

皇族だといつても俺が住んでる地域では、まったくの一般人として暮らしてたんだから。」

（だって、俺がそのことを知ったのはつい1年目のことだったんだから。）

（神社の神主のじっちゃんがすnder、神社の奥の院の祠で、
魍呼という宇宙海賊が封印されてね、

興味半分でその封印を解いたことが始まりで、

阿重霞さん、砂沙美ちゃん、という女の人が俺が住んでるところにきて、

魍呼と、阿重霞さんが、大ゲンカするは、宇宙に連れ出されるはで、
ちなみに、阿重霞さん 砂沙美ちゃんは俺のじっちゃんの妹で、
第二皇女 第三皇女なんだ。）

（いろいろあつて落ち着いたところに

美星さんというギャラクシーポリス（GP）の1級刑事がきて、

神我人いう宇宙海賊が攻めてきてやつと、

俺が皇国の血をひくものだとなり、

神我人をやっけて、それからいろいろあつたよ、

ふ~~~~~。）

（光鷹翼という力は俺だけの力で起こしてるんだ、

シンジ君を治した力も、光鷹翼という何物も通さない、

攻撃も防御も完ぺきにできる力、

といつても、本当に危機が起きないと

発揮できないけどね。）

（だからね、シンジ君よく聞いてね、おれは確かに一般人とは言えない力を持つてるけど、

純粹に人間なんだよ、ただの人間なんだよ、覚えておいてね。）

（力があるうとも、姿形が違ってても、生まれがどうかなんて些細なことなんだよ、

自分が人だと持ったらとことん信じてあげなよ、

これからえあう人々を信じてあげてほしい、シンジ君。）

これはおれが今まで生きてきて実感したことだから

（天地さん、いや天地兄さん、て呼んでいいですか。）

（いいけどどうしたの？。）

（僕の目標になってください！
お願いします！）

中その2（後書き）

邂逅その2です

では次のお話をお待ちください

中その3（前書き）

邂逅その3です

中その3

（いいよ、おれも弟ってほしかったから。）

（よろしく願います、天地兄さん。

こちらこそ、よろしく願いますシンジ。

素敵な笑顔だねシンジ。）

（男の俺でも好感が持てるね。）

（ところで天地兄さん、

阿重霞さん、美星さん、砂沙美ちゃん、魍呼さん、

女の人ばかり出てきてますけど、どういった関係なんですか？）

（ええっとどういったらいいのかな、、、、、、、、）

（恋人なんですか皆さん、、、、、、）

（恋人ではないんだけど、、、、、、、、

好きっ、、、、、、、、何言わせるんだよシンジ。）

（あははは兄さん照れてる、、、、、、）

（怒るよシンジ。）

（御免なさい、兄さん。）

（うっうん、

話を変えるぞ。)

(シンジは、エヴァというものに乗せられたといったね、
どういった経緯でそうなったのかな。)

(4歳のころ父さんに捨てられて、
おじさんという人のところに預けられて、
そこで暮らしてたんだけど、

突然、父さんからここに来いという手紙がきて、
第三東京市の駅について、

葛城さん、という女の人がきて、
父さんは<ネルフ>というところで働いていることを聞かされて、
車に乗せられて、ネルフ本部連れ込まれて、
赤城さんという女性がきて。)

歩きながら話すミサトと、リツコ。

(このこがそうなの。)

(この子が適格者なのリツコ。)

(そう、サードチルドレン。)

(何のことかわからずに聞いてたんだけど

<サードチルドレン>、<適格者>、何話してるのかな。)

(暗いところに連れてこられて、行き成り明かりがついて、
ロボットの顔が現れた、びっくりしてるところに、父さんがきて、
お前が乗れと言ってきた、そんなのできないよと言ったら、
お前には失望したと言って、上で白髪のおじいさんになんか話してた。)

（レイを呼べとか言ってた。）

（ストレッチャーに乗せられた女のがきて、ものすごい大けがしてるのに、

無理やり起きそうなので、「僕が寝ていいよ」と言った。）

「父さん、僕が乗ります！」

（女の子がけがしてるのもかわらず、乗ろうとしてるのに男の僕がうじうじしてたらだめだから。）

（それから、赤城さんが動かし方を教えてくれて、無我夢中で戦った、そして爆発で気を失って、天地兄さんと知り合った。）

（そうかシンジ。）

（とりあえずわかったよ、これからどうしようか、相談しよう。）

（まず、俺がシンジとどうかしてることは、内緒にしておこう。）

（疑われたくないだろうし、

闘いになったときは俺がアドバイスできたら、アドバイスしよう）

（わかりました兄さん。）

（後はその時そのときめよう。）

（シンジに目覚めの時が来たようだ、またあとでな。）

(ぽんぽんぽん)

中その3（後書き）

次はシンジ君が目覚めます

では次のお話をお待ちください

思わぬ珍客（前書き）

あけましておめでとうございます
今年も拙い小説をごひいきに

天地世界ではおなじみにひとさわがせな天才科学者の登場

思わぬ珍客

目覚めたシンジ君

お約束のお言葉

知らない天井だ シンジ

知らない天井だな 天地

あつあたまに包帯が巻かれている そうか頭から血を流してたつて
兄さんいつてたな

今天地君とはリンクしてないんです

呼び掛けたらリンクが再開する約束だそうです

けがは兄さんが直してくれたからいいんだけど

カモフラージュしてないといけないから

医者がいいというまで

つけてるけど

少し気になることがあるから ナースステーション
に行こうとおもう

ナースステーションに来ました

すみません

は~~~~い何かな~~~~にやにや

カニの形の髪の毛をした看護婦さんがきました（言わずと知れた
のお方）

どうしたのかな 天地殿

え
シンジ

え え え え え え え え え え え え
え え え え え え え え え え え え

天地

誰ですかあなたは
シンジ

鷺羽ちゃん or z 天地

驚いてる二人をしり目にやにやしてる看護婦さん

とりあえず病室に逆戻りです

力二頭の看護婦さんと

天地兄さんの知り合い見たいだから天地兄さんに任せよう

僕の体を天地兄さんに一時任せて意識交換をしました
もちろん皇家の力で

驚羽ちゃん いたいどうしてここにこれたの
私に不可能はない わっはは なんだって

宇宙一の天才科学者だから 胸を張る看護婦姿の鷺羽

天地殿のアストラルを探してきた
あらゆる次元あらゆる要素
を探索して

もちろん女神三人の能力を駆使して

ちなみに、私の今の姿はアストラルボディだから

天地世界ではおなじみですね、

ちなみにシンジどの天地殿以外は見えてません

幽霊みたいなものかな シンジ

みんなはどうしてるの 鷺羽ちゃん 天地
そりゃ 大慌てでさ

あえかどのはヒステリーを起こすは
ささみちゃんしんぱいして寝込むは
ノイケどのは平然と家事をこなしえる
ただし 心配してるけど

勝仁殿は相変わらず飄々としてる
りょうこは以下同文

美星殿はりょうこに半殺しされてる
じゅらい王家の方々は面白がってる

でもまだ見つかったことは話してない
でも皇家の木々を通して
うすうすはしってるかもね 瀬戸どのは

これからのことを話し合いましょう 鷺羽

シンジが教えてくれたことを包み隠さず鷺羽に話す天地

シンジを助けていこうと思う

天地兄さんにお任せします

思わぬ珍客（後書き）

人物の名前につけてるかぎかつこをを省略します
皇家の方々のお名前はすみません変換しづらいので
平仮名とさせていただきます

レイ（前書き）

レイとの会話です
ミサトの再登場

レイ

そつだ昨日の大けがした女の子のところに行こうと思ってたんだ
そのためにナースステーションに行ったんだっけ
逆戻りで病室のもどつたんだ

その子なら隣の病室にいるよ 鷺羽

え そうなんだ

お見舞いに行かなくちゃ

けが自体は大したことはないんだけど 鷺羽

骨折や内臓損傷を大したことはないと言い張る天才科学者
すぐに直せるからね でたらめなこと言う 鷺羽

いや~~~~面白い素材だったから もう完治させちゃった

え シンジ

でも見た目は大けがしてる状態にカモフラージュさせてる 鷺羽

面白いね りょうことおなじだったよ

りょうこはね 私の卵子と宇宙生命体マスとのハイブリッド
いわゆる娘さ 鷺羽

じゃああの女の子もそうなんですか シンジ

そう 使徒リリスと君のお母さん 碇ユイ殿の遺伝子を組み合わせた
ハイブリッド生命体 でも人間だよ

ちなみにシンジ殿との血のつながりはないよ 兄弟じゃないよ
あんぐんなことやこぐんなこともできるよ
もちろんうふふふふ 鷲羽

昨日も言っただと思うけど

力があるうとも、姿形が違ってても、生まれがどうかなんて
些細なことなんだよ

自分が人だと持ったらとことん信じてあげなよ

これからえあう人々を信じてあげてほしい 天地

わかっています兄さん

さてお話はまたあとで

御姫様に会いに行きましょう 鷲羽

こんこん

こんにちは

中をのぞく シンジ

起き上がったる少女

だれ

ええっと 僕は碇 シンジ

入っていいかな

勝手にすれば

おずおずと入るシンジ

けがの具合はどう

大したことはないわ

確かに完治してるんだから大したことはないな
見た目は大けがしてるんだから
これがカモフラージュとは思えない出来映え

碇って言ったわね 指令の知り合い？

うん 息子だよ

息子 子息 子供 長男・・・ 無限思考に入る少女

あの もしもし きみ？

なに？

名前 教えてくれる？

レイ 綾波 レイ

レイさんっていうんだ

ぼう~~~~~~~~レイの顔を見てるシンジ

何か用？

隣に入院してるんだ　また来てもいいかなレイさん

かまわないわ

ほっ　シンジ

また明日来るね

さようなら

できればまた明日って言ってほしいな

それは命令？

いや　僕のお願いだっよ

しばらく熟考のレイ

了解

また言うね

また明日　シンジ

また明日　レイ

きれいな女の子だなレイさんは

笑顔見せてほしいな　どんな笑顔なんだろう

そこに見舞いに來た葛城ミサト

あれゝシンジ君どうしてレイの病室から出てきたのかな　にやにや
してるミサト

ええっと昨日大けがした女の子が気になって
ナースステイションできいたんです

どうだったシンジ君　かわいい子でしょちょっと無表情だけど
惚れたのかな？　からかうミサト

そんなんじゃないありません！真っ赤な顔をしてるシンジ
怒って行っても説得力がないシンジ

ただのお見舞いです！

自分の病室に帰ってしまいました

あちゃゝゝゝゝからかいすぎたミサト

まっいつか

からかうネタを仕入れたミサト　まるでどこかの鬼姫みたいな
顔をしていました

今日はいろいろありすぎました　早く休みますね
兄さん　鷺羽さん

了解 天地 鷺羽

鷺羽ちゃんにお願いあるんだ

シンジにはあまりおかしな実験等は

しないほしい

俺とは違ってあちらのことはあまり話してないから

無用な混乱ははおこしたくないから

わかってるよ天地殿

俺自身のこととか家族構成ぐらいしか話してないから

遺伝子情報ぐらいしか採取しないさ天地殿

しかし興味は尽きないねこちらは

ネルフとか言っただね

おもしろいことが始まりそうだ

科学者の血が騒ぐよ

あゝあシンジできるだけかばうからね鷺羽ちゃんから

レイ（後書き）

レイの素性を知るシンジ君

ミサト再登場でもこのこのミサトはあのミサトです
ネタバレになるのでこれまでにします

エヴァ（前書き）

初号機に入り込んだ鷲羽
どうなることやら

エヴァ

エヴァの中に入った鷺羽ちゃん

二つの意識に気が付きました

一つは子供のような意識
もう一つは大人の意識

起きてきた二つの意識

子供のほうはもう一度眠らせ
おとなのほうは眠らせずにしました

話があるからおこしました
私の名前は白眉鷺羽
あなたのお名前は？

碇 ユイと申します

ではユイさんとよぶわね
あなたなぜこの中にいるの？
事情はあるのは分かってる
なぜ自分の子供を捨ててまでこの中にいるの？
自分の子供はかわいくないの
どんな仕打ちを受けたことは知ってるの？

答えなさい碇 ユイ

え どういうことですか？鷺羽さん

いい話してあげる

あなたのご主人の碇ゲンドウは自分の子供を
遠いほとんど他人に近い親戚に預けたのよ
ほんのはした金だけ渡して 養育費すらも渡さずに

えっ そんな馬鹿なゲンドウさんに限って
あんなにシンジをかわいがっていたのに
どうして どうして
涙ぐむユイ

シンジ殿がどんな境遇に陥ったか
あなたにわかるの？

4歳の子供が親に捨てられたなんて
それも両親に
どんなにさびしかったでしょうね
どんなに心細かったでしょうね
親ならどうしてそんな仕打ちができるの

まして親戚といっても赤の他人に近い関係
なのに

4歳のころから家事手伝いをさせられて
料理がまずければせっかん いろんなことに
シンジ殿は耐えてたのよ

あなたが迎えに来てくれることを信じてね
心の中でね 顔には出さずに
耐えてたのよ

拳句の果ては プレハブ小屋におしこめられて

よくもまあこんなところにいたわね
のんきに

何が人類のためよ、何がシンジに明るい未来がなんてよく言えたものね

涙ながらに話す
鷺羽

自分のことに置き換えて話す 鷺羽

タウ私のかわいい赤ちゃん

旦那の親に無理やり引き取られた息子

親なら親なら守ってあげなさい

ユイ泣き崩れて

[illegible][illegible]

ישיבת ישיבת

許してシンジ 許して
ゆるしてシンジ
愚かなこの母親を

[illegible]

わかつたわねユイさん
あなたのやることは

あなたはの中でシンジ殿を守らないといけないわよ

涙ながらにうなずくユイ

許すまじ ゲンドウ

ゆるさない

私はあちらに マギのほうに行くわね

よく考えてこれからシンジどのを守りなさい

エヴァ（後書き）

エヴァでのユイとの邂逅を果たした鷺羽ちゃん
あちらでの騒動をお楽しみにしてください

マギの進化（前書き）

エヴァでのことを終えた鷺羽
マギシステムに入り込んで
赤木ナオコとの邂逅

マギの進化

シンジ殿が言ってたロボットやらをのぞいてこようかね
アストラルボディだからどこにでも入り込めるからね
検査機器なんてちよろいちよろい
この鷺羽ちゃんにかかればね

ネルフ本部のもぐりこんだ鷺羽ちゃん
エヴァの中でユイとの邂逅を果たし
まずはこの心臓部ともいえる
コンピューターに入りこみました
MAGIというんだね

ほうほう

三つのコンピューターの合議制で決めるシステムなんだね
少しいじってみようかね

シンジ殿や 天地殿の邪魔にならない程度に

MAGIの最深部に入り込んだ鷺羽ちゃん

おやおや？

これはまた居妙なことがあるもんだね
皇家の木に似た感じがすると思ったら

生体コンピューターとはね

ふむふむ

女の思考するタイプに 母親の思考するタイプ
科学者の思考するタイプね

また原始的な生体コンピューターだね

こら起きなさい 起きなさい

何よもう人がせつかく寝てたのに

あなた誰なの

私は宇宙一の天才科学者プロフェッサー鷺羽ちゃんよ

ちよつとあなたに聞きたいことがあったのよ
で名前は

赤木ナオコよ 行き成りたたき起こして
何よもう

よくもまあこんな原始的なコンピューターでねてられるわね
あきれるわ

げ、、原始的、、、、、、、、よくも言ったわね
これでも世界最高のコンピューターよ

よくお聞き
確かに生体コンピューターを開発したことは褒めてあげるわ
上には上がいることを考えなさい
一台のコンピューターでできるんだよ

こんなことは

できるというなら証拠を見せて

うおっほん

いいわ見せてあげる私の世界の
この鷺羽が開発したものを

ちよつと来なさい

お互い アストラルだから

どんなこともできます

アストラルだけならことシンジの世界との行き来は
鷺羽ちゃんが開発してます

天地世界のG Pアカデミーに連れてこられた

赤木ナオコは驚くやら、びっくりして呆然としていました

いい世界最高なんてうぬぼれてはいけない

テクノロジーは日々進化してるんだから

あんたも科学者の端くれなんだから

寝てていいわけないでしょ

わかってるわよあなたに言われなくても

こんな素晴らしいものを見せられたら

科学者の血が騒ぎます

さて向こうの世界に帰ろうかね

やることは分かったみたいだから

シンジの世界に帰ってきた二人は
マギのsuperversionアップにとりかかりました

もちろん マギの最深部ですから外に漏れることはありません
赤木リツコが気が付かないほど
巧妙に隠されていました

とりあえずダブル思考できるようにしましょう
表は今まで通りの思考

裏はより複雑な思考ができるように
最深部は完ぺきなブラックボックス化することにしました

表のマギメルキオール、バルタザール、カスパーは今まで道理の仕様
裏はもちろん マギ驚羽 マギ津名魅 マギ訪希深となくしました

もちろんどのマギも天地君やシンジ君の敵になることはしませんし
できません
なぜって驚羽ちゃんだから

朝までに終わったようです

天地殿 シンジどの頑張って
下準備は終わったからね

マギの進化（後書き）

さてさてシステムバックアップはおわったようです
これからどうなることやら

最深部（前書き）

エヴァとマギの仕込みをおわった
鷺羽ちゃん

次の悪だくみをお楽しみください

最深部

システムやエヴァの仕込みをおわった鷺羽ちゃん
どうもおかしな気を發揮する所に気が付いた
いろいろ探る間に

ネルフ本部最深部に到達しました

これは！

失われた古代先史文明の遺物ににてるわね
ええっとなんて言ったかね
リリースシステムに似てるわね

使うものの心理思考を読み取るキーシステム
キーロングヌスのやり

リリースシステムとロングヌス

鷺羽ちゃんは自身の持つ探査システムを駆使して
リリースシステムとロングヌスをなめるように探査しました
ほ~~~~~

コピーとはいえよくできてるわね~~~~感心するよ

ただしこれをコピーするだけの技術はシンジの世界には存在してま
せん

何らかの異星人が介入したことは間違いないでしょう
でもこの物語ではかんけいがないので割愛します

でもコピーはコピー決定的な欠陥を発見してしまいました

一度発動してしまうと何もかも壊してしまう、言い換えれば暴走して暴走した後になのもなくなってしまう荒涼とした世界しか残さない

本来のシステムは 無開発惑星を開発するためのシステムです

リリスとアダムそしてロンギヌスこの三つがそろわないと発動しないシステムです

でも今あるコピー製品は

いけにえとなるものが需要です

それもうら若き無垢な少女

誰と誰かまいわなくてもおいおいわかるでしょう

このままじゃいけないね こんなもの発動したら

この世界が壊れちまう、

どうしたものかね そうだシステムの根幹に関するものを書き換えてしましましょう、

うふふふ

あれをこうしてこれをこうしてそれをこうしていろいろいじってしまった結果

天地殿にしか反応しないようにしてしましましょう

この世界の人々がどんなにいじろうとも

天地殿以外は

にやりっ 鷺羽ちゃん独特の笑いが発動しました

リリスシステムはこれでいいね

もう一つ

これは人との尊厳とか無視しまくる行為
良い行為で行えばこれほどよいもの

でもそこに漂うものはなにもうつさない、反応しない
たださまようっているだけのもの
そう

綾波 レイのコピー

かすかにレイの魂の残滓が残ってるレイのコピーたち
このままじゃいけないね

いぜん魍皇鬼が鷺羽の研究室にいたときマスが集まってきた
魍皇鬼が女性体になったように

レイも補完してしまうことを思いつきました
もちろん今すぐするわけではないので

レイちゃん～～～ん楽しみにしておいてね

そこに漂うレイのコピーたちよ

おまえたちはどうしたいかききたい

さすが三神の頂神の長女、ものすごい威厳をもって告げました
このまま器としての生涯を終えたいかそれとも
今上にいる綾波レイを助けるために使われたいか
答えなさい

しばらくして レイちゃんズは答えました
微弱な意識を持って

私たちは補完計画を実行するためにうみだされたもの
レイのコピー 悲しそうな波動をだしながら

もしかたうなら 今上にいる姉妹のレイのために何かできるなら
あなたに何もかもゆだねます

わかったよ レイ

では今は静かに私が作ったところに移動させます

はい

さて レイちゃんズはこれでいいわね

なにもいなくなった水槽に鷺羽ちゃん人形を入れておきましょう
たくさんね

第二期最終の時にでてきたDrクレーにつかまっていた時に
鷺羽ちゃんが身代わりにした鷺羽ちゃん人形

鷺羽ちゃん独特の嫌味を聞かせた人形
見るものが見たらただの鷺羽ちゃんの人形
ただし他のものが見たらレイが漂ってるように見える
そんないたずらをこの水槽に施しました
決して見破れないいたずらです

ふふふ完ぺきだ 鷺羽ちゃんすごい 鷺羽ちゃん宇宙一
そうテレビ版ででた鷺羽ちゃん応援団です

宇宙一 の天才科学者にかかればちよいもんだよ
深夜の空間に笑い声がこだましました

鷺羽ちゃんの介入により　ゼーレおよび碇　ゲンドウの補完計画は
完全に破綻しました、どんなに行おうとも
うんともすんとも実行できなくなりました

さて道化師たちゼーレ　碇　ゲンドウには踊っていただきましょう
さいごまで道化師として

鷺羽ちゃんの手にある裏死海文書そう碇　ユイの解読した裏死海文書
ただのシステムの取扱説明書を大事そうにありがたがってる
ゼーレの老人たち　碇ゲンドウがあわれに思えます

では次のお話までしばしサヨナラです

最深部（後書き）

早々に補完計画が破たんしました
どうなることでしょう

朝の出来事（前書き）

目覚めたシンジ君

さてさてどうなることでしょう

朝の出来事

翌朝

天地やシンジ君が目覚めます

おはよう兄さん

おはようシンジ

おはよう天地殿、シンジ殿良い目覚めができたかな

ええ驚羽ちゃん 天地

あまり寝られませんでした 驚羽さん シンジ

いゝゝゝいシンジ殿驚羽ちゃんて呼んでくれないと返事してあゝゝ
げない

天地はまた始まったかと苦笑してます

やれやれ、ゝゝゝ、驚羽ちゃんはじまったね

驚羽さん 無視

驚羽さん 無視

驚羽さん 無視

驚羽さん 無視

大人おのあなたにちゃんなんてつけられません
どこまでも生真面目なシンジ君

この姿になればいいのねシンジ殿

行き成り縮み始めた鷺羽

わっわああああああ シンジ

いつもの姿形になった鷺羽

看護婦姿の

天地君は慣れてるので驚きません

ですが初めて人間が縮むのをみたシンジ君はただただ驚くばかりです
そらそうでしょうね

シンジの世界ではそんな芸当できる人間なんていませんから

大きなエヴァを作れるのに ね

にやにやしてる鷺羽

これならどうだいシンジ殿

声も出さずにただただうなずき返すシンジ

わしゅうちゃん 小さな声で言うシンジ

聞こえないねシンジ殿

わしゅうちゃん 少し大きな声で

聞こえないねシンジ殿

今度は普通の声で 鷺羽ちゃん

よし それでいいわよシンジ殿

シンジ殿 あなたに聞いておきたいことができてね
レイちゃんのことなんだけど

レイちゃんはりりすのあいの子だけど
重要なことなのでもう一度聞きます
これから普通に付き合っていけますか
もう一度聞きます

ただの女の子としておつきあいできますか

はい！

はい！はい！

僕は綾波をただの女の子として御付き合いします！

愛の告白だねシンジ殿

言った途端ゆでだこのように真っ赤になったシンジ君がいました

良かったよこれで例のことができるよシンジ殿

例のこと？ シンジ 天地

うんにゃ今は気にしないでいいよシンジ殿天地殿

ちよつと隣のレイちゃんのとこるに行つてくるよ

朝の出来事（後書き）

鷺羽ちゃんが念を押すお話でした

レイの笑顔（前書き）

シンジ君の初恋そして
ほほえましいお話です

レイの笑顔

少し待ってなさい

と隣に移動する鷺羽

おはよう気分はどうだい レイ殿

あなたはだれ？

私は宇宙一の天才科学者プロフェッサー鷺羽
鷺羽ちゃんと呼んでね

無表情のレイ

驚くこともしないレイ

そして自らの持つてる本に視線を移すレイ

さすがの鷺羽さんもあきれ果てる、

何も教えてないんだね 碇 ゲンドウ あきれ果てるね

大変だよシンジ殿 普通の女の子にするのは これからのシンジ殿
次第だね

レイ殿

鷺羽に視線を向けるレイ

リリース レイのコピーたち という驚羽

みるみる驚愕するレイ

ほう驚く表情はできるんだね

なぜそれをと 答えるレイ

碇司令 赤木博士以外に知ることはないレイの秘密を
ことも投げにに語る驚羽

昨日のことを事細かに告げる驚羽

俯くレイに驚羽は自愛を込めて語る驚羽

レイ殿 あんたの生まれがどうだろうと関係ないんだよ

レイ殿は今この瞬間に生きてる人間なんだよ

リリースがどうかは今関係などないんだよ

私の娘もねレイ殿と同じなんだよ リョウコというんだけど

私と宇宙生物のあいの子なんだけど 生まれ確かに特殊だけど

今も生きてるんだよ 普通の人間としてね

人を好きになる素晴らしいじゃないか

レイ殿にも同じようにしてほしい

リョウコと同じように普通の女の子として今生きて生きてほしい

これから自分は予備とか言ったら承知しないよ

優しくレイを抱きしめる驚羽

驚羽の言葉を聞いて驚愕し そして涙が出始めるレイ

うわああああああああああああああああ
泣き始めるレイ

よしよし思いっきりお泣きレイ殿

思いっきり泣いたレイ

そして レイに重要なことを告げる鷺羽

地下に保存されてるレイ殿の姉妹たちをどうしたい？レイ殿

今のままじゃまずいからとりあえず別の場所に移動させてるけどね

もし何かの役に立つんならあなたにゆだねたい鷺羽さん

鷺羽ちゃんとよんでっていわなかったかな

言った

もう一度

鷺羽ちゃん 素直ですねレイちゃんとは頭御なでる鷺羽ちゃん

照れてるシンジ殿とは大違いだよ

わかった レイ殿 レイ殿の思うようにしてあげるよ

楽しみにしておいで レイ殿

さて 外で聞き耳立ててるシンジ殿入っておいで

びっくりしてるシンジ

真っ赤になりながら入ってくるシンジ

おはよう綾波さん

びっくりするレイ

おっおはようと答える泣き顔のレイ

シンジ殿はレイ殿のこと知ってるよすべてね

また驚愕するレイ

でもねレイ殿それでもシンジ殿は構わないと
レイ殿を受け入れると

近寄り抱きしめるシンジ

素直に抱きしめられるレイ

そしてまだ泣きは始めるレイ

その涙は心の底からうれしいと表現する涙でした

そして 顔を上げるレイ

悲しくないのに涙があふれるの教えて

それはね、うれしいと心が流す涙なんだよ綾波さん

心行くまでなくレイ

そして あのセリフが出ます

こんな時どうすればいいの

笑えばいいよ綾波

そして朝日のように微笑むレイ

シンジ君は射抜かれてしまいました レイちゃん的笑顔に
シンジ君の初恋です 成就してもらいたいものです
作者の願望です

必ず笑顔を守ってみせるよ 綾波

良かったなシンジ

良かったねシンジ殿

ところで これから綾波さんと呼ぶときどう呼んだらいいかな
しばらく考えた後レイちゃんは言いました

レイと呼んでほしい

呼び捨てにするなんてできないよと
真っ赤な顔でのたまうシンジ

お願いと必殺の笑顔でいうレイ

純情なシンジ君としてはどうにも対抗策もないので

真っ赤な顔で

レイ

とレイちゃんに答えました

こっこれからはレイとよぶね

必殺の笑顔でうなづくレイちゃん

僕のことはレイの思うと通りによんでほしい

シンジ君

必殺の笑顔でシンジ君と呼ぶレイちゃん

ここは二人に任せましょう

シンジの部屋に戻ってきた鷺羽

いつの間にかベッドには天地君の体がありました

天地とリンクしてる鷺羽ちゃん

天地君の遺伝子情報を書き込んで天地殿がここで活動できるように
用意したそうレイのコピー体でした
もちろんシンジとのリンクを残したままで

どうする天地殿

わかったよ鷺羽ちゃん

メインはシンジだからね 鷺羽ちゃん

わかってるわよ天地殿

これから陰で暗躍を始める天地、

その始まりでした

レイの笑顔（後書き）

素敵な笑顔が見れたシンジ君でした

そして等身大になった天地君の暗躍が始まります

これからの展開が楽しみになりました

退院（前書き）

退院するシンジ君
その朝のことです

退院

それからの数日はシンジ君にとって楽しい日々でした
朝からのあいさつに始まり夜のあいさつまで
ほんとにシンジ君にとって楽しい時でした

レイちゃんの笑顔が見たいばかりで
面白い話や悲しいお話

シンジ君が味わった幼いころの出来事を包み隠さず
レイちゃんに話しました

レイちゃんにとって初めてのことばかりでしたが
ずいぶん表情もできるようになりました

シンジ君の幼いころの話を聞いたとき
レイちゃんの心は張り裂けそうな悲しみに覆われて
泣き出す始末です

シンジ君は私よりつらい目にあつたのね
私は碇司令に育ててもらったのの
じつの子供のシンジ君はつらい目にあってるのに
それでも私を受け入れてくれたの

レイの心はもうシンジ君のことしか考えられなくなっていました

私はシンジ君しかいない、シンジ君だけが私のよりどころ

完ぺきに依存状態ですね

ラヴラブ状態

レイの心はシンジでいっぱいになっていました

碇司令のことなどレイの心からすっかり消えてなくなっていました

レイにとってもこの数日は記憶の中で光り輝くものとなっていました

さてシンジ君の退院の日が来ました

迎えに来たのは葛城ミサトさんです

あまりいい印象はありませんが これからもお世話になる方です
不機嫌な顔も見せてはいけけないので

これからのことをシンジ君に告げます

碇シンジ君

正式に特務機関ネルフ本部に配属になりました

階級は特務軍曹の階級が与えられます

もちろんネルフで見聞きしたことは機密扱いになりますので
くれぐれも喋ったりしない様にしてください

違反すると 最悪は銃殺刑 軽くても営倉に入ってもらいます

いいですね 拒否は認められないのです

反論があるならここで申し述べてください

特に何も言うことはありません

しっかり受け応えできるようになりました

これも天地君や鷲羽さんそして レイちゃんとの日々が
シンジ君を強くしていったのです

もうおどしたシンジ君はもういません

守るものができたとき人は成長するもんです

それにもともとシンジ君は優秀なんですから

碇ゲンドウユイの子供ですし

天才と呼ばれた碇ユイ 碇ゲンドウ

優秀な子どもができて当たり前です

親戚のところに預けられてた時から 成績は常にトップクラスに
いました

それも親戚には面白くなかったから余計にいじめられていました

しかしそんなことはみじんも感じさせない

シンジ君は強くなりました

シンジ君今から私のところに下宿してもらいます
これは碇司令の要請です

まだまだ君のは保護者が必要ですから

わかりましたそれでいいです

と硬い話はこれまでにして

ういういシンジ君レイと親密になれたようね
お姉さんはうれしいわ どこまで行ったの
キスしたの？

にやにやしながら聞くミサトさんです

本当に瀬戸様みたいです
とシンジの心で天地がつぶやいていました

しませんよ！

お話してたんですから毎日
からかわないでください

葛城さん

前にも言ったと思うけどミサトって呼んでほしいと言ったわよね

確かにそう聞きましたけど

上司と部下の関係になるのに、気軽に言えるわけないですよ
葛城さん

確かにシンジ君とあたしは上司と部下の関係だけど

プライベートではそういったことは持ち込みたくないのよ
わかってくれるかな

もちろん本部では葛城三尉と呼んで貰わないとだめだけど

だめ？シンジ君

ふうふうふうわかりました

公私の区別はします

わかってくれてありがとうシンジ君

レイに挨拶しておいで シンジ君

こんこん

レイはいるよ

おはようレイ 今日もいい天気だね

おはようシンジ君

うれしそうに微笑んで答えてくれました

今日 退院になったんだそれで挨拶に来たんだ

笑顔から泣き顔に変化しました

あわてたシンジはこう答えました

泣かないでレイ 毎日見舞いに来るからどうか泣き止んで

きつと来てね 待ってるから

そうだ明日来るとき何か持ってくるから

何か食べたいものはないかな

肉以外なら何でもいいわ

わかった飛び切りのお弁当を持ってお見舞いに来るよ
うん待ってるわ

やっと泣き止んでくれました

約束よ シンジ君

一連のやり取りを見てたミサトは驚いていました
あのレイがなっていたりわらっいがおを見せるなんて

驚いた後 何か企んでいる顔をしました

天地君が叫びました

鬼姫がいるジュライの鬼姫がそこにいると

確かに似てるところがありますねミサトと瀬戸様は

さて帰りましょう 愛しの我が家に

またした来るね レイ

また明日 シンジ君

退院（後書き）

無事退院することができたシンジ君
別れの情景がうまくかけたでしょうか
ではその夜のことは
次のお話で語られるでしょう

同居（前書き）

ミサトの部屋での同居が始まります

同居

帰り道にスーパーによって食材を買い込み

例のイベントをこなした後 ミサトのマンションにいた二人

ミサトの運転はすざましいほどのテクで

シンジ君は目を回して気を失っていました

二度とミサトさんの運転する車には乗らないと心の誓う
天地君シンジ君でした

そして部屋に入って驚愕しました

ごみごみごみごみ夢の島に来たようでした
気が遠くなるような気分でした

どしたの早くはいつたら

言葉が出ない天地とシンジ

天地の家では常にきれいな状態でしたし
ささみちゃんやノイケさんがきれい好きというのもありましたかし
家族が協力していました
あのりょうこですら、掃除をしていました

だから天地君には信じられないといった気分でした

シンジ君が言いました　ここは夢の島？

失礼ね、私の家よ、これでもね
貴方のうちでもあるのよ

決意するシンジ君

掃除しますこんなところでは生活もできません
いいですねミサトさん

はい　なんか怖いわねシンジ君

もちろん　手伝いますよね　ミサトさん

はいはいはいはいはいはいはいはいはいはいはい
はいはいはいはいはいはいはいはいはいはいはい

これ以上怒らせては

いけないと悟ったミサトさん

率先して掃除に取り掛かりました

それから2時間後　すっかりきれいになった我が家に感心するミサト

ご苦労様ですミサトさんお疲れ様

ところでなぜ冷蔵庫が2つもあるんですか
台所は分かるんですが　リビングにも???????

後でわかるから楽しみにしてて

台所の冷蔵庫からえびちゅを出して飲み始めるミサト
くあああああ 生き返る

一仕事した後のえびちゅはたまらないわ

どこかのおやじのようにのたまうミサトさんでした

なんじゃこりやと叫ぶシンジ

某ジーパン警察官が叫んだセリフです
と冷蔵庫を覗くシンジが叫びました

冷蔵庫の中はビールが所狭しと並んでいました

買ってきた食材を出すためのビールをせっせと出し始めました

そして食材を入れ終わった後
シンジがミサトに告げました

冷蔵庫に入らなくなったビールはすべて捨てます

そう聞いたミサトは叫びました

やめてええええええええええつえ私の生きがい捨てないで

何言ってるんですかミサトさん

これからは冷蔵庫に入らないビールは
どんなに買ってきてもすべて処分します

ミサトさんの健康のために言ってるんですから

それと自分の部屋以外つをまた夢の島にしたら
一切の酒類の持ち込みを禁止します

いいですね ミサトさん

滂沱の涙を流すミサトには承諾する道しかありませんでした

よろしい約束ですよミサトさん

意外と厳しいことをするシンジ君です

今から料理しますからビールでも飲んで待っていてください

もうすっかり機嫌を直すミサトさんです

えびちゅ えびちゅ

鼻歌を歌いながら料理をするシンジ

うまいものだなシンジ

砂沙美ちゃんが料理してるみたいに手際がいい

親戚の家では家事はすべてしてたし
好きなんですよ料理は兄さん

できた料理をリビングのテーブルに並べ終わったシンジ

ミサトさん 料理できましたよ

早く来てくださいね

は~~~~い

いただきます ミサト
いただきます シンジ
手お合わせていう二人

美味しいわねシンジ君 お店が開けるわよ

そんなことはないですよミサトさんただの田舎料理ですよ

と謙遜するシンジ

お金を出してもいいと思うぐらいの出来栄でした

楽しくいただいてる二人

えっとミサトさんこれからは料理は僕が全面的にしますから
掃除や洗濯はミサトさんにおねがいますね

最後は氷のような視線と言葉で射抜くようにミサトに告げました

わかってるわよシンジ君 冷や汗をかきながらいうミサトさんでした
ビール捨てられては困るのでしぶしぶ返事しました
その様子を じと目でにらむシンジ君

解く言ったシンジ ミサトさんには強く言わないとだめみたいだからね

はい兄さん

食後30分が経過し あとかたづけとレイちゃんにあげる
弁当の仕込みを終わったシンジ

シンジ君~~~~~お風呂入ってきなさい
お風呂は命の洗濯というから

と風呂に入る準備をしてお風呂に入るシンジ

いきなり飛び出してきました

お風呂にペンギンが、、、

ペンギンが頭にタオルを乗せた状態で出てき
リビングの冷蔵庫に入ってしまった

あ、ああもう一人の同居人の温泉ペンギンのペンペンというのよ
賢いから人の言葉も理解するのよ仲良くしてあげてね

リビングの冷蔵庫の意味を悟ったシンジ君でした

魍皇鬼のペンギン版か
と悟る天地君でした

はい もう他にはいませんよねミサトさん

いないわよ安心していいわよシンジ君

安心して入浴するシンジ君でした

ミサトさんと会話しながら楽しい時間を過ごし
眠く成ったシンジ君でした

部屋に入るときにミサトさんがシンジに言いました

シンジ君はこの第三東京市を守ったのよ誇りに思っていていいわよシンジ君

ありがとうございますミサトさん

微笑みながら部屋に入りました

ミサトが入浴中にリツコに電話をかけていました

報告書と違うから注意したほうがいいわよリツコ

もう泣き事ミサト

違うわよリツコ

いい意味でも悪い意味でも注意したほうがいいわよリツコ

了解ミサト

と電話で会話する二人でした

シンジの部屋では天地と鷺羽ちゃんとシンジ君が
作戦会議をしていました

とりあえずミサトさんと生活をしつつ情報集めを鷺羽ちゃんに願
いします

了解 シンジ殿

天地殿はどうするの

少し考えがあるのであれで暗躍します

シンジ殿はとりあえず今のままでいいでしょう

また変わったことがあれば相談しましょう

夜が更けるまで話しあいました

鷺羽ちゃんのセキュリティで今までの病院とかこの部屋の会話はすべて

漏れてはいません

完ぺきなセキュリティです

同居（後書き）

ミサト部屋での騒動およびペンペンとの出会い

天地と鷺羽の会議

うまくかけたでしょうか

ではまた次のお話をお待ちください

第二東京市（前書き）

天地君が第二東京市での暗躍のお話

第二東京市

シンジ君がレイちゃんと楽しい時間を過ごしている日のことです

シンジ君を助けるために暗躍をし始めた天地君

まず自身のあしばを固めるためにさるやんごとなき

お方をお願いするために第二東京市にやって来ました

えつと鷺羽ちゃんの話によると伊集院忍という人に連絡しなさいか

何時鷺羽ちゃんはずなぎをとったのでしょうか

鷺羽ちゃんというべきでしょうね

鷺羽ちゃんにもらった携帯で伊集院さんに電話する天地君

ぷるるるるるる がちゃ

もしもし わたくし榎木天地樹雷と申します

伊集院忍さんでしょうか？

はいわたくしは伊集院忍と申します

不躰ではありますが折り入ってご相談があり お宅にお邪魔したいと
思いますが無何でしょうか？

榎木 樹雷 榎木 樹雷 榎木 樹雷 考え込む伊集院さんでした
聞いたことあるような名前

とりあえず返事をする忍さんです

はい、わかりました 何時ごろなりなりますか

10時ごろお伺いしたいと思います

わかりました10時ですね、お待ちしております

がちゃ

忍さんは天地君といか柁木 樹雷の名前が何のか書物に載ってるのを思い出しました

その書物は蔵にあるので蔵の中に探しにいきました

しばらく探してると目的の書物が見つかりました

その書物の名前は天朝興亡記と書いてありました

その昔子供のころに忍さんが読んだ伊集院家に伝わる伝説を書き記したものでした

目的の名前が載った項目を探し出し読み始めました

の帝がある公家の邸宅にお忍びで遊びに行く途中

恐ろしい魔物に襲われて供の武士や陰陽師が次々倒れていくなか颯爽と現れてその魔物を見たこともない光り輝く刀と光り輝く盾で倒してしまいました

助けてくれたこと感謝する その方の名前は何と申す

柁木阿主沙樹雷と申します　お怪我はございませんか

有無けがはない　褒美を取らず

いえなど褒美入りません　困っていたのをお見かけたのでお助けした次第です

では失礼します　いつの間にかいなくなっていました

感動した帝は宮廷に帰り柁木阿主沙樹雷を探せと触れを出しました　一向に見つかりませんでした

それはそうでしょうね見つかるわけがありません
皇家の船がトラブルに巻き込まれ阿主沙だけがここに飛ばされ
また舞い戻っていたのですから

側近であるその時の伊集院忍さんのご先祖様に書き記すことを
命令して今にいたると書いてありました

天地君と阿主沙さまは同じ体験をしていたのですね
血筋といふかなんというか　運命を感じざるを得ませんね

時間が来たので蔵からその書物を持参して
天地君が来るのを待っていました

ピンポン

天地君が来ました

応接室に案内された天地君

忍さんはおもむろに自身が持つてる書物を渡し
該当のページを読むようにいい　その中にある名前を天地君に聞きました

柁木阿主沙樹雷と書いてありますが　君には心当たりありますか？
はいわたくしの曾祖父の名前です

そうですかではその書物に書いてあることは事実ということか
．．．．．

考え込む忍さん

そして

君、お願いがあるということでしたが、どんな願いですか

実はわたくしの弟分にあたる少年を助けたいと思い、知り合いから
貴方のお名前をお聞きしご相談したいと思いここにまかり越しました
で、その知り合いの名前は？

白眉鷺羽ともうします

名前を聞いて苦笑してる忍さんでした　あああの鷺羽ちゃんですか

天地君が驚いて考えます

なぜこの人が鷺羽ちゃんの名前を知ってるんだろっか

なぜ名前を知ってるかという顔をしていますね

大人の世界のことなので君は知らないほうがいいでしょうね

はあわかりました

で、私に何をしてほしいのかな？

実は戦略自衛隊及び自衛隊に入り込みたいので
それはどうしてですか・

シンジを助けるためです

わかりました

明日もう一度ここにお越しく下さい
良い返事ができると思いますから

わかりました ではまた明日お伺いします

天地君は帰っていきました

忍さんは笑い声をあげました これは楽しくなりますね
ネルフに一矢報いることができますと

やんことなきお方に報告するために
館のほうへ向かいました

陛下ご報告があります

わたくしの家に伝わる書物をお読みください

例の書物を陛下にお渡ししました

そして忍さんは言いました

その書物に載ってる榎木 樹雷なるものの
子孫がわたくしの家に参りました

おおおおおおお見つかりましたか
わが祖先を救いし榎木 樹雷が、、、泣き崩れました

ええその書物が本物であることが証明できました

ではそのものに褒美をやらねばならないな
ええそうでございますね

でもその少年は褒美などいらなんでしょうね
その代りある地位を与えればよろしいかと

その地位とは？

戦略自衛隊と自衛隊の指揮権がよろしいかと

なぜですか

ネルフといえばお分かりと思います

うむ、ではその方の思つようにしなさい

陛下はおもむろに錦の御旗を忍さんに預けました

根回しはその方に任す、 はは

次の日同じ時間に天地君が来ました

君の希望はすべてかないましたあとはその時が
来たら、、、です

これを君に預けておきましょう

そうです錦の御旗です

こんな高貴なものをわたくしに

やん事気なきお方の好意の品です ありがたくお受けしておきなさい

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、
わかりました、 お預かりいた
します

では失礼いたします

天地君は、帰っていきました

総理に電話しましょう

総理憎つくきネルフに一矢報いる機会が訪れましたよ
あとは以前から用意したプログラムを発動しましょう
陛下からのご許可が下りました
財界も抑えておりますから
あとは政府だけです

わかりました わが政権のすべてをにかけて行いましょう
お約束いたします

この世界では 政府財界は愚かやんごとなきお方まで敵に回して
たようです

さて第二東京市での暗躍を終えて第三東京市に帰っていく天地君で
した

第二東京市（後書き）

第二東京市での暗躍のお話でした

ネルフはこの世界でも嫌われていますね

ではまた次のお話をお待ちください

弁当（前書き）

レイちゃんへの弁当です
甘いお話です

弁当

翌朝早くに起きだしたシンジ君 朝ごはんはんとレイちゃんのために作る弁当を作り始めました

定番の卵焼き たこさんウィンナーと昨夜に作っておいた煮物等をきれいに盛り付けてお弁当の完成です

レイ喜んでくれるといいなとニコニコしながら

本当にうれしそうな笑顔をするシンジ君

ミサトの朝ごはんはんと昼ご飯を用意して

手早く自身も朝食をとり 着替えをしました

ミサトの部屋の前で

ミサトさ～～～ん朝と昼の用意してますから適当に食べてくださいね
食べた後の食器は流しにおいておいてくださいね～～～
僕が帰ってきたら洗いますから～～～

寝ぼけ眼のミサトは

ほ～～～～～～～～い返事しながらまた眠ってしまいました

やれやれと思いながらレイが入院する病院にいきました

おもむろに起き上がり携帯を取り出し電話をするミサト

ターゲットは病院に行ったわ ガードよろしくと相手にいい電話を切りました

昨夜、リツコと長話したためまた布団に入って寝ちゃいました

ずばらなミサトさんですね

病院に着く前に青果店によりお見舞いの果物を買って
病院に向かいました

レイちゃんの病室に入りました

おはよう レイ加減はどう

おはようシンジ君 今日は大分いい

シンジ君の顔を見ると嬉しそうに微笑み答えました

昨日約束したとおりお弁当作ってきたよレイ

ありがとうシンジ君

本当にうれしそうなレイちゃんです

食後の果物も買ってきたから後で食べようね

はい

昼ごはんまで時間があるので備え付けのテレビを二人で見ながら時間が過ぎて

昼ごはんの時間がきました

あまりおいしくないかもしれないよ　といいながら弁当を差し出す
シンジ

弁当を受け取ったレイちゃん

これすべてシンジ君が作ったの？

うんそうだよ

うれしいありがとう

真っ赤になりながらシンジ君食べさせてというレイちゃん

そうかカモフラージュとはいえけがしてるんだっけ
と心で思いながら

真っ赤になりながら返事をするシンジ君

うんわかったよ

ラブラブ空間を醸し出していました

見ていられませんかこのあま~~~~~いラブ
ラブ空間

食後の果物もかすむ甘さ

数時間が過ぎ

名残惜しいですが面会時間が終わりました

もう帰らなきゃいけないね

さみしそうに告げるシンジ君　レイちゃんも泣き出しそんな顔で

行かないでと泣き出す始末

また明日も来るからなかないでレイ

うんきつとよ　絶対にね

氷の無表情と言われたレイちゃんがこれほど表情豊かになるとは
作者も予想外です
あいですね~~~~~

また明日ね

うんまた明日

と病室を出るシンジ

エレベータの前で待つシンジ君

ドアが開くとそこにはゲンドウがいました

シンジここで何してるんだ

そんなこと父さんに関係ないだろう

レイのお見舞いに来たんだよ

そうか

とエレベータから出るゲンドウ

何も言わずに去っていくゲンドウ

うれしい気分を台無しにされた気分で帰っていききましたシンジ君

レイの病室に入るゲンドウ

レイ具合はどうかと聞くゲンドウ

氷点下の氷の表情で答えるレイちゃん

問題ありません と答えるレイちゃん

もうレイちゃんの心はゲンドウはおりません レイちゃんの心に
住んでいるのはシンジ君ただ一人

レイの表情に違和感を覚えたゲンドウですが
気のせいと思いながら

退院したらまたステーキでも食べにいきましょうという
病室を出ていきました

シンジ君 シンジ君また会いたいそばにいたいと泣き出すレイちゃん
病室に泣き声だけがひびいていました

その夜のことです

夕食を食べた後ミサトさんがこう言いました

シンジ君 月 日から第壱中学校にかよってもらいます
レイも通っているから楽しみでしょうシンジ君

はいと嬉しそうにしていました

ほんとシンジ君はレイのこと好きなのねと思うミサトでした

弁当（後書き）

シンジ君とレイちゃんの甘いお話
如何でしたでしょうか

つぎはシンジ君の学校生活のお話です

ではまた次のお話をお待ちください

登場人物紹介

登場人物紹介（今更ながらですね）

碇 シンジ

本作品の主人公

特務機関ネルフ

階級は特務三等曹官 サードチルドレン

エヴァンゲリオン初号機パイロット

さまざまな不幸に見舞われながら元気よく生きる男の子

天地君が突然精神に憑依されても動じないほどの心の強さをもった

男の子

恋愛に関しては驚くほど奥手

レイちゃんとは相思相愛

頭脳は碇 ゲンドウ 碇 ユイの血をひき、成績は常にトップクラス

運動は苦手、チェロはそこそこ

のちに天地君から「光鷹真剣」を指南してもらいます

料理は腕は超プロ級五つ星クラスのレストランが開けるほど

碇木砂沙美樹雷と為を張れる

怒るとミサトさえ怖がらせるほど

碇木 天地

本作品の陰の主人公

天地無用！魍皇鬼シリーズの主人公

本作品ではシンジ君の精神世界でのお兄さん役です

現実世界ではレイのコピー体に憑依して陰で暗躍しております

シンジ君の前に現れるかは今のところ未定です

剣の腕前は「光鷹真剣」の使い手達人級

自力で「光鷹翼」を展開できる唯一の存在

シンジ君に剣を指南します

恋愛に関しては驚くほど奥手

白眉 鷲羽

宇宙一の天才科学者

天地無用！魍皇鬼シリーズに出演中

本世界では精神世界で活躍中

レイのコピー体に憑依してたまに出てます

マッドサイエンティスト

どんな活躍をするか作者にもわかりません

綾波 レイ

本作品でのヒロイン

特務機関ネルフ

階級は特務三等曹官 ファーストチルドレン

エヴァンゲリオン零号機パイロット

シンジ君の恋人

リリスと碇 ユイとのハイブリッド

但しリリスの遺伝子のほうが強いためほとんどユイに遺伝子情報が

ありません

唯一あるとすればユイの顔にしているぐらい

子孫を残すことができます

シンジ君とは超ラブラブです

葛城 ミサト

特務機関ネルフの作戦部長

階級は特務三等尉官

作戦は臨機応変な用兵をします

たまに変な作戦を立てますが 意外とうまくいくことが多い
生活面ではずばら ごみに埋もれても平気

えびちゅう命 えびちゅう命 えびちゅう命 えびちゅう命

面白いことに首を突っ込みたがります

ある作品でのヒロイン 悲恋の経験あり

加持とは大学時代の恋人関係

赤木 リツコ

特務機関ネルフの技術部長

階級は技術三等佐官 唯一の士官

葛城 ミサトの親友 大学時代からの腐れ縁

碇 ゲンドウの愛人 のちに離反

徹底的なテクノロジー信奉者

赤木 ナオコ

特務機関ネルフの初代技術部長

階級は死亡しているためなし

マギシリーズの生みの親

マギの中でお休み中

鷺羽にたたき起こされて覚醒

マギのバージオンアップを鷺羽とともにする

元碇 ゲンドウの愛人

現実世界に出るかは未定

碇 ゲンドウ

特務機関ネルフの総司令官

階級は特務一等将官

認めたくはないですがシンジの父親

この物語における不幸の大元締め

頭脳は優秀

シンジ君を不幸に追いやり レイちゃんを氷の無表情に
追いやった悪人

ユイを復活させるためなら何でも実行する行動派

碇シンジ、赤木親子すら駒にする悪人

ユイ命 ユイ命 ユイ命 ユイ命

碇 ユイ

特務機関ネルフ

現時点では死亡しています

エヴァンゲリオンの基礎を作った科学者

シンジの母親 改心しました

鷺羽によりシンジの不幸を聞かされ改心しました

ゲンドウを憎んでいます

頭脳は天才です

裏死海文書を解読した唯一の人

この物語におけるキーパーソン
現実世界に出現します 時期は未定そんなに遅くはないです

冬月 コウゾウ

特務機関ネルフの副司令官

階級は特務次席将官

ゲンドウ ユイの大学時代の恩師

ネルフの良心

ゲンドウの言動や行動に頭を悩ます苦勞人

胃痛もち はげるかも

ゲンドウの裏の補完計画はしりません

ユイを本当の子供のように思ってます

ゼーレ

人類補完計画を画策し執行する力を持った老人たち

裏の世界を牛耳ってる老人集団

ゲンドウすら駒に扱えるほどの権力と財力を持った集団

真の裏ボス

こののちほど出る方たち

惣流 アスカ ラングレー

特務機関ネルフドイツ支部

階級は特務三等曹官 セカンドチルドレン

エヴァンゲリオン二号機パイロット
ヒロイン候補

TV版とは違う性格の持ち主
出会うまではひ み つ

洞木 ヒカリ

第一中学校

のちに特務機関ネルフに所属 フォースチルドレン
階級は特務三等曹官

エヴァンゲリオン四号機パイロット

この物語では使徒の憑依はありません
ヒロイン候補

鈴原 トウジ 相田 ケンスケ

出ますが

大けがをして長野の学校に転校します
妹云々はこの物語ではありません

伊吹 マヤ

特務機関ネルフ

マギの専属オペレーター

赤木 リツコの高校大学時代の後輩

科学者としての赤木リツコは尊敬しています
性格はノーマル

コピー体の天地君の恋人になる予定

天地君ファミリィ

幾人かは出演予定

登場人物紹介（後書き）

階級等はある覚えですので間違っているかもしれませんが
教えていただければ直します

初登校（前書き）

ご指摘がありましたので作者視点 精神視点 現実視点の書き方を
改変します

作者視点は今まで通りで行間を開けます 精神視点では（ ） 現実
視点では名前をはっきり書いたうえでこれから行こうと思います

初登校

さて楽しい病院通いも終わり登校日が来ました

シンジ君今日から学校だね

気兼ねなく中学生生活を送ってね ミサト

はいミサトさん

どんなことが始まるか今から楽しみです シンジ

(いい学校生活が送れることを祈ってるよシンジ)

(ありがとうございます兄さん)

じゃあ車に乗ってしゅっぱつよ~~~~~ ミサト

(げっまたミサトさんの運転かいやだよ兄さん、俺も乗りたくないよシンジ)

なっなによそのいやそうな顔はシンジ君

そんなに私の運転する車が嫌なの ミサト

それはそうでしょう気を失う運転なんて誰も乗りたがりはないと

思いますよ

そつつつんなことはありませんよ ミっミっミっミサトさん
ンジ

じゃあ乗って乗って 出発進行 ミサト

いやいや乗り込むシンジ君でした
暫くは普通の運転でしたが後続車に抜かれた途端 目の色が変わっ
たミサトさん

私の前には何人も走らせはしないわよ、ターボオン ミサト

学校に行くだけなのに峠まで走り出すミサトさん
どこの世界の話ですか某漫画の頭文字じゃないんですから

（はじまつつつつつつつつたああああああああああ
ミサトさんの暴走が）

もう気を失うシンジ君でした

シンちゃんもうおねむなのだらしないわっよ

これくらい優しい運転なんだから

ミサト

これで優しい運転だなんて本気になったらどんな運転なんでしょう
空恐ろしいものを感じる作者です ガクブル
地獄の運転も学校まで続きようやく到着しました

シンちゃん起きなさい 学校に着いたわよ ミサト

ここはどこ？ 私は誰？

シンジ

なに言ってるのシンちゃん

ここは学校よ
ミサト

やっと着いた学校に、

シンジ

（本当についた良かったシンジ）

（、、、、、、何も言うことがありません兄さん）

二度とミサトさんの車には乗りません！いいですねミサトさん

わっ
わかつ
たわよ

そ、そんなに言わなくても厳しか　　〃〃〃　　〃某美少女の月の戦士風に答えるミサト

そんなこんなで校内案内や教師紹介を受けたシンジ君

（それじゃあ兄さんまたあとで会いましょう）

（あれにうつって散歩でもしてくるよ）

（はいまたあとで）

今日から転校してくる碓 シンジ君だ慣れないこともあると思うが
仲良くしてあげてほしい 先生

初めまして 第二新東京市から来ました碓シンジです
慣れないこともあると思いますが、仲よくしてくださいね ニッコシ

きゃあああああつああと真っ赤になる女性徒
一目見てファンになる生徒
ファンクラブを結成し始める女生徒

此れは売れるというメガネの男子

けつと悪態着く似非関西弁を喋る男子

皆さんそれぞれの感想を漏らしております
男子にはあまり好意を持たれてはいませんね

女子にはいうまでもありませんね

静かにしなさいよ！授業が始まらないわよ

私の名前は洞木 ヒカリ このクラスの委員長をしています
わからないことがあれば私に聞いてね

ヒカリ

ありがとう 洞木さんこれからもよろしくね ニコリ

シンジ

シンジの必殺ほえみに射抜かれたヒカリ

こっこれからよろしくね

ヒカリ

そう答えるのが精いっぱいヒカリちゃんでした

のちの碇シンジファンクラブ会員番号N o 3 洞木ヒカリ

もちろんN o 1はレイちゃん、N o 2は惣流 アスカ ラングレー

碇シンジファンクラブ御三家の始まりでした

シンジを守り 愛し 慈しむことを誓い合う

鋼鉄の御三家

そんなこんなで波乱の学校生活が始まりました

わいの名前は鈴原 トウジや

僕の名前は相田 ケンスケです

ぼくは碇シンジですよろしく

当たり障りのないあいさつで終わろうと思ってたシンジ君
行き成りからまれてしまいました

わいはおまんを殴らなきゃならん　ならんのじゃ　トウジ

なぜ僕が君に意味もなく殴られなければならないの　シンジ

鈴原は委員長のこと好きだったんだよ
だから黙って殴られておけよ　ケンスケ

そんな理不尽な理由で殴られるわけにはゆかない
僕が悪いわけじゃないじゃない
逆恨みだよ　シンジ

うるさいわ黙ってなぐられとけ！　トウジ

殴られそうになったとき　ヒカリちゃんが割り込み
鈴原を平手でたたきました

鈴原最低ね！男らしいと思ってたけど幻滅だわ
もう話しかけないでね

たたかれた鈴原君は呆然とほほを触り教室を出て行ってしまいました

おい トウジ待てよと追いかけて行ったケンスケ君です

後に残ったシンジ君たち

男子と女子に言いました

鈴原君は鈴原君なりの理由があつての行為だと思う

男としては分からないことでもないと思う

だから彼を許してやってほしい

お願いします

シンジ君自身過去にそういつたいじめがあつたので

鈴原君に気持ちがかかるための発言でした

天地君との交流があつてのたまものがです

トウジ君にシンジの気持ちが伝わったかは定かではないですが
教室にいる生徒はシンジの言葉を胸に

トウジが帰ってきたら仲良くしようと思いました

ヒカリちゃんの違いました もっとシンジのことが好きになってい
きました

自分より他人を大事にするシンジが

そんなこんなでトウジとケンスケは放課後まで帰ってくることはな

か
っ
た

初登校（後書き）

初登校とトウジたちのやり取り
うまく表現できたかはわかりませんが
精いっぱいにしました

また次のお話をお待ちください

シンジの修行（前書き）

天地君によるシンジのために行う剣の修行ゆえに

天地君とシンジ君しか出ません

精神世界でのお話ではありません

ちなみに天地君も実体化をしております

読みにくいと思いますが御了承ください

シンジの修行

まず精神の統一から始めるよシンジ
目を閉じなさいシンジ

耳を澄ませて周りの音を聞きなさい
いろんな音から俺だけの声に集中していきなさい

どんな音にも動じないように集中しなさい

今は虫の音や風の音や喧噪などがお前の耳に聞こえてくる
その音に惑わされていると思う
俺の声が聞こえにくいと思う

だんだん俺の声が小さくなっていく

集中してくれば自ずとわかるようになる

どこから俺の声が聞こえるか指で示しなさい

そう今はお前の前にいるだが次はどこにいるかあててみなさい
違うそちらには俺はいない

もつと集中しなさい

まだまだ集中が足りない

失敗 まだだ

ほかのことは考えるな！

声に集中しろ！

そう、そうだ今の感覚を忘れるな！

失敗！惑わされすぎだ

気を抜くな！

そんなことでは最愛のものなど守れはしない

まだだ！

お前はそれだけなのか！

甘えるなシンジ！

エヴァは鎧でしかない

身を守るには自分の精神を鍛えるしかない

技術は後からついてくる

自分を信じられないものが他人など信じることはできない

俺も同じことをじつちゃんに言われた

自分の力を信用しろ

お前にはできるそれだけの力がある

心から信用しろ俺の言葉ではなく自分の内なる力を

そうだそれでいい

天地君の言葉を精いっぱい追ううちに六角形の赤い色した薄い膜が
現れました

できたじゃないかそれがお前の心の中の力だ

目を開けてみるシンジ

目の前のものを見ても

シンジ君は A Tフィールドを張っていました

兄さん言われて目を閉じました

初めは兄さんの声が聞こえませんでした周りの音に惑わされて

周りの音が大きくて
もっと集中しろと

だんだん周りの音より兄さんの声がかすかに聞こえてきました指を

させというので
さしました

初めは目の前から聞こえたので正解しましたが

次は当たりませんでした

兄さんが怒鳴りました

また指をさしました でも当たりませんでした

もっと集中しないと

もっと何も考えないように

もう周りの声は気にならなくなりました

だんだん兄さんの気配を感じるようになっていきました

でもまだ当てることできません

自分が守りたいと思うことしか考えなくなっていきました

レイのことを心から守りたいと

そして自分のことを信じる

信じられるように

兄さんも同じ修業をしたと

心と体の修行を

確かにエヴァは鎧でしかないそう思います

心が心が大事だと思えるようになりました

もう自分の声すらも信じていました

兄さんに頼らないで

目を開けると 兄さんに言われた

そこには薄いですが赤い六角形の膜が張ってありました

それが ATフィールドでした

まだ薄いですがATフィールド発現でした

そして木刀による修行が始まりました

何度も何度も兄さんに打ち込みますが
紙一重で交わされてしまいます

さすが兄さんと感動したら 撃ち込まれました

なにばーっとしてる 集中しろと言ってるだろう

本気で殴られました

もっと打ち込まないといけないな

夜になるまで何度も何度も兄さんに修行つけてもらいました

驚いたシンジもう木刀を握れるくらいに成長したんだな

俺の場合じっちゃんに木刀許可してもらったの

何年もかかったのに

でもまだまだだな

気を抜くとすぐ俺に打ち込まれてこぶを作る

ある意味才能だなシンジの場合

悪党とはいえゲンドウの血筋恐ろしいなこのまま成長すれば

俺など足元にも及ばない位強くなるな

そうです ゲンドウの遠い祖先は何人もの剣豪を輩出する血筋です
文武両刀を地で行く血筋だったのです

ですが時代が過ぎるうちに血が薄まり頭脳だけで身を立てる人が
多く出てきて ゲンドウという悪党が出てきたのです

しかし隔世遺伝でしょうね

シンジ君に現れたのでしょうか

もしこのような時代じゃなければ決して現れることはなかったでしょうね

シンジ君は

時代が生み出した稀有の少年それがシンジ君

これからは学校が終わったら修行するからなシンジ

はい！兄さん

僕は強くなって見せるレイのために

夕日に向かって誓うシンジ君でした

シンジの修行（後書き）

シンジ君の修行編でした

なかなかうまく表現ができません
作者の力不足かもしれませんが

ではまた次のお話をお待ちください

レイの退院（前書き）

レイちゃんの退院です

レイの退院

レイちゃんの退院の日が来ました

待ち遠しい日々でしたレイちゃんにとっては
早くシンジ君と登校したいとねがっていましたから
でも迎えに来たのはシンジ君じゃありませんでした

赤木博士が司令に命令されて迎えに来ました
無表情のまま病院から連れ出されて司令が待っているレストランまで
連れていかれました

レイ退院おめでとう やっとプランの実行に移れる
お前も余計なことを考えずにこれからを過ごしなさい ゲンドウ

（以前は司令に声をかけられただけで心が温かくなってきたのに
今は司令の言葉もうれしくない こんなところにはいたくない
心が寒くなっていくのを私は感じています
シンジ君といると心がポカポカしてもっとシンジ君とお話したい
シンジ君ともっと居たいと感じている私です）

レイ

どうだレイここのレストランは最高級の料理を出す店だ
うれしいだろう

ドウ

ゲン

美味しいです司令

レイ

（ここの料理を食べてもちつともおいしくない シンジ君の作るお弁当が

食べたい シンジ君の料理が食べたい
心がそう叫んでいます 泣いています

シンジ君 シンジ君シンジ君

でも言わないと司令が不機嫌になるのでおいしいと言わざるを得ない）
レイ

レイちゃんにとって居心地の悪い食事時間です 早く時間が来てほしいと

思うレイちゃん

なによりもつといやなのが赤木博士と一緒にいることがとっても不愉快になるレイちゃん

（いつも私のことを実験動物のような目で見ています

以前の私ならそんなに気にもしなかったのですが

シンジ君と知り合ってから赤木博士の視線が嫌で嫌でたまらない）

レイ

御馳走様でした 司令おいしかったです

レイ

また来よう レイ ゲンドウ

ではこれから私は赤木博士に用があるので
レイはタクシーに乗って帰りなさい ゲンドウ

はい わかりました司令 これで失礼します レイ

タクシーが来たのでレイちゃんは帰りました

（途中で気分が悪くなり運転手さんをお願いして
停車してもらって私は公園のトイレで食べたものをすべてはいてし
まいました

口の中が気持ちが悪く公園でうがいをして
タクシーに乗りました 私のマンションではなく
シンジ君がいるマンションに行き先を変更をお願いしました）
レイ

シンジ君のマンションに着きました 早くシンジ君に
会いたいと思うレイちゃんでした
シンジ君は今日レイちゃんが退院することを知りませんでした
ミサトさんも知らないことでした

シンジ君 シンジ君 シンジ君 シンジ君 レイ

（激しくドアをたたきシンジ君の名前を連呼している私
呼び鈴も押すのももどかしいほど焦っていました）
レイ

何事かと思いドアを開けたシンジ君
行き成りシンジ君に抱き着くレイちゃん
安心したらなっていたレイちゃん

レイ どうしたのそんなに泣いて今日退院したの？何がそんなに悲
しいの
訳を話してレイ シンジ

退院したら真っ先にシンジ君のところに行きたかったの
でも司令に無理やり連れ出されて レストランで食事して
赤木博士にいやな目で見られて 心が悲しくなって 公園のトイレ
ではいて

うああああああああああああん
レイ

そうか そんな目にあっていたんだね 知らなかったよレイ
退院日を僕が知っていたら真っ先に迎えに行ったのに
つらい思いをさせたんだね ごめんよレイ
僕はここにいるから安心していいよレイ
シンジ

うん シンジ君 レイ

今は僕以外誰もいないから安心して
ミサトさんも本部に行って今日は帰ってこない
だからね 泣き止んでレイ
シンジ

女の子の涙にはとことん弱いシンジ君
天地君も同じでした

（兄さん レイをここにとめてもいいね
このまま返したら レイがおかしくなるかもしれない） シンジ
（うんそうしたほうがよさそうだねシンジ
シンジの恋人なら僕にとっても妹分だからね） 天地

自分のことは棚に上げてる天地君

今日は腕によりをかけてレイの退院祝いをしなくちゃ
楽しみにしててレイ
シンジ

真剣に料理してるシンジ君をうつとりした目で見てるレイちゃん
おもむろに立ち上がってシンジ君の料理を手伝い始めました

レイ向こうのリビングで待ってていいよ
テレビでも見てて
シンジ

いや！シンジ君のお手伝いがしたい
だめなの？

出ましたレイちゃんのお願い攻撃
断ることができませんねシンジ君は

じゃあ テーブルにお皿を出して僕が盛り付けていくから
ンジ

シ

はい シンジ君 レイ

うれしそうにテーブルにお皿を出していくレイちゃん
新婚さんみたいで

天地君もあきれるほどのアツアツさんでした

（やれやれレイちゃんもううれしそうにしてるな
シンジもうれしそうだよ俺のいる場所ない）

天地

というか今はシンジ君の精神にいる天地君
逃げる場所がありません ご愁傷様天地君

天地' は今鷺羽さんのラボで眠っています
天地' とはレイちゃんのコピー体のことです

楽しい食事時間を送ったシンジ君とレイちゃん

早々もう一人の同居人を紹介するのを忘れてたシンジ君

ペンペンおいで紹介したい人がいるから シンジ

リビングの冷蔵庫から出てきたペンギンのペンペン

レイに紹介するね 温泉ペンギンのペンペンっていうんだ
仲良くしてあげてね シンジ

こんにちはペンペン 私 綾波レイというの
仲良くしてね レイ

くわあああああくよろしくレイ> ペンペン 器用に羽をあ
げてます

人間の言葉がわかるペンギンなんだ シンジ

そう 賢いのねペンペンって レイ

そうだレイお風呂に入ってきて
いい湯加減だから ゆっくりしておいで シンジ

シンジ君もいっしょ、、、、、、、、 レイ

上目使いでシンジを見るレイちゃん

ダメダメダメこれだけはレイのお願いでも聞けないよ
お願いだから聞き分けてレイ

しぶしぶお風呂に向かうレイちゃんです

あ~~~~びつくりしたっレイがあんなこと言うなんて驚いた
ンジ シ

（俺も驚いたよ よく我慢したなシンジ）

でもまだまだ甘いシンジ君と天地君の二人です

シンジ君もお風呂に入って 疲れを癒してきました
お風呂も入り楽しい時間を過ごした二人ですが
もう休む時間が来てしまいました

レイ 客間にお布団敷いたからここで休んで シンジ

シンジ君も戸締りをして自分の部屋に向かいました

眠りに入ろうとしたシンジ君行き成りふすまが開き
そこにレイちゃんがたっていました

シンジ君さみしいから一緒に寝て お願いだから
シンジ君 ね お願い
レイ

今度は断れないと思ったシンジ君
おいでとレイちゃんを手招きしました

（絶対に手を出すんじゃないぞ いいな シンジ もし手を出したら承知しないぞ） 天地君
（もちろん手を出しませんよ 大切にしたいレイに悲しい思いはさせたくないよ兄さん） シンジ
（それでいい、それでいいシンジ） 天地君

向こうにいる天地の恋人たちには手を出せない天地君
よく言えたものですね

横で寝ているレイちゃんのぬくもりや吐息を感じながら
悶々として寝ることができないシンジ君でした

（頑張れよシンジ） 天地

勝手なことをいう天地君でした

レイの退院（後書き）

レイちゃんが退院してきました

ゲンドウに悲しい思いをして

泣きながらシンジ君のマンションに来たレイちゃんのお話でした

最後はラブラブで終わりました よかったねレイちゃん

ではまた次のお話をお待ちください

レイの登校（前書き）

レイちゃんの登校とノイケさんの登場

レイの登校

今日からレイちゃんが再登校します、待ちどおしい日ですレイちゃんには
いとしいシンジ君と一緒に勉強できます

「おはよう」

レイちゃんがあいさつしました
みんなが驚いた顔をしています
それはそうでしょうね今までレイちゃんがあいさつしたことなかったんですから

「どうしたのみんなそんなに驚いておかしいの私があいさつするの
が」

こんなにしゃべるレイちゃんをあんどりとした表情でみんなが見ています

「おはよう綾波さんけがの具合はどうなの、大丈夫？」

「おはよう、洞木さん、ありがとう大分ましになりました、心配かけてごめんなさい」

真打登場

「おはよう、みんな、レイ出てきたんだね、今日から頑張ろう」

「おはよう、シンジ君、うんがんばる」

微笑みを浮かべて挨拶していました

「おはよう、碇君、」

「おはよう、洞木さん、レイのけがまだよくないから、サポートよろしく」

「うん、任せておいて、碇君」

「レイ、洞木さんに、レイのことお願いしてたんだ、女子は女子に任せたほうがいいと思ったから、以前お願いしてたんだ」

「僕にできることがあれば、何でもするけどね、そんな顔しないで、レイ」

少し不機嫌そうなレイちゃんです

「そういうことは先に言っただけいいな、シンジ君」

「綾波さんそういうことだから、仲よくしましょうこれから、ヒカリって呼んで」

「ありがとう洞木さんっじゃなくてヒカリさん」

ニコニコと二人のやり取りを見ているシンジ君
周りのみんなも二人の周りに集まってきました

「みんなもよろしくねレイのこと見てやってね」

レイちゃんの笑顔が見たい男子は率先してするでしょう

女子はシンジ君にいいところを見せたいがために頑張るでしょう

「碓君、綾波さんのことはクラス全員でお世話するからね、ね、みんな」

男女子が一丸になった瞬間でした

149

しかし、その輪の中に入らない二人組がいました
そうですあの二人です、相田君と鈴原君です
以前のやり取りがあるため入るに入れない状態です

洞木さんだけは二人のことを許してはいませんでした

クラス委員である彼女は必要な会話だけしてあとは何も言わないので
クラスのみんなも洞木さんを気にして喋ろうとはしていませんでした
自業自得とはいえ憐れとは思いますがいたしかたありません

「洞木さんもう彼らを許してあげてよ、僕からもお願いするからね」

ヒカリさん」

ヒカリと呼ばれて内心うれしくなってる ヒカリちゃん

「シンジ君がそういうならね、鈴原君、相田君が真剣に謝るなら」

後ろで女子が前の顛末をレイちゃんに話していました、
事の顛末を聞いたレイちゃん氷の無表情になり二人をにらんでいます

「レイ、そんな顔しないの、僕ももう気にしてないから」

「シンジ君がそういうなら私は、何もいないわシンジ君」

「ありがとうレイ、わかってくれて」

氷が解けてまたにこにこしてきました

「鈴原君、相田君、謝らなくてもいいからね、僕ももう何も思っていないから」

「碇、ホンマにすまんワイがわるかったこの通りや」
頭を地面にするくらいの勢いで謝る鈴原君

「碇、本当にごめんな、反省してる」

相田君も鈴原君と同じようにして謝っていました

「碇、ワイのこと殴ってくれ、そうしてくれんとワイの男がたたん」

「碇、トウジはこんなやつなんだ、殴ってやってくれ」

「いや、僕は、鈴原君を殴らない、だってもう友達じゃないか、殴る理由がないよ」

「碇あんたはホンマの男や、惚れたで」

「じゃあ僕のこと苗字じゃなく名前で呼んでほしい、僕も鈴原君もトウジって呼ぶから」

「シンジ、これからもよろしゅうしたって」

「相田君も同じにしてくれるかな？」

「わかったよシンジ」

「よろしく、ケンスケ」

クラスが一丸となる瞬間です真のクラス一丸が完成しました

（良かったなシンジ、丸く収まって）

（ええ、兄さん、本当に良かったです）

「授業を始めるぞ、とその前に」

担任の先生が教室に入ってきました

「男子、喜べ、新しい副担任を紹介するから」

「神木先生入ってきてください」

きれいな女性が教室に入ってきました

「神木 ノイケです、短い間ですがよろしくお願いいたします」

（ノ、イケ、、、さん、どうしてここに、、、）

（兄さん、ノイケさんって兄さんの世界にいる婚約者候補ですよね）
（今は答えたくない、シンジ）

（天地様、ちゃんと紹介してくれないとだめですよ）

（はじめまして、シンジさん、神木ノイケ樹雷ですよろしく願い
いたします）

新任のノイケさんにみんなが質問してるとき

精神世界ではこんなやり取りをしていました

（もしかして、鷺羽ちゃんの仕業？）

（それもありますけど、瀬戸様の要請でもあります）

（瀬戸様の、、、、ただでは済まないよシンジ）

（瀬戸様って前、兄さんが言ってた樹雷の鬼姫といわれる樹雷の裏
の最高権力者ですよね）

（そうです、シンジさん、瀬戸様に気に入られて無事に済んだ方は
だれ一人いません、樹雷皇ですら瀬戸様にはかないません）

（、、、、そんなすごい方なんだ、僕も気を付けないと）

（もう遅い、お前ももう目をつけられている）

（げっ、、、、助けてください兄さん）

（俺にはどうすることもできないよ、あきらめろシンジ）

（、、、、）

（瀬戸様よりシンジさんに

御託を聞いています）

（ジンジちゃん、そちらがうまくいったらこちらにおいで、だそう
です）

（断ったらどうなるかわからないわよ、ほっほっほっ、です）

（にいいさあああんんん）

（シンジ、骨は拾ってやる）

（天地様にも御託があります）

（天地ちゃん面白いことになってるわね帰ってきたらしっかりお話
してね、だそうです）

（終わった、終わってしまった、帰りたくないあちらには）

（にいいさああん、しんじいいいい）

（詳しい話はまた夜にお聞きしますね天地様）

とことん、不幸体質のシンジ君と天地君でした

隣のレイちゃんはニコニコとシンジ君を眺めていました

シンジ君は憂鬱な気分で放課後を迎えました

レイの登校（後書き）

レイちゃんの登校シーンと

鈴原君相田君との仲直り

ノイケさんの登場をえがきました
面白くなってきましたね

ではまたのお話をお待ちください

リビングでの密談（前書き）

下校中のシンジ君とレイちゃんの話
リビングでのおはなし

リビングでの密談

憂鬱な気分のシンジ君、かたやニコニコ気分のレイちゃん
二人そろっての帰宅している途中での会話

「どうしたのシンジ君、新人の神木先生を見た瞬間
すごく驚いた顔してたけど」

「前に話したことあっただろうレイが入院してる時に」

「ええっとシンジ君の精神の天地さんという方がいるって話」

「そう、天地兄さんがいるって話したよね」

「うん、きいた」

「実は、あの新任の神木先生、兄さんの婚約者候補なんだ」

「えっ、向こうの世界にいるっていう天地さんの……………」

「そう、何らかの方法を使って入り込んできたんだ」

今、天地君はシンジ君の精神に憑依して二人の会話聞いてます

「カニ頭の鷺羽さんが何らかの方法を使ってこちらに呼び寄せた」

「カニ頭はひどいな、シンジ殿」

鷺羽ちゃんの登場

「わっ 驚羽ちゃん、驚かさないで下さいよ」
「わっ 驚羽ちゃん……びっくりした」

行き成り出てきた驚羽ちゃんに驚く二人

「こんにちは、シンジ殿、レイちゃん」

挨拶を返す二人

「天地殿の場合、美星の介入、実験の失敗による爆発の結果こちらに無理やり
とばされたけど」

「私やノイケ殿の場合は案外簡単だったんだよ、天地殿という
道しるべがあったから、それさえ探せればね」

「見つけてしまえばあとは簡単、向こうの入り口にポイントマーカー
ーを作成し」

こちらの出口にポイントマーカーを打ち込んで道筋さえ作ればいい」

「簡単な作業さ、探し出すのに手間取ってしまったけどね」

「でっ私が先にこちらにきて作業したって寸法さ、シンジ殿
であとからノイケ殿が来るという寸法さ」

「あの時はこちらにまだ実体化できるものがなかったから
アストラルボディー応急的に実体化できるようにして
あそこにいた看護婦さんの衣装を借りて着てたの、あの時は」

「私以外の人選はかなり揉めたんだよ、リョウコは問題外
あの子が来たらたぶんシンジ殿や天地殿がいっぱい困るよ」

「アエカの場合、問題はないんだけど、やっぱり問題を
起こす可能性がある、かもっ？」

（リョウコとアエカさん確かに問題あるあるかも）

シンジの中でつぶやく天地君

「美星は論外、天地殿が飛ばされたそもその原因
あの子がかかわってうまくいったためしがない、リョウコ以上に危
険な存在」

話しか聞いてないシンジ君でも想像できる

「ササミちゃんがなくなったら、向こう餓死するよ」

「最後に残ったのがノイケ殿というわけさ、榎木家の
常識人神木ノイケ殿」

（確かに、ノイケさんなら安心できるなシンジ）

（そうですな兄さん）

（でもびっくりしたよ、行き成りノイケさんが来たから）

「シンジ殿、頭の中で会話しない」

シンジを指さす鷺羽ちゃん

「そうそう、レイちゃんに断らずにレイちゃんズの数人を使わせて
もらったよ」

「それは鷺羽ちゃんに、私の姉妹預けましたから構いません」

「今実体化してるのは、天地殿、ノイケ殿、と私、予定ではユイ殿、あと数人さ、」

「かつ母さんも、、、、実体できるの」

「安心なさい、シンジ殿、ものすごく反省して改心してるから」

「今はエヴァの中でユイ殿は眠ってる、実体化の準備は済んでるあとはいつするかを待ってる段階さ」

黙って二人の会話を聞いているレイちゃん

「えっサルベージは失敗してるんですよ失敗の結果が私なのにうつうつ」

「何度も失敗してる、、、、それがあの地下にいた魂のない私の姉妹たち」

シンジ君に抱き絞められながら泣くレイちゃん

「泣かないのレイちゃん」

「レイちゃんズのかすかな意識が言ってたよ、私たちのことは気にしないであなたの幸せだけを追ってって」

「以前にも言ったと思うけどレイちゃん、もう二度と自分の事予備だとか失敗作とか言ったり思ったりしちゃうだめだよ、いいね！

レイちゃん」

レイちゃんに優しく諭す鷺羽ちゃん

そうこうしてるうちにミサトのマンションに着きました

「あとは中で話しましょう」

リビングにて話す鷺羽ちゃん

「その時のサルベージは失敗するべくして失敗したのさ
それはそうさ、ユイ殿はその時戻る意思はなかったし、

コントロールしてたのが、今はマギの中にいる赤木ナオコ殿
ユイ殿のに嫉妬してた赤木ナオコが成功させるわけないさ

これが真実さ、シンジ殿、レイちゃん、」

「いいレイちゃん、レイちゃんは生まれるべくして生まれたんだよ
でなければ、シンジ殿に会えなかったんだよ、シンジ殿に会うのは
レイちゃんに課せられた

運命なんだよ、だから、シンジ殿と幸せになりなさい、それがレイ
ちゃんズに対する答えだよ」

「はい、はい、はい、絶対に幸せになります」
返事をしながら泣いているレイちゃん

「なぜ鷺羽ちゃんがそのことを知ってるんですか」
問いかけるシンジ君

「エヴァのユイ殿に、マギのなかにいる赤木ナオコ殿に聞いたから」

「シンジ殿に言っておくね、エヴァも、マギも私の手のうちにあるから

安心していいよ、マギは裏切らないよ、シンジ殿

エヴァはユイ殿がいるから味方だよ、シンジ殿、次にエヴァにのつたらおかあさんで

呼んであげなさい、きっと答えてくれるよ」

「そうそうそのうちに赤木リツコもこちらに寝返ってくるよ」

赤木リツコと聞いていやな顔をするレイちゃん

「レイちゃん大丈夫だよいやな顔しないでも、以前の赤木リツコではなくなってるから」

半信半疑のレイちゃん

「そうですか？、、、、、、驚羽ちゃん」

「任せなさいって私は 宇宙一の天才科学者だよ」

「細工は流々仕上げをごろうじろって」

「ねっそこにいる天地、殿、」

いつの間にか部屋の中にいた天地、君

「大変でしたけど何とかかなりそうです、驚羽ちゃん、」

「マギのなかのナオコさんが今、説得してると思います、あと少しだと思います」

そう答える天地、君

「わかったよ天地殿」

「わかったねノイケ殿、事情は今聞いたら通りだから学校のほうとネルフのサポート任せだよ」

「わかりました、鷲羽様」

また、いつの間にかリビングにいるノイケさん

レイちゃんはシンジ君の膝の上でいつの間にかおねむしております

「遅くなったので、今日は私がお料理しますね、みなさん」

「じゃあ僕も手伝いますノイケ先生」

「シンジさんはそのままでレイさん起こすのは忍びないでしょう
それと家では、教師じゃないんですからノイケでいいですよ」

「わかりましたノイケさん」

ノイケさんがいそいそと夕食を作り始めました

今日も徹夜のミサトさんです

「えびちゅう~~~~~シンちゃんの料理が食べたい~~~~~
~~~~~と」

ネルフの自分の執務室で書類に埋もれながら、わめいて勤務していました

## リビングでの密談（後書き）

下校中のお話とリビングでの密談  
レイちゃんズの意味のお話でした

次のお話をお待ちください

## マギの告白、リシロの苦悩（前書き）

マギからの告白に驚愕するリシロ  
そして……

## マギの告白、リッコの苦悩

シンジ君たちがリビングで密談してる頃、リツコさんの執務室では驚愕のことが起こっていました

「第三使徒のサンプルねこれが、あとは分析をだけね、」

自身の執務室に備え付けてるコーヒーメーカーからコーヒーを持って  
端末の前に戻るリツコさん、マギからのアクセスがあるのに気が付  
いた

「あら、マヤからなのね」

と、いつもの通りマヤからのメールとおもいを開いた

「なになに、なにこれ！ マヤからじゃない、」

そのメールのアクセス元を調べたりツコさん、アクセス元は

マヤの端末から出されたものであった、しかも今の時間は

マヤは家にいる時間、いないのは確認済みです

マヤの端末が立ち上がって  
るはずがない

しかし、出されたものは、間違いなくマヤの端末からであった

[.....]

驚愕しながらメールの続きを読み始めた

「拝啓、赤木リツコ博士、私は白眉鷺羽、知らない名前の人間からのメール

さぞで驚いてると思います、いまからあなたが読む内容は

貴方のアイデンティティー壊す内容です、今のゲンドウ氏との関係を維持したいなら

このまま破棄しなさい、でも、疑ってるのなら今から示すアドレスにアクセスしなさい」

メールの中ほどに示されたアドレスをクリックするリツコ

そこにはリツコの想像を絶する内容が示されていた、リツコの思考のする範囲を逸脱する

内容であった、ゲンドウがこれまで行った犯罪の証拠と、自身の母親赤木ナオコとの関係そして殺害の証拠、そして自分とゲンドウの関係を、そしてレイの過去が隠すことなく

明かされていた

「そんな、そんな、そんなことがあるわけない、あるはずがない

私はゲンドウに騙されていたの嘘よ嘘　嘘よ信じられない信じられない」

呆然としたリツコ、そして意識がなくなった

気を失っていたリツコが気が付いたのは午前3時を過ぎたころだった

そしてもう一つの端末が立ち上がっていた

「りっちゃん、りっちゃん、リツコ、」

もう一つの端末からの呼び掛けに気が付いたリツコ

そこには亡くなったはずの母ナオコの姿があった

「知ってしまったのね、できれば知らないほうがあなたのためであつたのに

りっちゃん」

「母さん、母さんは死んだはずよ、ちゃんとお葬式もしたのになぜ

そこにいるの？  
おしえてかあさん」

「確かに肉体はもうこの世にはない、でも科学者ならバックアップを取るのには常識でしょ

ましてや、生体コンピュータであるマギを作ったのは私、だから肉体の一部分をマギに残すくらい

「訳ない、かたんなことよ」

「それにゲンドウに殺される恐れがあった私は余計にバックアップ残さなければならなかった」

「なぜマギが三台のコンピュータであるか考えれば、おのずとわかるはずでしょ

女、母、科学者のわたしのおもいをマギにとっておいたの

そしてある方のおかげでただのコンピュータであった私を生きてる人間に戻してくれたの

肉体は機械だけど生きてる、生きてるのよ、わかった、りっちゃん」

「母さんの事情は分かったわ、じゃあかあさんは司令に殺されたの？」

「そう、ゲンドウに殺された、完成したMAGIから突き落とされて」

「~~~~~」

「わかった、りっちゃん、リツコ私のかわいい娘」

「今ならまだ間に合うわゲンドウとの関係を終わらせなさい、まだ間に合うから」

まだそんなに深くかわっていないのなら、たしかにレイちゃんへの仕打ちは

許されるわけではないけど、まだ間に合う、わかって、リツコ、私のように殺される前に」



母であるマギからの衝撃の事実、母の殺害、もうわけがわからない

最近のゲンドウの行動、レイにこだわる姿、シンジに対する姿勢、考えれば考えるほどすべての謎が

きちつと解けていく  
暫く  
潜考するリッコ

[illegible][illegible]

「わかったわ、母さん、私はどうすればいいの」

「ありがとうりっちゃん、そうね、表面上は今まで道理、こなしていきなさい」

裏では私とある方が進めていくから、それと今からいう人物のセキユリティーカード

を作らない、

白眉鷺羽、神木ノイケ、  
 榎木天地、のセキュリティカードをリンク  
 はりっちゃんと同等の  
 クラスで」

「わかったわ、母さん、その方たちはどういった関係なの？」

「サードインパクトを防ぐために絶対必要な方たちよ、人類補完計画を」

阻止するために協力をお願いしたの、そしてシンジ君とレイちゃんを守ってくれる方」

「わかつたわ」

「最後に、レイちゃんのことだけど、あなたが学生の時したってた女の子がいたでしょ

あの子が今のレイちゃん、かわいがっていたでしょ、りっちゃん」

「あの子が今のレイ」

「結局逆恨みしてたのねレイをいえユイさんを、それをレイに責任

転嫁してたのね

ロジックじゃないわね人生って」

「うふふ、そういうこと、」

猫のように、目を細めて笑うナオコさん

「さてと、もうこんな時間か」

「少し仮眠しましょう」

「お休み、かあさん」

「お休み、りっちゃん」

端末のすべての電源を切るリツコさん、そして執務室の備えられている

簡易ベッドで横になるリツコさん

マギの中のナオコさんは鷺羽ちゃんにメールを送りました

「子猫ちゃんを手懐けました、あとは鷺羽ちゃんにお任せします」

メールを受け取った鷺羽ちゃんにはやりと微笑んで、自身の端末操作に戻りました

そのころのミサトさんかというと

まだ終わらない書類の束に愚痴と涙をこぼすミサト

「おわらない~~~~~」

「えびちゅ~~~~~のませて~~~~~」

「シンちゃんのごはん~~~~~」

自身の執務室で大声でわめくミサト

そしてどこからか聞こえる音「ちい〜ん」

憐れミサトさん

## マギの告白、リッコの苦悩（後書き）

真実を知るリッコさん、ゲンドウからの離別を約束した  
リッコさん、協力を約束するお話でした

では次のお話までお待ちください

ある日の天地（前書き）

偶然のアクシデントに見舞われる天地君

## ある日の天地

シンジ君とレイちゃんが学校に行っているあいだのお話

一つの暗躍が終わった天地、君、気晴らしに町を歩いてました  
そして徹夜明けのマヤさんにぶつかった

「きゃっ」

「大丈夫ですか、お姉さん」

手を差し出す天地、君

「ごめんなさい、よそを向いて歩いてお姉さんに気が付かずに  
ぶつかってしまいました、ごめんなさい」

「いえこちらこそ、私のほうも気が付かなかったから、気にしないで」

「いえこちらが悪いんですからお姉さんが来ている洋服が  
汚れてしまいました弁償させてください」

偶然、天地君が持っていたジュースとクレープが見事にマヤの洋服  
をよごしてしまいました

しかも着ていた洋服が薄手のＴシャツにだったものだから余計透けて  
いました

「きゃあ、見ないでお願いだから、ね、みないで、」

とっさに隠したものだから余計に汚れが大きくなって悲惨な状態に

なり

もっと動けなくなりました

真つ赤なかおの天地君自分が来ていたジャケットを差し出す

「あの〜とりあえず僕のですみませんがこのジャケット来てください  
お願いします」

真つ赤になりながら天地のジャケットを受け取るマヤ  
見えないように素早く着るマヤ

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」  
必死になって謝るシンジ君

「もうそんなに謝らなくてもいいですお互い不幸な事故なんですから」

必死になって謝る天地がかわゆく見えるマヤ

「お詫びにお姉さんの洋服を買いに行きましょう」

「いいえいいえそんなの気にしないでいいからと」 必死に断るマヤ

「そういうわけにはいきません、迷惑をおかけしたんですから  
当たり前のことです」

と、引き下がらない天地君

あまり男性とお付き合いしたことがないマヤは必死に断ります  
暫く問答を繰り返した二人、  
やがて根負けしたマヤ

「わかりました、ご厚意をお受けします、」

「ありがとうございます、お姉さん」

「名前教えてもらえますかお姉さん、いつまでもお姉さんと呼ぶのもいけないですから」

「僕の名前は榎木天地といいます」

「私の名前は伊吹マヤです」

「マヤお姉さんですね」

とにつこり答える天地に、男性経験のないマヤが落ちるのはそんなに時間がかからなかった

「なんて素敵な笑顔できるの、シンジ君と同じ笑顔ね、天地君というのかかわいい」

と、思いながら一緒に洋服を買いに行くマヤと天地

「これなんかどうですか？マヤお姉さん」

「ちよつと派手かな、天地君」

「じゃあこつちはどうですか」

結構まよいながらマヤのために洋服を探す天地君

「なんか恋人同士の会話みたい、きゃ」

と思いながら真っ赤になつて自分の洋服を探すマヤ

ようやく天地君の選んだ洋服に決めたマヤ

お店で着替えて会計をすまそうとしたマヤ

もう天地君が支払った後でした

「わるいわ、天地君高校生でしょそんな大金支払わせて」

「いえ、僕が悪いのですから、支払うのは当たり前ですマヤお姉さ

ん」

「でも、、、、、じゃあこの後暇ですか天地君」

「ええ、特に何もすることもないですから時間はあります、マヤお姉さん」

と笑顔で答える天地に完全にノックアウト状態のマヤさん

おいおい、、、男性に免疫なさすぎですよマヤさん

というか高校生の天地君に一目ぼれしてしまうマヤさん

「ならこれから食事しに行きましょう、幸いおいしい店知ってるから」

「えっそれこそ悪いですよマヤお姉さん」

「いいからいいから」

無理やり天地君を連れて行くマヤさん、男性恐怖症はどこいったと叫びたい作者です

いつも男性に対して臆病なほど奥手のマヤさん

連れていかれたのこじんまりとした清潔そうなレストラン

「ここのお店私のお気に入りなのよ、たまに先輩と来るのよ」

「そうですか、ちなみにその先輩って男性ですか」

「違うわよ、女性よ、私の尊敬する科学者よ」

科学者と聞いて少し引く天地君

「大丈夫、素敵な女性よ先輩は、天地君、なんか天地君とお話していると今いる職場の上司のご子息と同じ感じがするのよね」

「そうなんですか、一度会いたいですね、その子に」

「かわいいわよ、弟がいたらあんな感じなのかな」

「天地君は違うわよ」

真っ赤になって口ごもるマヤさん



楽しくおしゃべりして食事を楽しむ二人でした

帰り際にマヤさんは自分の端末のメールアドレスと携帯の電話番号を天地君に

教えていました

天地君も自分に与えられてあるメールアドレスと携帯の電話番号を教えました

「今日はごちそうになりました、マヤお姉さん」

「素敵な洋服をありがとう、天地君」

「また会ってくださいか、天地君」

「ええ、時間が許す限りマヤお姉さん」

この日を境に天地君に急速に接近していくマヤさん

何度もデートしてますます好きになっていったマヤさん

そして天地の素性を知っても驚くこともなく天地君に協力していくマヤさんでした

偶然に知り合った二人でしたがうまく行ってよかったよかった

ある日の天地（後書き）

マヤさんと天地君が知り合うお話でした  
マヤさんの大胆さに驚く作者でした

また次のお話をお待ちください

冬月の過去（前書き）

冬月副指令の過去の回想

## 冬の過去

「私は特務機関ネルフの副司令である冬月コウゾウ」

（１０年前の職業は京都大学形而上生物学の教授をしていた  
私が主催する形而上生物研究室に一人の生徒が入ってきた

その生徒の名前は碇ユイ

「ユイ君は名家の碇家の長女で天才の名をほしいままにしている  
才媛、名家の子女というのをあまりひけらかさない気さくな女性  
学部は違うがその友達には惣流・キョウコ・ツェッペリン、その先  
輩で赤木ナオコ

という三人がよく私の研究室に入り浸っていた」

「教授」教授は奥さんもらわないのですか？ユイが立候補しましよ  
うか？」

「教授に似合うのはこの私赤木ナオコですわ」

「プロフェッサーに似合うのはこのワタシネ、惣流・キョウコ・ツ  
ェッペリンイガイにはナイね」

「おいおい年上をからかうもんじゃないよそれに結婚できなわけじ  
やないんだよ

好きな女性の一人や二人いないわけじゃないんだよ」

「それは知っていますよ先生がおもてになるのは知っています・・・

」

「父が言っていましたよ、冬月は昔からもててたからな、あいつは同窓生の中で

最後まで結婚しなかった唯一の男だったと

もててる癖に結婚しないから余計に見合いさせるんだって張り切って見合い進めてもことごとく断っていたからなとこぼしてましたよ」

「ははは、ユイ君の父上はことあるごとに私に見合い進めてきてるいまもね

困ったものだ君の父上には」

（しかし私の心の中にはある女性が住んでいる、ユイ君のお母さんユイ君と違い普通の女性だった、優しくて明るくて穏やかな笑みを浮かべる

タンポポのような女性）

（そうあれはいつのことだったかなたしか私が高校生の時だったある雨の日に、傘を忘れた私はある本屋のまえで雨宿りしていたその本屋に偶然その子が本を買いに来ていた、あわてていたのか私にきずかず私にぶつかってきた、私は勢いを殺すことができずにこけてしまった、制服はびちょびちょになって汚れてしまった

私は立ち上がり、「君、怪我はないかい、あわてていたようだけど」

その少女は言うには、父に頼まれ本を買いに行く途中で雨に会い本屋に飛び込んだ

所、私がいたということだったらしい

その少女は必死になって謝ってきた

「ごめんなさい、私が飛び込まなければあなたはぬれなかったのに

本当にごめんなさい」

幸いにしてけがもなくただ濡れただけだから

「気にいしないでいいよ」

とその女の子にいい、もういいやどうせ濡れてしまったから  
と足早に、雨の中を去って行った、

もう会うこともないとその日のことは忘れていた

それから半年後、私はまた彼女に会った、

京都大学の入試試験会場で

私は驚いた、あの時の女の子がそこにいたから

「あの時の君、君も京都大学に入学するのかい？」

私に声をかけられてびっくりしていた女の子

「その節はどうもご迷惑をおかけしました」

「はい、父がこの大学に勤めているので自然と目指すようになり  
ました」

「ちなみに聞きますがお父様のお名前なんと言うんですか？」

「父の名前は碇　と申します」

形而上生物学という学問の世界では超有名な学者で京都でも指折りの  
名家としても知られる

私も彼を指して形而上生物学学者になるためにここを目指して  
勉強していました

なんという偶然でしょう、運命を感じました、彼女に一目ぼれして  
いた

高校時代は結構もてた私ですが、私の初恋でした

しかし運命は皮肉なものでした、彼女は名家の子女であり世界的な

権威がある

学者の娘、それに引き替え私は下町に住む普通の会社員の子供、釣り合うはずありませんでした

彼女は文化学部、私は形而上生物学部に入学しました

私は彼女への思いを胸に秘めて大学に通い始めました

学部は違っていました、彼女とは結構仲良くキャンパスライフを楽しんでいました

そしてあるクリスマスイブの日に彼女に告白しようと彼女の家の前で待っていました

しかし何時まで経っても彼女は帰っては来ませんでした

その時にはもう彼女には婚約者がおり、結婚も秒読み段階だということを

しかもその婚約者が私の高校時代の大親友で相思相愛の間柄シヨックでした、死のうとまで考えた、しかし親友が選んだのが彼女でよかった

実直を絵に描いたような男の奥さんになるとあきらめました

大学を卒業すると同時に彼女は結婚して去了

それからの私は彼女を忘れるためにものすごい勢いで勉強しました、何度も論文をだし、教授からも教えていただき無我夢中でした、何とか失恋の痛手乗り越えることができた  
助教授になり教授になり色町では結構な浮名をながして去了

そんなある日、運命の皮肉ですね、彼女の娘であるユイ君と六分儀  
ゲンドウが京都大学に入学してきた

かわいがりましたよユイ君を、自分の娘のように

そして運命は巡る、

ユイ君から六分儀と付き合ってることを聞かされた  
ゆくゆくは結婚も望んでいると

六分儀は何かと問題をおこし、ユイ君にたのまれたわたしがよく尻  
拭いをしたこともあった

「もう我慢できません、教授、私六分儀さんと結婚します、父には  
反対されても」

とユイ君に聞かされて悩んでいるときに、  
親友にも相談され

「六分儀なるものがユイとの結婚を望んでいるだがわたしは反対だ」

「どこの馬の骨ともわからん奴に大事な娘をやれるか」

「冬月お前もユイのことをかわいがっていただろう」

「冬月お前はどうかんだ、賛成なのか？、反対なのか？」

親友に聞かれたが明確な返事ができなかった

そうこうするうちに二人は駆け落ちしていった

そして数年後、ユイ君から手紙が来た、結婚しました

そして息子ができましたと

手紙が来た、写真が同封してあり、

「父に見せてください私たちは元気で暮らしていると、そして孫がで  
きたと」

私は親友にユイ君からの手紙と写真を渡した



あんなに反対していたはずなのに手紙と写真を見せたら涙を流していた

変われば変わるものだと言ってきたらあんなに変わるのかと驚いた  
そして一年後

私はユイ君に箱根に來いと呼ばれた

そこには彼女の親友たちもあり、何かの研究していた

ゲンドウと再会した

「先生、冬月先生その節は大変ご迷惑をかけました」  
と謝罪してきた

元気でいるならそれでいいと答え  
帰ろうとしたところ

私に見せたいものがあると地下の研究室に連れていかれた

そこにあるものの説明をゲンドウにされた

「先生、これは、人類の進化にとっても有効なものです」  
先生の研究にも絶対欠かすことができないものです」

ゲンドウは言い放った

「こい！冬月」

呼び捨てにしおった私を

「これを見せた以上冬月先生にもう帰る場所がありませんよ」  
と猫なで声でゲンドウが言った

「ユイも承知している」

そして私の背後には大きな権力があるとも言った

とりあえず帰らなければと思いゲンドウの制止を振り切り京都に帰

った

無くなっていた私の自宅が、私の生活が大学教授としての地位のすべてが

無くなっていた、呆然とした

そしてゲンドウの言った権力大きさに恐怖した

もうここに帰ることができないと思った私は箱根に帰って行った

それから一年後

運命の2004年が来た

実験前にユイ君は言った

「シンジには明るい未来を見せてあげたいと、幸福な未来を」と  
そのためのエヴァの実験ですと語った

しかし実験は失敗した

ユイ君はEVA初号機に肉体ごと取り込まれて同一化した

サルベージを試みたがごとく失敗した、そしてユイ君の葬儀を  
ゲンドウが執り行った

ユイ君の葬儀が終了した後ゲンドウにシンジ君のことを聞いた」

「シンジ君はどうするんだ、」

「シンジは私の親類に預けます」

シンジ君を連れてゲンドウは旅立った

そして失踪した

「ユイ君に惚れていたからなゲンドウは」  
とひとり呟いた私

そして数日後ゲンドウは小さな女の子を連れてきた

「私の親戚の子です、今日からここに住まわせます」

シンジ君がかわいそうじゃないかと怒って見たものの、他人の私に  
どうこう言える

立場ではないと、家族でもない私が立ち入る問題ではないと怒りを  
おさめた

そしてゲンドウが連れてきた女の子は赤木ナオコに預けられたと後  
でゲンドウに聞かされた

それから研究や組織創設のために走りまわされ現在に至る（）

思考の海から戻った私

気が付くと私の端末に奇妙なメールが来た

先出し人を確認した

差出人は碇ユイ

驚いたものすごく驚いた

ユイ君はエヴァの中に取り込まれているはずなぜ  
とり込まれているはずのユイ君からのメールがと

内容を読んだ

「拝啓、冬月先生いえ冬月副指令、今からいうアドレスにアクセス  
して内容を

お読みください

メールの中ほどにあるサイトをクリックした

「そこにはゲンドウがこれまで行った犯罪の記録が示されてあった」

そう赤木リツコが読んだ内容と同じものが事細かく書かれていた証  
拠付きで

驚愕したそして猛然と怒りを覚えた、ゲンドウは私をもだましていた

そしてメールの最後にこう書かれていた

ユイ君の懺悔と私への協力要請であつた

「先生、私はゲンドウに騙されました、そして先生をも欺きました  
お詫びしても足りないくらいに反省しています、シンジにも耐えが  
たい苦痛を与えました  
そして後悔しました己が犯した罪を」

「そして先生にお願いがありますシンジを守ってください、そして  
レイちゃんも

お願いします先生」

切々と書いてあつた

私は誓つたシンジ君をレイを守ると

自分が果たせなかつた思いをシンジ君とレイに果たしてもらつたために

最後にこう書いてあつた

「ちかじか私はある方のお力をかりてそちらに戻ります、それまで  
さようなら」

と

またまた驚愕した

ユイ君が戻ってくる、ユイ君が、、、

今度こそ守るユイ君をわが娘、血はつながってはないけど私の娘を

新たな決意を胸にして

私はユイ君に示されたようにこのメールを処分した

ゲンドウに知られないように、このたくらみを

覚えておれ六分儀ゲンドウ、  
と胸の中で叫んだ

## 冬月の過去（後書き）

リッコさん、マヤさんそして冬月副指令の三人が  
ようやくシンジ君の仲間入りです  
ゲンドウ包囲網が完成しつつあります

ユイさんの帰還

面白くなってきましたね

では次のお話を期待してください

## 初号機再起動実験（前書き）

初号機の再起動実験のお話です

## 初号機再起動実験

今日はシンジ君の訓練日です

そして第二使徒を撃退してから初めての訓練日です

そして司令もいません

思い切り訓練ができます、気負わずに訓練に集中できます

副司令、リツコさん、天地'君、レイちゃん、ノイケさん、鷺羽ちゃん、ミサトさん、マヤさん  
が見守るために集まっています

副司令がシンジ君に言葉を与えました

「シンジ君、気をわなくていい、ここにいるのはみんなシンジ君の味方だよ安心して訓練に励みなさい、そしてユイ君に甘えてきなさい」

「はい、副司令、頑張ります」

「ユイ君によろしくと、それと私のことは副司令とは呼ばず、先生と呼んでくれるかな」

もちろん、ゲンドウがいないとき限定だ、シンジ君にそう呼ばれたいんだよ」

「はい先生、これでいいですか」

次にリツコさんが声をかけてくれました

「シンジ君、訓練だけど容赦はしないわよ、終わったたらおいしいコーヒー飲ませてあげる」

「頑張りますリツコさん、美味しいコーヒー期待してます」

天地'君も

「シンジいつも俺との訓練と同じようにすればいい、頑張れよ」

「はい兄さん、頑張ります」



レイちゃんも

「シンジ君、無理しないでね、心配だから」

泣きそうな顔のレイちゃん

「そんな心配しなくてもいいよ、みんないてくれるから、ね、レイ笑って」

無理やり微笑むレイちゃん

ノイケさんも

「シンジさん、頑張って」

鷺羽ちゃん

「シンジ殿ならできる、がんばって」

ミサトさん

「シンちゃん、ファイト」

マヤさん

「シンジ君ならできます、頑張ってください」

「みんなありがとうございます、頑張ります、ありがとうござい  
ます」

副司令が声をかけます

「でははじめよう、総員配置に着け」

全員で返事をします

「了解」

副司令、リツコさん、鷺羽ちゃん、ミサトさんは指揮所で

マヤさんは

マジ端末の自分の席で、ノイケさんはマヤさんの隣に座り

レイちゃんは見学室で様子を見ています

準備完了とマヤさんが言います

シンジ君はエントリープラグに乗り込みます

リッコさんが指示します

「エントリープラグにL、C、L注入」

エントリープラグにL、C、Lが注入されます

「エントリープラグにL、C、L注入終了」

「シンジ君具合はどう?」

とリッコさんが聞きます

「L、C、Lっておいしくないですね」

「仕方ないわよ、食べ物じゃないんだから我慢して」

ミサトさんがきつく言います

「男の子でしょ、それくらい我慢なさい」

シンジがミサトさんに言い返します

「わかりました、ミサトさん、えびちゅうの中身L、C、Lと交換しますね」

それとこれからは食事中的ビール禁止しますね」

さわやかな笑顔できついことを言います

「シンちゃ~~~~んそれだけはかんべんして~~~~~これ以上減らされたら死んじゃう」

どつと笑いがこだまします

リッコさんが一言「雉も鳴かずに撃たれまい」

もつと笑います

「きびしか~~~~~」

ミサトさんが黄昏ています

「さて緊張もほぐれたようね」

とリッコさんが再開を指示します

「エントリープラグ挿入」

エントリープラグが挿入されます

「主電源接続」  
「全回路動力伝達」  
「第2次コンタクト開始」  
「A10神経接続異常なし」  
「初期コンタクト全て異常なし」  
「双方向回線開きます」  
「ハーモニクス全て正常」  
「シンク口率10・・・20・・・50・・・100・・・  
200・・・400」  
「シンク口限界突破します」

「始まったようだな、うまく会えるといいが」  
「うまくいくわよ、シンジ殿なら」  
「始まった」

見学室ではレイちゃんが心配そうにモニターを見ています  
「シンジ君・・・」

さてエヴァの中に溶け込んだシンジ君、ユイさんを探します

「母さんどこにいるの？」

「ああさ～～～～ん」

「シンジ～～」

「ここにいますシンジ」

「やっと会えた、母さん」

「ごめんねシンジ、愚かな母を許して」

とシンジ君に抱きつき謝罪するユイさん

「もういいよ、母さん、済んだことだから、もういいよ、そんなに  
謝らなくても」

泣き崩れるユイさん

「ごめんね、ごめんね、ごめんね、ごめんね」  
シンジ君が逆に慰めます

「会えただけでもう十分だよ、それにいずれ外に出るんでしょ」  
返事をするユイさん

「ええ、必ず出るわ」

「ならいいよ、待つてるから母さん

「もう限界時間だから向こうに帰るね、またくるね」

「レイちゃんに会えるの楽しみにしてるわねシンジ」

レイちゃんの名前が出るだけで真っ赤になるシンジ君

「じゃあねシンジ」

「シンクロ率戻ります400・・・200・・・100・・・  
50・・・20・・・0」

「シンジ君エントリープラグ内に戻ります」

実験終了します

「エントリープラグ排出、LCL排出」

エントリープラグがエヴァから排出されました

シンジ君は元気に出てきました

みんながエヴァの前に集まってきました

「大丈夫かいシンジ君 会えたかなユイ君に」

「はい、元気になりました、先生」

「シンジく~~~~ん」

レイちゃんがシンジ君に抱きついてきます

「ＬＣＬが服に着くよ」

「構わないわついても」

ほほえましい雰囲気があたりに漂っています

「うつつうっほん着替えてきなさいシンジ君」

「はい、先生」

「行こシンジ君」

レイちゃんに引っ張っていかれるシンジ君でした

「レイも心配だったんだね、自分の時は失敗してたから」

「とにかく実験は終了した、今日はご苦労だったね、

みんな疲れてるようだから 解散！」

無事シンジ君のエヴァの再起動が終了しました

次はどんなことが起こるんでしょうか………

## 初号機再起動実験（後書き）

再起動も無事終わりました

次はどんなことが起こるやら楽しみです

では次のお話をお待ちください

月の光に照らされて（前書き）

レイちゃんの引っ越しです

## 月の光に照らされて

再起動実験が終わったあと遅くなったためレイちゃんを家に送るためネルフ本部を出た後のお話でした

「レイ遅くなってごめんね、こんなに遅くなるって思わなかったからレイの部屋まで送るよ」

「うっん気にしないで、実験で遅くなることは今までもあったから気にしないでシンジ君

それに私たちの周りにはガードのお兄さんがいるから大丈夫」

<チルドレン専用のシークレットサービス>

各種の武道の達人、重火器の名手、スパイそのけの諜報活動ができる

要人警護のエキスパート、唯一ゲンドウの手が及ばない男たち、チルドレンをわが子わが娘のように

かわいがる愛情おおき男たち

それがチルドレン専用のシークレットサービス通称ガードのお兄さんゲンドウが用意した屑は早々に退治して入れ替わっている冬月副司令の用意した最高の男

その名は服部半蔵、

その昔徳川家康を陰で守り通した男の子孫、伊賀忍者の棟梁が服部半蔵

小さい時のユイに出会いユイに忠誠を誓いユイのためなら死をも恐れない男

その男が率いる軍団の名を影の軍団、陰の世界では知らないものがない男たち

「ガードのお兄さんがいるから私たちは安全なのよシンジ君」



「とは言っても女の子が人で夜道を歩くのは良くないよ」  
「ありがとう、シンジ君、大好き」

影の男たちも微笑ましい光景に笑みを浮かべている、しかし、警戒は怠らない

そしてレイのマンションに着いた

「シンジ君お茶でも飲んで行って、紅茶の美味しいものがあるから」  
「今日はこれで帰るよ」

「そんなこと言わないで、さみしいの、お茶飲むだけの間でいいから」

「お願い、お願い、お願い」

シンジ君にレイちゃんのお願い攻撃を退ける根性はありませんでした、とことんレイちゃんに甘いシンジ君

「じゃあ一杯だけ頂きます」

と、レイちゃんのお部屋に上がりこむシンジ君、しかし上がり込んだ部屋の

風景に驚愕するシンジ君、おもむろに電話を掛ける

「ぷるるるるるるるるるるるる」

「がちや」

「もしもし冬月だが？」

「もしもし先生ですか」

「おおシンジ君、こんな時間にどうしたんだい？」

「今、レイの部屋にいます、いったいなぜこんな殺風景な部屋にレイひとり

住まわせてるんですか？僕には耐えられません！今すぐ住所変更をお願いします

先生は知ってるんですか、」

えらい剣幕で冬の食って掛かるシンジ

「ちよつと待て調べてからもう一度連絡するからそこで待っててく

れ」

「はい」

「がちやり」

冬月さんは専用回線で服部に連絡を取る

「冬月だがレイのへやを確認してくれ、そして必要であればシンジ君の命に従ってくれ」

服部「了解」

そして服部が確認しに来る

「あつガードのお兄さん」

部屋の中を確認してまた冬月に電話する服部

冬月は冬月で調べた、服部からの連絡とこちらから調べたものを加味しシンジに連絡する

「シンジ君すまない、こちらの手落ちだ、ゲンドウの馬鹿が、指示していたようだ

早急に部屋を用意するからそちらに移ってくれ、どこですか？君が住んでるマンションに

用意するから」

「部屋の番号は 号だ」

「ミサトさんの部屋のとなりの部屋ですね」

「わかりました、ありがとうございます、先生、早々のお願いを聞いてくれてありがとうございます」

「ユイ君の息子のたのみを聞くのは私はうれしいんだよ、これからも頼ってくれ、シンジ君」

「はい、先生」と電話を切るシンジ

そしてシンジは服部に指示しました

「服部さん、すみませんがレイの部屋にあるものを僕が住んでる部屋の隣の部屋に運んでください

お願いします」

「若、了解しました、少しお待ちください」

服部が合図すると、どこからともなく数人の男たちが音もなく入っ

てきた

「この者たちは、私の配下の者、若やユイ御嬢様を陰からガードしておりました者たちです」

「若？僕はそのように呼ばれる者ではありませんよ、ただの少年ですよ」

「若は若です、ユイお嬢様をゲンドウに奪われた時はどれほど悔しい思いをしたことか

でもこれからはご安心ください、ゲンドウの魔の手から必ずお守りいたします若とレイお嬢様を」

服部と服部の配下がシンジとレイの前でひざまずいた

「わかりました、そういう事情ならこれからもよろしくお願いします、服部さん」

レイちゃんもお辞儀します

「服部のお兄さん、シンジ君を守ってくださいね、お願いします」

「この服部、レイ様にも忠誠を誓います」

「でははじめます、それっかかれ」

音も立てずにレイの部屋のを運び出す男たち

そして荷物を運んで行った

「若では失礼します」

シンジ君とレイちゃん二人で微笑みました

「若だって」

「レイお嬢様だって」

微笑みながら二人はマンションに帰っていきました

月が二人を照らしながら



月の光に照らされて（後書き）

レイちゃんの部屋を見たシンジ君驚いて  
引っ越しを冬月さんをお願いする  
お話でした

ではまた次のお話までお待ちください

## 鷲羽驚愕の真実（前書き）

鷲羽が体験したサードインパクトのじじっ  
そして思い

# 驚羽驚愕の真実

さて天地君が飛ばされて幾日たった榎木家のお話をしましょう

「鷺羽さん、ごめんなさい。許してください、反省してます」

美星さんが必死になって謝っています

「今回は、どんなに謝っても許されないわよ美星殿」

「あんたがやったことは家の中で済ませるにはあまりにも大きすぎる私がかばおうとしてもどうにもなんないね、ただの失敗だけなら私にだけ影響があるなら」

いいけど、天地殿を巻き込んだことが、最大の失敗なんだよ」

「私にも責任がないとは言わないけど、とりあえずGPアカデミーに行ってきたさい

「どういふ結果があるか、向こうに行かないとわからないわよ  
私もできる限りはお願ひしてみるけど」

「美星の後始末はとりあえず後回しにして、天地殿を探さないと、考えうるあらゆる探査システムを開発しないと、あと次元神にも探させましょう」

「この次元に足跡な

U

۲

「、、、、、、、、、、、、、、、、この次元に足跡な

U

「この次元に足跡な

「この次元に足跡な

レ

・ ・ ・

「、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、この次元に足跡な

し

「、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、この次元に足跡な

し

「、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、この次元に足跡な

し

「、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、この次元に足跡な

し

「、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、この次元に足跡な

し

「驚羽様どこの次元を探しても足跡なしです」

「そんなことないはず、足跡はあるはずだから」

「、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、この次元に足跡な

し

「、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、この次元に足跡な

し

「、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、この次元に足跡な

し

「、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、この次元に足跡な

し

「あああああああわからなどう探せばいいの」

「姉さま焦らないの、必ず見つかります」

「最初から考えましょう、何が起こったかを」



「まず、天地殿の血液採取して、次の検査項目を用意してるとき  
美星殿が私宛に手紙を持ってきた、ここまではいつも通り」

「私が手紙を読んだときに、美星殿がどのボタンを押したかわ  
かれば・・・」

「記憶を巻き戻していますきゅーーーーー」

「手紙に貼ってあった切手」

「切手、切手、切手なんの切手かわかれば」

「記憶を巻き戻していますきゅーーーーー」

「ストップ」

「アニメの絵が描いてある切手、それだーーーーー」

もう一度次元神を呼び出す

「お呼びですか、」

「今度はアニメという次元で探査しなさい」

「わかりました、鷲羽様」

「、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、この次元に足跡な  
し」

「、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、この次元に足跡な  
し」

「、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、この次元に足跡な  
し」

「、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、この次元に足跡な  
し」

「、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、この次元に足跡な  
し」

「、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、この次元に足跡な  
し」

「、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、この次元に足跡な  
し」

し」

「、、、、、、、、、、、、、、、、この次元に足跡な

し」

「、、、、、、、、、、、、、、、、この次元に足跡な

し」

「、、、、、、、、、、、、、、、、この次元に足跡あ

り」

「鷲羽様見つけました」

「それはどのアニメ？」

「新世紀エヴァンゲリオンの世界にかすかな痕跡を見つけました」

「見つけたといってもまだアプローチするわけにはいかない、今下手な干渉はできない

今したら痕跡はおるかその世界そのものの崩壊が起こる、神といつてもこういう時は無力なもんさ

どうしたもんか・・・意識／・・・同化：精神・・・憑依・・・  
。。。。。。これが

意識を数値化し物語の作者の精神に同化それを痕跡に憑依すればうまくいくかも

危険な賭けではあるが、どれだけ作者の思いが深いにかかっている」

「その装置を開発するかね、つなみ、ときみ、あんたたちの力借りるよ

つなみ皇家の木システム起動しなさい、ときみ、あんたの次元の手を発動

「はい」「はい姉さま」

「いくよ、二人とも同化、憑依、つなみのちから、ときみのちから、

私の力

すべての力よ光とともに貫け、  
「……」  
数値化された意識が神のちからを使って同化し作者の思いに憑依  
そしてみちが開かれた

「しかしなんだね、意識してこの道を作るのに大分かかるのに  
美星の血筋はこともなくおこなってしまう、神の力の限界を感じる  
ね」

「座標固定ポイントマーカー固定、さてどこにつながるかは行って  
みないとわからないね」

「じゃあ、行ってくるよ」「気を付けて」「気を付けて姉さま」  
光の道を進む鷺羽しばらくして終端に到着

着いた先は暗い暗い暗い巨大な少女のモニュメント、赤い海

砂浜にたたずむ少年、赤い服を抱きしめるうつろな魂

赤い海に手を浸す鷺羽、

「怨嗟の意識の集合体」

「なにこれは、どこの世界」

そうです鷺羽ちゃんが到着した世界はサードインパクトが起こった  
世界でした

そつと少年の後ろに立ち記憶を探查さまざまな記憶が鷺羽に流れ込  
んで来る

いたたまれなくなった鷺羽、一人の少年が抱えるにはあまりにも大  
きすぎる

罪、そして怨嗟しか発しない意識の海、うつろな少女、気が狂いそ  
うになる

そして話しかけてくる少女の意識

「あなたは誰？」

「碇君を助けて、わたしは何もできない、あなたならできる、お願い」

「あなたの名前は？」

「名前、綾波レイと呼ばれたものの意識の残滓」

「もう私は消える、お願い、、、い、、、か、、、り、、、くん、、、を、、、」

少女の意識は消えた、そしてすべてのものが消えた世界  
そこにたたずむのは鷺羽ひとり

涙する鷺羽

「わかったわ、レイちゃん、あなたの願い、この鷺羽が必ず叶えよう  
三神の女神の名にかけて」

そしてどこからかわからない所からかすかに聞こえる感謝の言葉

「あ、、、、、、り、、、、、、が、、、、、、と、、、う、」

そしてまた探す今度は簡単です、同じ座標にいるから  
天地殿の意識を見つけました

2015年第二東京市の伊集院家にたどり着く鷺羽

そして忍に知り合い自分が見た光景を忍にも見せる

忍は即座に協力を承諾、そして天皇に会う、天皇にも同じことをする  
協力を要請、即座に快諾

そして数日後、第三東京市ネルフ病院にポイントマーカ―設置

そしてシンジに会う

「どうしたのかな 天地殿」

**鷲羽驚愕の真実（後書き）**

如何だったでしょうか

では次のお話をお待ちください

## デート（前書き）

待ちに待ったデートの日が来ました

## デート

今日はレイちゃんが前から望んでいたデートの日です

前日学校のヒカリさんや友達にお願いして、洋服やアクセ選んでもらうため

一緒にデパートやブテックめぐりをしました

「レイさんは、華やかな洋服よりも、清楚なお嬢様ファッションが似合うと思うよ

いつもは制服しか着てないから、余計似合うとおもっ

、ヒカリさんが言いました

「水色のスカートに薄いピンクのブラウス、白いジャケット、シルバーのネックレス、

白い麦わら帽子、みんなが一生懸命選んでくれました、うれしかった、

胸に温かいものがあふれてくる、いつの間にか涙があふれてきました」

ヒカリさんが優しく抱きしめてくれました

ケイコさんが「これで碇君もいころよ、」と微笑んで言ってくれました

「私はお礼に、みんなにお昼に誘いました、Mドナルドで楽しいおしゃべりを

しながら楽しい時間を送りました」

夜はドキドキして眠れませんでした、楽しくて、明日はどんなところ

に連れて行ってくれるのか、シンジ君は教えてくれませんでした

翌朝は早く起きておめかしです、お化粧も初めてします、仕方はヒ

カリさんが

教えてくれました、シンジ君喜んでくれるかな

そして、玄関のチャイムが鳴りました

そして玄関を開けました

「レイ、用意できたかい、、、」

玄関を開けたシンジ君はレイちゃんの姿に驚きます

「レイ。。。。きれいだ、、、どこかのお嬢様みたい」

「シンジ君、ありがとう、褒めてくれて

嬉しくて涙が出そうになりました、でもこらえました、泣いたらお化粧

がくずれてしまうから」

「鷺羽さん、ミサトさん、兄さん、行ってきます、

「シンジ殿いつてらしゃい」「たのしんできて」「しっかり遊んで来い」

「いってきます」「行ってきます」とレイと一緒にいいました

二人行った後三人はつぶやきました

「こんな時間はもう来ないだろう、使徒と呼ばれる怪物に、ゼーレという

権力にそして父親であるゲンドウとの死力を尽くした闘いが待っている

だからこそ、二人には、今日は貴重な残された時間、精いっぱい楽しんできてほしい」



しんみりと語り合う三人でした

リニアに載って2時間後目的地に着きました

そこはく第二東京ネズミーランド>そこは第二東京市に新しく出来たテーマパークです

ネズミのネズー君ミーさんがシンボルのテーマパークです  
出来たてなのでチケットもなかなか手に入らないのですが

そこは、申し訳ありませんがネルフの権力かどうか冬月さんにお願いで手に入れてもらいました

それも一日アトラクション、レストラン、ショッピング、パレード、ショーが最優先でできる

ウルトラスーパープレミアムチケット、数枚もない超限定のチケットです

「シンジ君ここは？」

「ここは新しく出来た遊園地、ネットを調べたらヒットして前もって入園チケットを手に入れたんだ」

「ありがとうシンジ君」

「レイの笑顔が見れてうれしいよ」

まずはあれに載ろう「行こうレイ」

シンジ君はビックサンデーマウンテンにレイちゃん連れて行ききました

西部劇に出てくるような機関車にのってスリル満点の乗り物です

「れいは悲鳴を上げて僕につかまっていました、悲鳴を上げるレイ、かわいかった」

十分楽しんだ後、次に乗ったものは蒸気船、マークトローエン号水上をゆっくり進む蒸気船です

「シンジ君とゆっくり川面を流れる船に揺られてのつていましたシンジ君優しそうな笑顔です、頼もしいと感じました」

次に乗ったのは、空飛ぶボンタ、空中を遊泳する乗り物です

「レイはなんか怖そうにしています、行き成り乗り物が浮き上がった、そしてゆっくりまわり始めて、でも楽しそうでした」

そして次は

トンデレラのフェアリーホールホールにいきました

「中はおとぎ話のお城を模し王様や女王様、お姫様が踊ってる絵がかいてありました

素敵なお城で中で本当にシンジ君と踊ってるような錯覚に陥りましたそしてガラスの靴が飾ってありもう言葉が出ないです」

そしてシンジ君がレストランに予約してるといいそこに行きました「ムーンクリスタルパレスというレストランで、素敵なレストランです

バイキング形式なので好きな料理を自分で選んで食べるというものです

、もしかして私がお肉食べられないのを覚えていてくれたんです、私のことそこまで理解してくれるシンジ君、私はもっと好きになっ  
ていきました」

「素敵な料理に素敵なレストラン、ありがとうシンジ君」

食事した後はまたアトラクションやいろんなお部屋など見て回り  
素敵な時間を過ごした二人、周囲が暗く夜のとばりが下りるころ  
ネズミーランド最大のショーが始まりました

ネズミーキャッスルに火がともり素敵な音楽が流れ始め

ネズー君や、ミーさんがトンデレラやガッフィーとともに現れてダ  
ンスや歌を披露し

そして夏なのに雪が舞い降りて幻想的な雰囲気が漂い始め

ショー最大のイベントであるは打ち上げ花火が始まりました

「私は花火が上がるたびきれい、きれいといいシンジ君と見上げて  
いました、」

「レイの横顔が花火に照らされて幻想的な美しさを醸し出していま  
した

絶対に守るレイのこの笑顔を改めて誓いました」

ショーも終わり閉演時間が来ました

「次のまた来ようレイ」「うん」「絶対に」

そしてリニアに乗り第三東京市に帰ってきました

そして帰り道月が見える公園に差しかかり、シンジ君がレイに言い  
ました

「レイ、君を愛してる、この命尽きるまでレイを守る」

「シンジ君、私もあなたを愛してる、この命尽きるまでシンジ君を  
守る」

そして月の光に照らされて二人の影が重なっていた……

翌朝、、、二人に昨日の出来事が写真になって届けられました

シンジ様、レイ様お幸せにという言葉とともに

天地君鷲羽ちゃんの元にも写真が届けられました

それは月に照らされた二人の、、、、、、、、、、これいいじよ  
は言わぬが花ですね

## デート（後書き）

シンジ君とレイちゃんのお話でした  
二人の誓いとともに

ではまた次のお話をお待ちください

## 人選（前書き）

シンジ君の世界に行く人選です

## 人選

ある日の柁木家の出来事ばーと2

「これから向こうへ行く人選をするよ  
まず行きたいもの手をあげて」

まあ全員が手をあげます

「まあそうだろうね、当然の結果か」  
鷺羽ちゃんが声を発します

「リョウコ、あなたは最初から除外だよ」

「なんでだよ、鷺羽」

「じゃあ聞くけど、あんたがいつて向こうで何するのかな」

「天地迎えに行くんだよ」

「それは分かってるさ」

「じゃああんたが今左手についてる宝玉をかえしな」

「なんでだよ」

鷺羽

「あんたの力はむこうじゃ巨大すぎるんだよ、それに向こうじゃ表に出ることができないんだよ  
破壊するきかい向こうの世界を」





「ささみちゃんはこの家を守ることが天地殿のためだし、ここを離れられないからね」

「鷺羽お姉ちゃん砂沙美わかってるよ、つなみちゃんがいるからね、それにささみがいないと餓死しちゃうよみんな」

「ありがとう、ささみちゃん」

残ったのがノイケさん

「鷺羽様、私ですね、」

「そうノイケ殿はGPでも優秀だし隠密もできる能力もある、天地殿のサポートにはうってつけだよ」

「来るのはもう少し後になるよ向こうの状況が今時点で少ししかわかってないからね」

「当分はこの人選だけど、あと何人もいけないよ開けた道はそんなに維持できないからね」

「維持するのにあえかどのとリヨウコあんなたちの力が必要なんだよ家を守るのもあんなたちの仕事だよ、いいね二人とも」

しづしづ返事するあえかさんとりょうこさんでした

「そこに隠れてる瀬戸殿あなたもいけませんよ」

「あらわかつちゃった、結構気配隠してたんだけど、鷺羽ちゃんには通じないか、ほっほっほっ、楽しいお話期待してますよ」

「やれやれ、天地殿帰ってこないほうがいいかもね、」

「ところで鷺羽殿、向こうの状況はどうなの？」

「詳しくは今わからないけどどうも状況はあまり良いとは言えないね」

「瀬戸殿にお願いがあるんだけど、サポート役を人選してくれるかな  
もしかしたら人数がいるかもしれないから」

「わかりましたわ、鷺羽殿」

「不安だな〜瀬戸殿」

「面白くなりましたわよ、もしかしたらZZZが必要かもねきはは」

「ZZZトリプルゼット水鏡の絶滅宣言……………」

そこには宇宙海賊も裸足で逃げるじゅらいの鬼姫がいました

向こうに行く第一弾の人選が終わりした

## 人選（後書き）

人選が決まりました

瀬戸様の暗躍が怖い作者です

では次のお話をお待ちください

## 第四使徒戦（前書き）

第四使徒襲来しました  
シンジ君の闘いが始まります

## 第四使徒戦

第四使徒発見の報あり、第三東京市まであと一時間  
戦略海上自衛隊「はるな」第四使徒に攻撃

「艦砲射撃、始め！」

「レーダー射撃はじめ~~~~~」

32？三連砲からの徹甲弾が雨あられのように使徒に降り注ぎます

「足止めだけでできればいい」

「あとはネルフ任せればいい」

第三使徒戦時にN2爆弾は使徒には通用していないのは確認しているため

通常砲弾のみの攻撃です

「打て打て弾の尽きるまで」

激しい攻撃です「もう少ししたら来る」

「それまで持たせればいい」

「はるな艦長が叫びます」

「つぎ！シースパロー、発射」

先日の闘いの経験により戦自は足止め行為のみに徹しています

そのころのネルフ

オペレーターの男性士官が叫びます

「戦自の攻撃により使徒の足止め成功しています」

「エヴァの出撃要請を求めています」

「言われなくてもするわよ」

「司令よろしいですね」

「使徒に勝たなければ我々に未来はない」

「エヴァンゲリオン、発進！」

二機エヴァがネルフより発進します

「レイ頑張ろう」

「はい、シンジ君」

レイちゃんの零号機は先日起動成功しています

「レイはサポート、シンジ君は先行しなさい」

「はい」

「了解、ミサトさん」

「いいシンジ君、相手はムチを持ってるみたいだから  
遠距離攻撃が最適、ゆえに、パレットガン斉射後  
様子を見て」

「了解、」

「宛、戦自はるな艦長にたつする、エヴァ攻撃の支援感謝する 発  
ネルフ作戦部長」

「退避せよはるな、」

戦艦が退避していきますこれでエヴァの邪魔にはなりません

戦自空軍がエヴァの支援に来ます

「ラム小队、使徒に攻撃」

「ラジャー」

空軍のF15 F2が使徒にバルカンで攻撃を開始します

そしてサイドワインダー発射していきます

ことごとく当たります

戦自が支援しています

エヴァ初号機ないシンジ君

（兄さん何かいいアイデアないですか？）

（鞭が厄介だがあれさえなければたぶん行けると思うが）

パレットガンの攻撃も終わり用済みとなったパレットガンを  
剣の代わりにして使徒に対峙しています

天地が思いつきます

（シンジフィールド展開しろ）

「レイシンジ君の支援にパレットガンで攻撃して」

「了解葛城三尉」

レイちゃんが支援してくれています

「レイが支援してくれる、フィールド展開、」

シンジ君の前にフィールド展開していきます

（シンジお前に教えた光鷹真剣の変形を教えるフィールドをパレットガンにまとわせる）

（はい兄さん、フィールドパレットガンにまとわせます）

フィールドがパレットガンにまとわりつき赤い光を発していきます

（鞭をたたききれ）



迫ってくる鞭をシンジ君はパレットガンでたたき切ります

見事な剣さばきで切っていきます

よし相手は丸腰です

コアを狙おうと突撃しようとするとき

不意に使徒からの光線攻撃がありました

避けようとして山の方に逃げたところ

その下には人影が・・・・・・・・・・

「なんでこんなところトウジとケンスケがいるんだよおおおお」

そうです、ケンスケ君の好奇心が自らの命を危うくしています

「こつちに来るな~~~~~」

「葛城三尉、ここにけが人がいます救助お願いします」

モニターに二人が移っています、しかもけがをしています

使徒の攻撃を避けようとしてエヴァが倒した大木がたまたまケンスケたちに倒れこんでいた

「了解救助に行くまで持たせて」

「了解」

ピンチです

「どうしたら、どうしたらどうしたら」

（おちつけシンジ）

光鷹翼での攻撃を思いつく天地

（いけ~~~~~）

天地君の切り札で一発しか打てませんが使徒の気をそらすことに成功です

（シンジ、あとを頼む）

光鷹翼による攻撃で天地君が気絶します

（兄さんありがとう）

以前訓練で天地君がシンジ君に見せた光鷹翼の光線  
本来の体ですと光鷹翼を展開できますし光線も出せますが  
こちらの世界では光鷹翼を発生させるだけで体力のほとんどを  
使い切ります

救助隊が到着トウジとケンスケを収容し去っていきます

これで思い残すことなく使徒を撃退できます

（精神を集中し使徒のコアをたたき消る）

最高に集中してシンジ版光鷹真剣でたたき切ります

「えいや~~~~~~~~」

見事コアごと使徒をたたき切りました

（兄さんありがとう）

「レイ支援ありがとう」

「シンジ君に感謝された」

ニコニコしているレイちゃんです

「葛城三尉、作戦修了帰還します」

「戦自の皆さん支援感謝、ありがとうございました」

次々に感謝と応援の言葉が各戦自軍から寄せてきました

そしてネルフに帰還していきました

指令室では

ゲンドウがうなっています

「こんなはずではないこれではユイが覚醒しない、何とかしなければ」

その後ろでは冬月副司令が喜んでいました

「これはシンジ君に力か、これならゲンドウ焦るだろう、しかしよくやった

これからが楽しみだ」

ミサトさんかというと

使徒戦後の後始末に追われていました

「シンちゃんすごい戦いだった、私も頑張らないと」  
へんにテンションが高いミサトさんです

リツコさんかというと

「パレットガンをあんなふうに使うなんて想定外だわ、プログレッ  
シブ・ナイフを改良しないと  
あとでマギのかあさんに相談しよう、そして、もっとシンジ君が戦  
いやすい武器も」

こちらにも創作意欲がわいているようです

マヤさんは違う意味で心配してます

「天地さん大丈夫でしょうか」

マヤさんは恋人の天地君に心配していました

ノイケさん

「あれは光鷹翼の変形ですね、たぶん天地様のいれじえですね、し  
かしそれをつかいこなすシンジさん  
脅威ですね」

各人それぞれの感想を胸に終了していました

「シンジ君、ご苦労様」

「レイも、ありがとう」

そしてあの二人はというと、病院で己のうかつさと痛みをかみしめながら

その夜を過ごしていきました

#### 第四使徒戦（後書き）

さてシンジ君の闘いが始まりました

なかなか闘いの描写がうまく描けません  
作者の力不足を感じます

では次のお話をお待ちください

**事情聴取（前書き）**

事情聴取です

## 事情聴取

使徒戦が終わった、とりあえずの平和が訪れました

数日が経過しました

そしてネルフ病院にてここにはあの時気怪我をした二人が入院しています

ミサトさんによる尋問が始まりました

「なぜあんなところにあなたたちがいたの？」

二人とも無言です

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |     |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|

「黙つてはだめよ、報告には、貴方たちがシエルターを抜け出すところを」

カメラがとらえていたし、シェルターのコンピューターが改変されたのが

確認されています」

まだ無言です

┌───────────┐  
└───────────┘





「誰やねん」

「シンジだよ」

「せんせかいな」

「だからさ、トウジも見たくないか」

「しゃくないな、せんせがたたかつとんならおうえんせなな」

「それでこそトウジ」

「いいんちよ~~~~~」

「なによ、鈴原君」

「ワイらちよつと便所にいつてくるわ」

「そんなことシェルターに入る前にすましておきなさいよ  
早く帰ってくるのよ」

「わかつとるわ、いくで、ケンスケ」

「あいよ」

そしてシェルターの非常口まで来た二人自作のポケコンでシェルターのセキュリティー

を解除してしまいました、最悪なことに、あとで戻るため、開けやすいうに

シェルターのセキュリティーを改造してしまいました

そのシーンを別のカメラで撮影されていることも知らず悠々と出ていく姿をとらえていた

そして歩いていくうちにエヴァが戦つてるところが見えるところまで進んで来た二人

「すごいすごい、エヴァが戦つてる、僕も戦つてみたい」

「せんせ、がんばれ~~~~~」

ケンスケはデジカメでそのシーンを撮りまくってきました

まさか自分に迫った危険に気が付かずに、気軽に応援していました

そして自分のところにエヴァが来ました

「こつちにくるな〜」

「こつちに來るんやない」

と二人は叫んでいました、エヴァが使徒の攻撃を避けるため迫ってたまたまそこにたっていた大木をなぎ倒し

二人のあしを大木がはさんでいました

一方エヴァでは

「なんでこんなところトウジとケンスケがいるんだよおおおお」

「葛城三尉、ここにけが人がいます救助お願いします」

モニターに二人が移っています、しかもけがをしています

使徒の攻撃を避けようとしてエヴァが倒した大木がたまたまケンスケたちに倒れこんでいた

「了解救助に行くまで持たせて」

「了解」

そして救助隊が到着して二人は病院に搬送されました

自らの軽はずみな行為が自らのけがを呼んだことを反省した

自業自得です

事情聴取が終了し

そしてミサト三が二人に告げます

「ネルフの機密文書の漏えい、シエルターのセキュリティ破壊  
戦闘の妨害等かんがみ死刑が告げられました

シンジ君のとりなしと学生であることを鑑み罪一党を減じ

第二東京の学校に転校してもらいます

そしてご両親も同じです、第二東京のネルフ分室行きが命令されま  
した

ご両親もその地位を取り上げ軍曹待遇として行ってください  
そして罪をかみしめて生活を送ってください

以上終わります」

ミサトさんはそう告げると病室を出ていきました

そのころのネルフでは

トウジやケンスケもこれで懲りたと思うから、第二東京で頑張つて  
ほしいと、

冬月副司令に告げていました

「いいのかねこんな軽い処分で」

「いいんです、確かに許し難い行為ですけど、二人は僕の親友です  
から

これでいいんです」

「では失礼します、先生」

「ゲンドウとは大違いだな、シンジ君は、大物になるな」

冬月さんはそう言ってほほ笑んでいました

**事情聴取（後書き）**

事情聴取が終わりました

では次をお待ちください

## レイの試験（前書き）

天地，君に修行をお願いするレイちゃん

## レイの試験

第四使徒を撃退してから数日後のことです

シンジ君は天地’君といつものように修行していました、レイちゃんもそのことを知っていました

しかし、レイちゃんは自分が第四使徒戦ではサポートしかできないことを、痛感しました

自分もシンジ君の横に立ちたい供の戦いたいと切に思うようになりました

そして天地’君と一緒に修行させてほしいとお願いしました、しかしシンジ君は反対です

「天地’さん此の份ではいけないの、シンジ君の足手まといにはなりたくない、シンジ君とともに戦いたい、お願いします、厳しいのはしっています、でもお願いします」

一方のシンジ君はというと

「レイに危ないことをしてほしくない、戦うのは僕だけでいい、後ろで僕の闘いを見てほしい」

心配性のシンジ君、シンジ君の足でまといにはなりたくないレイちゃん、どちらもお互いの事をきずかい、

相手のことを深く思う二人、どうしようかと悩んでいる天地’君、そこで鷺羽ちゃんに相談すること、



「天地殿、一度レイちゃんに試験してもらってはどうか、実機じゃ問題があるから、シュミレーターを使って、もちろん私特製のね、」

そんなこんなで鷺羽ちゃん特製のシュミレーター試験を受けるレイちゃん

「いい、レイちゃん、初号機を相手に戦ってもらいます、シンジ殿はレイちゃんとは思わず、思いつきり戦って、レイちゃんもシンジ殿とは思わず真剣に戦いなさい」

「はじめ！」

シンジ君はというとレイちゃんが戦ってくると思い手を抜いてるとは言えませんが、攻撃が、雑になっており  
どうもいつもの切れがありません

レイちゃんはシンジ君だと思わず敵として真剣に戦ってきます

「レイ、そうじゃない、そうじゃないんだ」

「シンジ君、覚悟！」

見守ってる天地君は叫びます

「何やってるんだシンジ、そんなんじゃないだめだ、だめなんだよレイをバカにしてるのか」

「だめだね、シンジ殿、」

何度か切り結んではいますが、どうもシンジ君が負けそうです、押されています

普通ならシンジ君には何でもない攻撃が、迷いがあるため、動けません

そして鷺羽ちゃんが回線を開きエヴァの中のユイさんに通信を送ります

（ユイ殿、あなたの息子はこの程度なのですか、そんなことでは守りたいものも守れませんよ

レイちゃんはあんなに真剣に戦ってるのに、母親として、それでいいのですか？）

（鷺羽さん、一度シンジと話してみます）

「レイちゃん少し攻撃を控えて」「了解」

エヴァに取り込まれるシンジ

ユイさんの説教がはじまります

（シンジ、今までのレイちゃんとの戦いはなんなの、シンジあなたはレイちゃんをバカにしてるの

足手まといとおもってるの、レイちゃんの事その程度なの、それでよくレイちゃんの

恋人だといえるわね、母さんわらっちゃうわ、なぜ真剣にレイちゃんと戦わないの

それじゃ、ゲンドウにも勝てないわよ、それでいいの、ゲンドウにレイちゃん奪われるわよ

そして、昔のレイちゃん、無表情で無感動、無口なレイちゃんにもどってしまっわ、シンジはそれでいいの？

そんなことシンジは望んでいるの、それでも私の子供？情けないと思わないの、私に

ここまで言われて、悔しくないの、シンジ、答えなさい)

泣きながらシンジ君を諭すユイさん

(母さん、ありがとう、だめな僕をしかってくれて、眼が覚めたよ、真剣にレイに向かうよ)

(鷺羽さん、シンジがわかってくれました、シンジを返します)

(シンジレイちゃんの思いにこたえてあげなさい)

(ありがとう、ユイ殿、肉親の言葉が一番、シンジ殿にはこたえるからね)

「では再開します」

それまでとは違うように動きをが滑らかになってきたシンジ君

レイちゃんの攻撃を難なくかわし、逆に肉薄する攻撃でだんだんと

レイちゃんの攻撃が当たらなくなってきました

どうやっても、どんな攻撃も最後には通用しなくなってきました

そして決着がつきました

零号機の中でレイちゃんが泣いていました、負けた悔しさなのか一緒に修行できない

事の悲しさなのかわかりませんが

そして天地君がレイちゃんに告げます

「レイちゃん明日からのシンジとの修行、参加許可します」

その言葉を聞いたレイちゃんうれしくて大泣きしていました

「うわあああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああん」

「レイちゃん、修行中はレイと呼び捨てにするから、それと厳しいよ、おれの修行は」

泣きながら返事をするレイちゃん

「ぐすっぐすっ　　ありっがとっうござおっます、てんちさん」

シンジ君にも告げる天地'くん

「なんだ最初の攻撃はあれじゃまだまだ厳しくしないといけないな、  
今まで以上に  
厳しくいくぞ、いいなシンジ」

「はい！兄さん厳しくしてください、甘ったれな僕を厳しくしてください」

「母さんにも言われました甘さを捨てなさいと、よろしく願いします、にいさん」

レイちゃんも同じことを言いました

「やれやれ途中はどうなるかと思ったけどなんかうまくいったよ」

「シンジ殿、レイちゃん頑張れ」

（私も頑張らないといけないな）

それぞれの感想と結果をかみしめてこれからもがんばることを誓うシンジ君とレイちゃんでした

見ていた冬月さんは終わると笑みを浮かべながら自分の執務室に帰っていききました

## レイの試験（後書き）

レイちゃんが修行するための試験を受けました  
どうなるかと思いましたがうまくいってよかったです

では次のお話をお待ちください

## ゲンドウの告白（前書き）

シンジ君とゲンドウの会話です

## ゲンドウの告白

### 第四使徒戦後のゲンドウ

「まずいますい、このままではユイが覚醒しない、やっとつかんだチャンスが

この頃のレイはどうも私を避けている、食事に誘っても、体調が悪いといい

すぐに帰ってしまう、赤木博士も同じことを言う。」

「副官たる冬月もどこかよそよそしい、どうしたらいいか、思いつかない。」

「シンジが来てから、すべてが、自分の思い通りに行かない、何か裏で

起こっているのは間違いない、今更シンジに、親らしいこともできるはずもない、諜報部も私の息がかかっていたものはすべて排除されている。」

「逆に監視されている、一度、シンジと話し合う必要があるかもしれない。」

「印象を変えるために、ひげをそり、サングラスをとってみよう、それがいいかもしれない。」

「冬月にいつてみよう、これもすべてユイに会うためだ。私の最愛のユイのため。」



ある日の司令室での会話

「冬月、一度、シンジと話し合いたいと思うんだが、どうだろうか  
な。」

内心驚いてる冬月さんですが、それを表に出すこともなく淡々とゲ  
ンドウに  
話します。

「いいと思うが、お前は、シンジ君を駒扱いしてたな、こういう風  
のふきまわしだ？」

「いや、このままでいいのか悩んでいた、頼む、最近お前はシンジ  
と仲がいいようだ、  
どうだろうか？」

「わかった、とりあえず話はしてみよう、待っている。」

（どうもゲンドウの様子がおかしい、焦っている、これ以上は無理  
かもしれないな）

冬月さんからシンジ君へ連絡をいれました

「シンジ君、ゲンドウが君と話がしたいと相談を受けたんだが、  
シンジ君はどうするかね、どうも様子がおかしいんだよゲンドウの。」

「

暫く考えた後返事をするシンジ君

「会いましょう、僕も言いたいこともありますから、場所は、初号機の前で、

もちろん、服部さんに警護はお願いしますが、あと先生と兄さんにそばにいてもらって

レイには隠れてみてもらう、というのではどうでしょう。」

「わかったシンジ君、ゲンドウにはそう云おう。」

そして数時間後、初号機前でのこと

さっぱりしたゲンドウ、みなが驚いてます、いつものネルフの制服ではなくて

カジュアルな服装です

「悪かったなシンジ、時間を取って。」

「それはいいけど、父さんどうい風風の吹き回しだ、理由を聞かせてくれ」

「どこから話せばいい?。」

「なぜ僕を捨てた、母さんもいなくなって、僕には父さんしかいなかったのに

なぜ、なぜ?。」

「ユイが初号機に取り込まれ、私はどうしていいかわからない精神錯乱の

状態にあった、私からユイを取り上げた初号機が憎かった」

「そして、お前の顔を見るのがつらかった、だから、私の遠い親戚に預けた」

「ならなぜ、僕にそういわなかった、言ってくれたら、こんなに、父さんを憎むことは

なかったのに、どうして言ってくれなかったの、父さん」

「言えるわけじゃないだろう、小さいお前にどうして言える、言ったところで

理解できないだろう」

「理解できなくても、父さんがそばにいてくれるだけでも、違うんじゃないか」

「お前が、そばにいてはどうしても人類補完計画ができない、ゼーレには逆らえない  
それだけの権力がある組織に私が逆らえるわけがなかった」

「それは冬月、お前も理解しているだろう」

「確かにゼーレは恐ろしい、私のすべてをうばわれたからな」

「だから、お前に危険が及ぶことを避けるために、私のもとから離れた、確かに

あの親戚がお前にしたことは許されることではない、すなわち私もその点では

あの親子と大差ない」

「お前にとってあの親子も、私も同じ悪人、憎むべき悪人だ、憎んで余りあるだろう」

「たとえば、危険であろうともそばにいてほしかった、親であるなら子を守るのが

当たり前だろう、それが親子じゃないのか、答えるゲンドウ」

「私には何も言う資格はない、お前の思うようにすればいい、殴りたいと思うのなら

殴ればいい、殺したいと思うのなら殺してもいい、お前にはその資格がある」

「できるわけないだろう、親子なんだから、親子なんだからうつつうつつ」

「どうすればいい、どうすれば解ってくれる、どうしたら許してもらえる」

「私にはわからないんだ、どうすれば、どうすれば」

それはゲンドウの心からの叫びでした

その時初号機から声が

「あなた、それがあなたの本心ですか、心からの本心ですか、答えなさい、碇ゲンドウ

シンジに与えた心の傷あなたは癒してあげれるんですか、答えなさい」

「ユイ、ユイ、ユイ、お前覚醒していたのか、覚醒してくれていた

のか」

「そうです、ある方のおかげで、こうしてお話ができます、答えなさい

「今答えなければ、もう一生シンジとは分かり合えませんよ」

「シンジ、この愚かで大馬鹿野郎の私を許してくれるか、お前心の傷を

癒せるチャンスを私に与えてくれるか」

1  
 2  
 3  
 4  
 5  
 6  
 7  
 8  
 9  
 10  
 11  
 12  
 13  
 14  
 15  
 16  
 17  
 18  
 19  
 20  
 21  
 22  
 23  
 24  
 25  
 26  
 27  
 28  
 29  
 30  
 31  
 32  
 33  
 34  
 35  
 36  
 37  
 38  
 39  
 40  
 41  
 42  
 43  
 44  
 45  
 46  
 47  
 48  
 49  
 50  
 51  
 52  
 53  
 54  
 55  
 56  
 57  
 58  
 59  
 60  
 61  
 62  
 63  
 64  
 65  
 66  
 67  
 68  
 69  
 70  
 71  
 72  
 73  
 74  
 75  
 76  
 77  
 78  
 79  
 80  
 81  
 82  
 83  
 84  
 85  
 86  
 87  
 88  
 89  
 90  
 91  
 92  
 93  
 94  
 95  
 96  
 97  
 98  
 99  
 100  
 101  
 102  
 103  
 104  
 105  
 106  
 107  
 108  
 109  
 110  
 111  
 112  
 113  
 114  
 115  
 116  
 117  
 118  
 119  
 120  
 121  
 122  
 123  
 124  
 125  
 126  
 127  
 128  
 129  
 130  
 131  
 132  
 133  
 134  
 135  
 136  
 137  
 138  
 139  
 140  
 141  
 142  
 143  
 144  
 145  
 146  
 147  
 148  
 149  
 150  
 151  
 152  
 153  
 154  
 155  
 156  
 157  
 158  
 159  
 160  
 161  
 162  
 163  
 164  
 165  
 166  
 167  
 168  
 169  
 170  
 171  
 172  
 173  
 174  
 175  
 176  
 177  
 178  
 179  
 180  
 181  
 182  
 183  
 184  
 185  
 186  
 187  
 188  
 189  
 190  
 191  
 192  
 193  
 194  
 195  
 196  
 197  
 198  
 199  
 200  
 201  
 202  
 203  
 204  
 205  
 206  
 207  
 208  
 209  
 210  
 211  
 212  
 213  
 214  
 215  
 216  
 217  
 218  
 219  
 220  
 221  
 222  
 223  
 224  
 225  
 226  
 227  
 228  
 229  
 230  
 231  
 232  
 233  
 234  
 235  
 236  
 237  
 238  
 239  
 240  
 241  
 242  
 243  
 244  
 245  
 246  
 247  
 248  
 249  
 250  
 251  
 252  
 253  
 254  
 255  
 256  
 257  
 258  
 259  
 260  
 261  
 262  
 263  
 264  
 265  
 266  
 267  
 268  
 269  
 270  
 271  
 272  
 273  
 274  
 275  
 276  
 277  
 278  
 279  
 280  
 281  
 282  
 283  
 284  
 285  
 286  
 287  
 288  
 289  
 290  
 291  
 292  
 293  
 294  
 295  
 296  
 297  
 298  
 299  
 300  
 301  
 302  
 303  
 304  
 305  
 306  
 307  
 308  
 309  
 310  
 311  
 312  
 313  
 314  
 315  
 316  
 317  
 318  
 319  
 320  
 321  
 322  
 323  
 324  
 325  
 326  
 327  
 328  
 329  
 330  
 331  
 332  
 333  
 334  
 335  
 336  
 337  
 338  
 339  
 340  
 341  
 342  
 343  
 344  
 345  
 346  
 347  
 348  
 349  
 350  
 351  
 352  
 353  
 354  
 355  
 356  
 357  
 358  
 359  
 360  
 361  
 362  
 363  
 364  
 365  
 366  
 367  
 368  
 369  
 370  
 371  
 372  
 373  
 374  
 375  
 376  
 377  
 378  
 379  
 380  
 381  
 382  
 383  
 384  
 385  
 386  
 387  
 388  
 389  
 390  
 391  
 392  
 393  
 394  
 395  
 396  
 397  
 398  
 399  
 400  
 401  
 402  
 403  
 404  
 405  
 406  
 407  
 408  
 409  
 410  
 411  
 412  
 413  
 414  
 415  
 416  
 417  
 418  
 419  
 420  
 421  
 422  
 423  
 424  
 425  
 426  
 427  
 428  
 429  
 430  
 431  
 432  
 433  
 434  
 435  
 436  
 437  
 438  
 439  
 440  
 441  
 442  
 443  
 444  
 445  
 446  
 447  
 448  
 449  
 450  
 451  
 452  
 453  
 454  
 455  
 456  
 457  
 458  
 459  
 460  
 461  
 462  
 463  
 464  
 465  
 466  
 467  
 468  
 469  
 470  
 471  
 472  
 473  
 474  
 475  
 476  
 477  
 478  
 479  
 480  
 481  
 482  
 483  
 484  
 485  
 486  
 487  
 488  
 489  
 490  
 491  
 492  
 493  
 494  
 495  
 496  
 497  
 498  
 499  
 500  
 501  
 502  
 503  
 504  
 505  
 506  
 507  
 508  
 509  
 510  
 511  
 512  
 513  
 514  
 515  
 516  
 517  
 518  
 519  
 520  
 521  
 522  
 523  
 524  
 525

「わかった父さん、最後だからね、これが最後だからね父さん」

「うむシンジ、信用できないだろうが、信じてくれ」

「僕のこと、これでいいだが、レイのことはどうする」

「レイにも謝罪する、愚かな行為をレイにも」

隠れていたレイちゃんが登場します

「司令」

「レイ、聞いていたのか」

「はい、でも私の事はいいです、シンジ君と司令が仲直りしてくれるんですから」

「レイ、すまなかった、レイ」

泣き崩れるゲンドウ

「よかった、よかった、ゲンドウ、私もこれで肩の荷が下りるよ」

「先生、苦勞をおかけしました、愚かな生徒である私を」

「生徒の不始末をぬぐうのも教師の役目だよ、そうだろうユイ君」

「ありがとうございます、先生、愚かな母親と愚かな父親ですけど  
また先生のお世話になります」

「大きな生徒だな、君たちは、そしてシンジ君レイ君君たちもまた  
私の大事な生徒だよ」

周りには話を聞いていた整備員や職員がもらい泣きしていました

「聞いていたのか、みんな」

「司令、碇司令、困難がどれだけ大きくても私たちは乗り越えられる  
乗り越えられる、シンジ君やレイちゃんがいる限り」

ネルフ総本部がこのとき一つとなりました

「碇、ゼーレはどうする」

「ゼーレには今まで道理接する、しかし人類補完計画は、この時を  
持っては破棄する」

「それが私にできる謝罪だ！」

「わかった碇、私も協力しよう」

「私たちも協力します、司令！」

ネルフ総本部はゼーレに離反することがこのとき決まりました

「総員持ち場に戻れ！」

「了解！司令」

ある場所で、これを見ていたやんごとなき方たちも、ネルフとゲンドウに協力することを決めました

## ゲンドウの告白（後書き）

シンジ君とゲンドウの会話をお送りしました

作者としてはもう少しゲンドウに悪人になってもらうつもりでしたが  
こういう話になりました

シンジ君とゲンドウがこれからどういう活躍をするか楽しみです

では次のお話をお待ちください



## ゲンドウ殴られる(前書き)

ゼーレとの会合と日常の「コマ

## ゲンドウ殴られる

シンジ君と、碇司令の親子和解を果たしました。

これから始まる厳しい戦いには、欠かすことのない和解でした。

そして、碇司令の悪辣な行いはすべてゼーレに向けられることになりました。

ある日、ゼーレに呼び出された碇司令です。

「碇君、第三、第四使徒戦における、被害報告を読んだが、いったいなんだね

この被害報告は、国の1つや2つ、吹っ飛ぶくらいの金額じゃないか、碇君。」

「それに、君の息子にエヴァを与えるなんて、何を考えてるんだね碇君。」

「君は、与えられたことだけを、こなしていけばいいんだよ、碇君。」

「息子を、こちらに、来させたのは、計画に必要なだから呼んだだけです、

他に他意はありません。」

（ふん、お前たちの意見など、シンジの言葉よりも心に響かんわ、死にぞこないめ、

ユイとシンジとレイとの暮らしだけを考えてるんだよ馬鹿者め。）

と碇司令は考えています、聞いちゃいないということです。

「聞いているのかね、碇君。」

「すみません、計画のことを考えていました。」

「計画に遅延は許されない、予算はこちらで一考しよう、ご苦労だった碇君。」

「碇、裏切りは許さないぞ、心しておけ、以上だ。」

ゼーレの首魁、キール・ローレンツは最後にそういつて消えました。

被害報告に関してはかなり、大目に見積もって報告していました。

必要以外の予算はすべてネルフの職員と、ネルフの施設関連、福利厚生に使われていきました。

今までの罪滅ぼしです、此れには職員も喜んでいます。

そして、シンジ君とレイちゃんのために、というか、将来の結婚資金および生活のために

貯金されていきました、でも、シンジ君とレイちゃんは知りません、まだまだ子供です、

大金を与えては、二人のためにはならないと、冬月さんとの話し合いで決めました。

親ばかりと爺バカですね、京都の碇本家との和解も済んでおります、今までの不義理を

償い、謝罪し、大分殴られていたようで、顔がぼこぼこになって第三東京市に帰ってきた司令でした。

司令室での一コマです

「父さん、大丈夫かい？、大分腫れてるよ、顔が。」

「問題ない、これくらい覚悟の上で京都の本家に行ったんだ、これで済んでよかったよシンジ。」

「司令、かわいそう、痛くないの？」

「ありがとうレイ、これくらいは、問題ない、お前たちに与えた痛み比べれば、問題ない。」

「あいつはユイ君をかわいがってたからな、もちろん私もだがね、今でも力は有り余ってるんだな、よく高校時代、私もあいつと殴り合いのけんかしたもんだ、懐かしい思い出。」

「先生も殴り合いのけんかしたんですね、驚きです。」

今の冬月さんからは想像できないことを聞かされている三人です

「勉強だけしてたわけじゃないさ、運動もしてたさ、もう今はそんなことはできないね、ここに馬鹿がおるからな。」

と司令をにらむ冬月さんです。

「もう言わないでください冬月先生、改心したんですから、シンジも何とか言ってくれ。」

「自業自得です、父さん」

と、笑いあう4人でした

<プウ~~~~~>  
と警報が鳴りました。

「第一種戦闘配置、各員戦闘配置に着け!。」

ネルフ各所に指令する碇司令

「シンジ、レイ戦闘配置。」

「了解!」「了解!」

「行くよ!レイ!」

「はい!シンジ君!」

と、走っていきました

「碇、これからだぞ、これからが本番だぞ!碇!」

「わかっています!先生!私たちも指令室に向かいましょう!。」

第五使徒の登場です



## ゲンドウ殴られる（後書き）

ゼーレとの会合と日常のーコマをお送りしました

ユイの実家で殴られるゲンドウ

そして第五使徒戦にかかるお話でした

では次のお話をお待ちください

**決戦！第三東京市その1（前書き）**

さて第五使徒戦の前半です



## 決戦！第三東京市その1

第五使徒の襲来です、どのような戦いになるか、緊迫の時です。

「戦自強羅レイダーサイトより、ネルフ司令部に報告！」

「強羅方面より未確認飛行物体襲来、！」

「ネルフ司令部より強羅レイダーサイトへ報告感謝！」

ミサトさんが発令します。

「各防衛施設、順次攻撃開始」

ネルフに派遣されている、戦自陸上部隊からの砲撃が開始されました。

「武装ビル攻撃開始！」

しかし、どの攻撃施設、攻撃部隊の攻撃も第五使徒のフィールドに阻まれます

「攻撃、効きません、どうしますか、葛城一尉」

「各攻撃部隊、攻撃施設、使徒による光線攻撃により沈黙」

「司令やってみaitいことがあるので、試してよろしいですか？」

「葛城一尉、やってみたまえ。」

「初号機バルーンダミー発進！」

「攻撃！」

「ダミー、敵光線により破壊。」

「12式自走列車臼砲発射、攻撃。」

「12式自走列車臼砲、敵光線により破壊。」

ネルフの攻撃を悠々受けて進んでくる第五使徒、ネルフ本部真上に到着

「敵、真上に到着！使徒下部よりボーリングマシンにより切削開始。」

「ネルフ本部にボーリングマシン到達時間あと12時間！」

ミサトさんが、碇司令に報告します

「司令、報告します、敵の攻撃パターンが判明しました、こちらが攻撃すると

即座に迎撃してきます、また、同時攻撃には防御を優先されるところのがわかりました

私を考えますに、エヴァ2体による同時攻撃が有効だと考えます。」

「囷となるものが攻撃して、使徒が防御している間にもう一体がさ

らに攻撃する、  
攻撃するタイミングさえ間違えなければ、有効と考えます、如何で  
しょうか?。」

「マギの答えはどうだ、赤木博士。」

「MAGIの計算によると、レイさんが囷で、シンジ君が本命攻撃  
なら全会一致で70%の確率です  
但し囷の方には盾をもたせる事で100%になります、逆ですと8  
7%です、  
全会一致で本部放棄です。」

「わかった、許可しよう。」

「総員準備!」

歩きながら話すリツコさんとミサトさん

「うちのポジترونライフルじゃあの使徒には通用しないわよ、葛  
城作戦部長。」

「だから、考えがあるって言ったでしょう、赤木技術部長。」

「まさかあれを使うの、そ、リツコ開発の正宗、孫六と、戦自研の  
プロトタイプ。」

「開発はしたけど、まだ実践には使っていないわよミサト。」

「そこでお願いがあるんだけど、うちのポジترونライフルの先に  
孫六を銃剣の

ようにつけてほしいの、一の矢、二の矢を持たせたいの、囀にはかなりの負担が

来るから、シンジ君には正宗を持たせて、攻撃。」

「また、ずいぶん危険な賭けね、大丈夫なのミサト。」

「シンジ君とレイちゃんの息がどれだけそろつかにかかってるの。」

「お願いリツコ。」

「わかったわ、ミサト。」

「技術部に発破かけないといけないわね、ミサト。」

「ありがとう、リツコ。」

「あなたとは大学時代からの腐れ縁だからね。」

「さて、戦自研に行きましょう。」

「リツコもう一つお願い、司令に連絡しておいて許可が出るよう、お願い。」

「わかったわ、時間がないのは同じだから、早くいつてらっしゃい。」

「ありがとう、リツコ、愛してる。」

と、走り去っていくミサトさん

「そんなことは昔から知ってるわよ、ミサト。」

「やれやれ。」

昔、リツコさんと、、、やめておきましょう、倫理規定に引っかけられるかもしれませんから。

戦自研にて

「戦自研で開発したポジトロンスナイパーライフルのプロトタイプ、ネルフ特別指令により

徴収します、できるだけ、原型をとどめてお返しします。」

「上よりの指令により了解しました、壊しても構いません、日本のために使うなら本望です。」

「ありがとうございます、友永技術一佐。」

「シンジ君~~~~~壊さないように丁寧に扱ってね。」

「了解で~~~~~す。」

「彼がエヴァのパイロットですか、いい少年ですね、葛城一尉。」

「ええ、私たちの希望の星です、友永一佐。」

「では、失礼します。」

「敬礼!。」

「敬礼!。」

「さみしい時代になったものだ、あんな少年を頼らないといけないなんて、大人として失格だな。」

さみしくつぶやく、友永一佐でした

## 決戦！第三東京市その1（後書き）

第五使徒戦の前半をお送りしました

では次のお話をお待ちください

## 決戦！第三東京市その2（前書き）

決戦！第三東京市の後半をお楽しみください



## 決戦！第三東京市その2

### 決戦！第三東京市

「シンジ君、レイちゃん、よく聞いてね。」

「はい。」「はい！」

「まず、盾を持ったレイちゃんがポジトライフルで攻撃、つづ  
けさまで銃剣でもう一度攻撃、

いいわね、シンジ君はプロトタイプで攻撃、いいわね、シンジ君と  
レイちゃんの息が合わない」と

攻撃は失敗します、息を合わせて攻撃してください、以上質問は？、  
なければ解散。」

技術部のおかげで時間までに改造が終わりました、技術皆さんお疲  
れ様でした

あとはシンジ君たちの頑張りです

「ネルフの興廃、この一戦にあり、各人の一層の努力を期待する！  
以上！」

碇司令の訓示が終わりました

あとはシンジ君たちです

「レイ、怖くないかい。」

「シンジ君がいるから大丈夫。」

月明かりに照らされた二人の会話です

「時間が来た、行こう、レイ！」

「はい、シンジ君。」

<午前零時をお知らせしますピッピッピポ~~~~ン>

「攻撃開始！」

ところが当初の作戦行動にはないことが起こりました。

「使徒、シンジ君に向けて攻撃を開始しました、まずい、シンジ君は盾を持っていません！」

プロトタイプのほうが攻撃力がある、と感知した使徒がシンジ君に向けて攻撃してきました。

（シンジ危ない、光鷹翼を展開する！」

三枚の光鷹翼が展開しました

（シンジ、後を頼む、光鷹翼の維持に俺は神経を注ぐ。）

使徒の攻撃を防いだシンジ君

「レイ、！いまだ！攻撃しろ！」

さっきの使徒の攻撃であせているレイちゃん、シンジ君の言葉で

我に返るレイちゃん。

「狙いを込めて、発射！」

零号機からの攻撃でフィールドを展開する使徒

「敵、フィールド展開、零号機の攻撃防御！」

「シンジ君、攻撃開始！」

シンジ君の攻撃が開始されました。

「発射！」

シンジ君、必殺の光線砲が火を噴きました。

「敵を見事に貫きました、敵沈黙、攻撃成功です。」

どつと、ネルフ全体から歓声が上がります。

司令からの言葉

「シンジ、レイよくやった、ありがとう。」

「諸君！、今回はご苦労だった、ゆっくり休んでくれたまえ、以上！」

そのころの二人はというと、二人ともエントリープラグの中で気を失っていました。」

もちろんシンジ君の中の天地君も力を使いすぎたため、休眠状態に陥ってしまいました。

さっそく、ネルフ病院に二人そろって入院しました

鷺羽ちゃん、ノイケさんかというと、のびていました、、、、、、

## 決戦！第三東京市その2（後書き）

決戦！第三東京市の後半をお送りしました  
緊迫するシーンをお届けしましたが  
どうだったでしょうか

では次のお話をお待ちください

## ジェットアローン(前書き)

ジェットアローン<J A>のお披露目です

## ジェットアローン

第五使徒戦で無理しすぎたため、入院となりましたシンジ君とレイちゃん。

入院もそんなに長くなく次の日に、退院です。

そして、数日経ちました、

日本重化学工業共同体から招待状が来ました。

「なにに、ネルフ殿、この度、当日本重化学工業共同体が開発した、支援用戦闘機体

ジェットアローン<J A>が完成したのでお越してください。」

「へーそんな機械ができていたなんて知らなかったわ。」

「リツコ知ってた？」

「ええ、戦自研の友永一佐から情報が来てたわ、どんなのかは知らないけど。」

「それは興味があるわね、エヴァの支援ができたらいいいけど。」

「詳しい話は、私も知らないわ、ミサト。」

「行ってみたら、わかるんじゃないの？ミサト。」

「同行者は、私にリツコ、シンジ君、レイちゃんの4人か。」

「気晴らしになるかもしれないわね、あんな大きな戦闘があったばかりだからね。」

「そうね、それがいいかもしれないわミサト。」

「エヴァ持参となってるわ、リツコ。」

「????よくわからないわね、何がしたいのかしら。」

とそんな会話しながら、歩いていきました

当日が来ました

「この度は、わが日本重化学工業共同体の、開発した支援戦闘機体ジェットアローンの

完成披露パーティーにお越しくださいましてありがとうございます。

」

「このたび何故この機体を開発したかというと、先日 of 使徒戦で、エヴァ初号機、および

零号機の戦闘を拝見し、何か支援できることはないかと考えた末の機体です。」

「この機体の特徴はエヴァ用の武器、エヴァの搭載、電源設備等を搭載しており、いわば

空中空母として開発しました、バリアー当は搭載しておりませんがそれに代わる、



電磁膜を搭載しております、先日の使用徒が発しました光線を1分以上防ぐ性能を持っております。」

「海に山に空中にと作戦行動、及び作戦支援ができる機体となっております。」

「当ジェットアロンに搭載されているエンジンは超電導エンジンで、作戦行動が150時間となっております」

「おります、見かけは不格好な機体ではありますが、決して、期待に恥じないものに仕上げております。」

「武装ですが、実弾兵器を9門、レーザー砲3門、電磁砲1門となっております、これも」

「エヴァ支援のためのもので、実際に使ってはいませんが、必ずや期待に添えるものと思っております。」

「わが日本重化学工業共同体を中心に、戦自研、そして天才科学者の白眉鷺羽さんの協力により完成し、そして、マギの支援も受けております。」

「そんな面白いこと、なぜ、教えてくれなかったの、母さん、本当に、、、、。」

「マッドがここにいます、マッドが。」

「（鷺羽ちゃんも噛んでたのね、暗躍するの好きだな鷺羽ちゃん、鷺羽ちゃんのい、け、ず、）」

「リッコさんが壊れました」

「さて長々と語りましたが実際に運用したいと思います。」

「では、エヴァ初号機の碇シンジ君、エヴァ零号機の綾波レイさん、  
よろしくお願いいたします。」

「司会は時田シロウでした。」

「説明は白眉鷺羽さんをお願いいたします。」

「鷺羽ちゃんです。~~~~~す。」

「まずシンジ殿、レイちゃん、アンビリカルケーブルを接続してく  
れる、どんな感じかな。」

「すごいです力があふれてくる感じがします。」

「右に同じです。」

「シンジ殿、新開発のエヴァハンマーを壊れたビルにたたきつけて  
」

「鷺羽ちゃん一瞬でビルが粉々になりました、すごい威力です。」

「レイちゃん、これも新開発のニードルマシンガンと同じく壊れた  
ビルに発射して。」

「針がマシンガンに弾のように次々飛出して行きます、これもビル  
を破壊していきます  
すごい威力です、鷺羽ちゃん。」

「エヴァハンマーはシンジ殿専用、ニードルマシンガンはレイちゃ

ん専用です。」

「あとは改良型プログナイフ、改良型正宗ソード、改良型孫六エクスターミネーターソード  
この三つはどのエヴァも装備できます、あとは開発中です、期待してほしいね二人とも。」

「説明終わります鷺羽ちゃんでした。」

（鷺羽ちゃんはこういうこと好きだからね、シンジ）

（僕もそう思います、兄さん）

「最後にネルフの皆さん、どうか日本を守ってください、私には武器しか開発できません、  
皆さんにお願いするしかありません、どうかよろしくお願いいたします。」

涙を浮かべながら話す時田さんでした

そして皆さんから拍手が起きました、ここに参加してる戦自の高官、政府のお偉方

財界の面々の思いが拍手となって起きました、もちろんネルフのみんなも拍手していました

## ジェットアローン（後書き）

JAのお披露目でした、時田さんの思いの詰まった  
機体です、活躍してほしいものです

では次のお話をお待ちください

惣流・アスカ・ラングレー（前書き）

アスカちゃんのお話です

## 惣流・アスカ・ラングレー

そろそろドイツにいる少女について語りましょう

「私の名前は、惣流・アスカ・ラングレー、ドイツ人と日本人のクォーターです。」

「ネルフドイツ支部所属のエヴァンゲリオン二号機パイロット、天才だ、秀才だともてはやされる  
美少女、頭のインターフェイスヘッドセットがお気に入り、ワンポイントかな、うふっ」

「プラグスーツは赤い色、あまり好きじゃない、どちらかというと蒼色がよかった、だって

日本にいる初号機パイロットの碓　シンジさんの色がよかった、以前、日本総本部から

送られてきた資料とビデオを見て一目で好きになっちゃった、かつこよかった、白馬に乗った

王子さまみたいだった、でも、この気持ちを表に出してはいけない、ネルフドイツ支部じゃ

日本総本部を目の敵にしているから、私も仕方なく気丈にふるまわないといけない、疲れる。」

「私の与えられている私室はシンジさんでいっぱい、シンジさんの写真、シンジさんのプラグスーツの  
コピー、初号機のプラモデル（自作）、どうしてこんなにシンジさんが好きなんだろう、もう少ししたら

シンジさんにあえる、ただ横にいるの綾波レイさんがちょっといやかな、恋人だとも聞いている。」

「同じ人を好きになったのだから、きつと仲良くできる、そして同じパイロットうん、きつとなかよく出来る。」

「三角関係、うふっ、そばにいただけでいいかな、今は。」

「早く会いたいな、早く。」

「今日は訓練日、気丈にふるまわないと、疲れるけど仕方ないよね、終わったらシンジさんの写真に癒されよう。」

「私は天才よ、あなたたちとは出来が違うのよ、（ごめんなさい、ごめんなさい、と心の中で謝ります）、早くしなさいよ、愚図ね、（すみません、すみません）さっさとしなさい、あんたバカあ、（すみません、馬鹿じゃないです）」

「というように、訓練をこなしていきます、私の心を知っているのは、頼れるお兄さんの加持リョウジさんだけです。」

「ふとした時に、本心を漏らしたのを聞かされていたようです、＜私は何もできない女の子、訓練もつらいし、何よりネルフに勤める大人の人たちの日本嫌いと高いプライドが嫌＞と声に出してないつもりだったのに出していたのを聞かれたみたい。」

「アスカ、そんなにづらかったのかい？」





「す何もできません、努力だけは人一倍に頑張りました、お料理もできません、裁縫も、ちっとも見た目は女らしくないでも、かわいいものは好きシンジさんが好き！、この気持ちは誰にも負けません。」

「加持さんは、優秀なエンジニアでたまにしかこっちにいないけど、帰ってきたら、いつもお土産をくれます、それは、シンジさんグッズです私の宝物。」

「加持さんから最高の情報をいただきました、それは、シンジさんのいる日本に行けることが決まりました。」

「先日の第五使徒戦でピンチに陥った時、二機構成では無理が出てきたから三機構成で行くことが決まり、急遽、私と二号機が派遣されることに決まりました、うれしかったです、シンジさんに会えることが

憧れのシンジさんに、シンジさんにあうときは精いっぱいおしゃれしなくっちゃ、あと私室のシンジさんグッズは忘れずに持っていこう。」

所変わってネルフ総本部では碇司令、冬月さん、シンジ君で話し合いがもたれました。

「先日の使徒戦はかなり危ない橋を渡った、予想外の攻撃でシンジ、お前にも危険が迫ったな、シンジ。」

「確かに、あわやというところで天地兄さんのおかげで何とかなかった。」

碇司令はシンジ君の中の天地君の存在をシンジ君に聞いていました。

「うむ、天地君が咄嗟に張った光鷹翼に助けられた、天地君に感謝だ、な、碇。」

「今回はレイとシンジで何とかできたが、これからは2人だけではつらい、ドイツの二号機を呼び寄せるよう、死にぞこないどもに進言しよう。」

「それがいい、碇、二機と三機じゃ運用方法がかなり違ってくるだろつ、シンジ君の負担も減るよ。」

「ドイツのパイロットの女の子に申し訳ないよ、父さん。」

「そうは言つが、レイにも負担が来るぞ、それでいいのか、シンジ。」

「考え込むシンジ君、やがて、しぶしぶ返事をするシンジ君

「わかったよ、父さんその女の子とレイとぼくの三人で頑張るよ。」

「帰っていいぞ、シンジ、あとは大人の仕事だ。」

外でシンジ君を待つレイちゃん。

「遅い、シンジ君。」

「ごめんごめん、話し合いが長引いちゃってごめんねレイ。」

「レイに話があるんだ、ドイツから新しいパイロットが来るらしい、

この前の使徒戦で、  
危機感を持った父さんが決めただ、新しいパイロットとがんばろう。」

新しいパイロットと聞いて危機感を持ったレイちゃん、シンジ君の腕を今以上に強く握るレイちゃんでした

ゼーレに連絡を入れた碇司令は二号機と二号機パイロットの召喚を進言します

「なんだ、碇、急の連絡をここにはあまり連絡するなどっておつただろう、碇。」

「申し訳ありません、キール議長、先日の使徒戦にて零号機、初号機の破損により、次の使徒が、  
来た場合防衛する手段がありません、そこでドイツの二号機と二号機パイロットを召喚できればと  
思い連絡させていただきました、先日の使徒戦の報告書はお送りしたはずですが、如何でしょうか  
それにこれ以上計画を遅らせるわけには行けませんし、如何でしょうか？」

「うむ、読ませてもらった、甚大な被害をこうむったようだな碇、被害額も馬鹿にはならないな  
わかった碇、修理金額と、二号機召喚は許可しよう、これ以上の計画の遅延は避けなければならない、  
言っておくぞ碇、新たな計画は認めない、それだけを覚えておけ、  
以上だ、碇、ご苦労だった、では消えろ！」

「すべてゼーレの心のままに。」

そして明かりがつかました

「先生、議長が認めました、我々の計画も大きく飛躍するでしょう。」

「そうだな、碇、みんなのために頑張ろう。」

碇司令と冬月副司令の2人で密談を始めた

惣流・アスカ・ラングレー（後書き）

アスカちゃんの近況と召喚のお話を  
お送りしました

では次のお話をお待ちください

## アスカ来日（前書き）

アスカが来日します

5万ACCESありがとうございます  
少し遊びを入れてみました

## アスカ来日

ネルフドイツ支部から移送されることになった二号機とアスカちゃん  
アメリカ海軍太平洋艦隊に寄せられて日本に来ます

オーバーザレインボウ艦内での会話です

「ミッキー・トムキャット・サイフォン海軍大将に報告します、う  
む、このたびの二号機と  
わたくし、惣流・アスカ・ラングレー特務軍曹の移送の無理な願  
いを聞いていただき、  
誠にありがとうございます、これよりはわたくしもクルーの一員と  
して御世話になります。」

「わたくしのことはアスカとお呼びください、提督。」

「礼儀正しいその姿に感動した、私のことはミッキーと呼んでくれ  
たまえ、ミッキーと呼ばせるのは  
身内が親しいものにしか呼ばせてはいない、昔の愛称、突撃ミッキ  
ーと呼ばれたものだ、F14に乗って  
ベトナムで活躍したよ、今でこそ司令長官だとか提督と呼ばれてい  
るが、艦載機乗りだったのだよ、昔はね  
今でもたまに、専用のF14トムキャットテイルマークはplay  
boyに乗っている、今度のせてあげよう、期待していたまえ、私  
は君が気に入った。」

「アスカ君、艦長のシン・ユニコーン・アザマ中将だ紹介しよう、  
私の戦友だ、シン挨拶しろ。」

「俺がこの空母の艦長シン・ユニコーン・アザマだこのバカの戦友だ、シンとでもどうとでも呼んでくれ、ちなみに私も艦載機乗りだ、私の機体はF20タイガーシャークテイルマークはユニコーンだ、よくこのバカとつるんで飛んでいる。」

「バカとはなんだバカとは、シン。」

「演習だといっては飛び出すバカがどこに、止める俺の身にもなってみろ、この飛行機バカがあはははは」

「そっいうな、シン、わはははは。」

「この艦隊は見ての通りアットホームな雰囲気 of 艦隊だ、気楽にやってくれ、そうそうこの艦隊には結構面白い」

奴が乗ってるから、会ったら挨拶してやってくれ、それとこの艦隊の通称名はエリア77だ、言葉悪い言い方だと

地獄の一丁目艦隊だとも言われている、訓練が地獄のごとく厳しいから言われてるがな。」

「ありがとうございます、ミッキー提督、シン艦長、では失礼します、敬礼。」

「面白い艦隊だわ、ミッキーさんにシンさん、変わった人たち、でもなじめるわ、2人とも素敵な男性だわシンジさんがいなかったら好きになってたかも、。」

「少し見学してみよう興味がわいたから。」

フライトデッキでは訓練をしていました・



「なにちんたらやってるんだ、敵はすぐそこにいるんだ早くしろ！」

「っやかましいひげダルマ、こちら精いっぱいやってるんだ、死んで来い、ひげダルマ」

「トンキン湾の人食い虎を待たせるなんて、なんて阿呆な整備員だ。」

「お嬢ちゃんどいてな、このあたいが飛ぶ所よくみてな。」

「僕のイチゴジャムどこ、あねこ、なめたね僕のイチゴジャム。」

「お子様は、イチゴジャムでもなめて寝てな。」

「僕も飛びます、僕のハリアーでシンさんみたく」

「私も出る！みなついてこい給料払えんがな。」

「すごい飛んでる戦闘機押しつけて無理やり飛んでいる、なんてすごい、なんて無茶な飛行隊なの。」

後ろから来たシン艦長がアスカに声をかけました

「これが私たちの艦隊だ、驚いたろう、戦場を駆け抜けて、それでもまだ求める

軍人の性、逃れられない宿命さ、みんなそれがわかってるから、真剣に訓練する

守りたいものを守るため。」

「私も軍人の端くれです、守りたいものがあります、シン艦長、ミツキー提督のように」

戦場を駆け抜けたことはありません、でも負けたくないす、お二人や今訓練してる方たちには、でも怖いです怖くてたまりません、守れるのか、戦えるか？」

「私もミツキーもここに訓練している全艦隊の軍人たちも怖いさ、逃げ出したいさ、

でも許されない、死んでいった戦友、殺してきた人たちのためにも、そして愛する家族のためにも

逃げない、逃げ出すことは許されない、アスカ君も肝に銘じておきたまえ私の言葉とこの艦隊のことを。」

「はいシンさん、忘れません。」

シン艦長とお話していた時突然の警報が鳴りました

「未確認物体水上をかなりはやい速度でこちらに進行中、繰り返す。」

「未確認物体水上をかなりはやい速度でこちらに進行中」

ミツキー提督が叫びます。

「第一種戦闘配備、敵は未確認生命体、各艦隊戦闘開始、各戦闘機隊発進！」

「ただちに攻撃せよ、ただちに攻撃せよ。」

「惣流・アスカ・ラングレーは二号機に迎え、ヘリは用意する。」

「君の戦場に迎え、そしてつ戦って勝利してこい！」

「了解、惣流・アスカ・ラングレー二号機に向かいます。」

OTRからアスカを乗せてヘリが飛びます格納船に。

格納戦に着いたアスカはプラグスーツに着替えエントリープラグに乗り込みます

「言語日本語に切り替え、エヴァンゲリオン発進します。」

「提督、命令をお願いします。」

「今わが艦隊が攻撃している、弱ったところを二号機で攻撃せよ！」

「復唱、惣流・アスカ・ラングレーは敵未確認物体が弱ったところを攻撃します。」

「アスカ、行くわよ、私の戦場に、シンジさんとともに戦うために。」

「シン艦長よりエヴァンゲリオンに達する敵生体は口の中に弱点があると思われる、

口の中を攻撃せよ、そして大きく口を開けさせよ。」

「惣流・アスカ・ラングレー復唱します、敵生体の口に攻撃をし、大きく口を開けさせます。」

そしてアスカは使徒の口にたどり着き口の周りを攻撃します

「これを開けさせないと、いけないんだわ、二号機頑張つて。」

アスカは下口ビルを足で踏みしめ、上唇を両手で持ち、力の限り開けようとしています。

「全戦闘機及び全艦隊エヴァンゲリオンが開けた口にすべてのミサイルを撃ち込め！」

徐々に開いてくる使徒の口、そして大きく開け放たれました、二号機もろとも、

使徒の口に全ミサイルが飛び込みました。

「全弾命中、敵生体爆発します。」

爆発の衝撃で運よくOTRの甲板に放りだされた二号機

中ではアスカが気絶しています「きゅうつうつうつ」

「戦闘終了、第二種警戒配備に戻れ、繰り返す、第二種警戒配備に戻れ」

いつもの喧噪に戻るエリア77です。

「救護室に運ばれたアスカが、提督に文句を言います。」

「ひどいで～～～す、提督。」

「あはは、でもこれが戦場だ、味方がいても、攻撃をする、攻撃をしなければ」

自分たちが殺される、わかったな惣流・アスカ・ラングレー、ためらうな、ためらうと

死が待っている、戦場では何が起こるかもしれない、ためらうな、わかったね、アスカ君」

「肝に銘じましてこれからもがんばります。」

「クスッこれが地獄の一丁目艦隊の戦闘だ、にこっ。」

「ミツキー提督、シン艦長ありがとうございました。」

それからのアスカはほかの乗組員とともに、訓練やレクリエーションに参加し汗を共に流すのでした。

そして、一週間後横須賀港に到着しました

## アスカ来日（後書き）

アスカが来日しました

OTRでに生活と使徒戦のお話でした

少しだけ、ゆうめいな、傭兵部隊の方達を出させてみました

では次のお話をお待ちください

## 横須賀港での事（前書き）

アスカちゃんの横須賀港での一コマです

## 横須賀港での事

到着したOTRは二号機を下す準備をしていました  
すっかりOTRのクルーになりきったアスカちゃん、ここのしきたり道理、提督とか言わず

「ミッキーさん、シンさん。」というように名前で呼ぶことになっていました。しかし最後はちゃんと敬称を付けていました。

「ミッキー提督、シン艦長、この一か月どうもありがとうございました、この一か月の航海で、得た貴重な体験はわたくしの人生にとってかけがえのない貴重な体験でした、この先に起こるであろう、闘いの糧にさせていただきます。敬礼!。」

「アスカ君、またOTRに来ることがあればいつでも歓迎しよう、君の好きなシンジ君とやらと一緒になふふ。」

「なっなぜそれを。」真っ赤になるアスカちゃん。

「ふふ、一か月も一緒にいれば自然とわかるものさ、ふふふ。」

「幼気な少女をからかうなミッキー、このヤンキーが、かわいがるのもほどほどにしろ。」

「やかましいハーフジャパニーズ、てめえもアスカちゃんに恋人いなかったら息子の嫁になんてほざいて



いただろうが。」

とうとう二人で喧嘩を始めてしまいました、二人の後ろでクルーがこぼしてます

「やれやれ、また喧嘩始めたよこの二人自分が気に入った人間が、いるといつも喧嘩始めるんだよね、

確か前もそうだったな、確か名前なんて言っただけ、葛城、そうそう葛城ミサトだ、あのこもお気に入りで入った。」

ためいきつく、クルーでした

そうこうするうちにネルフから迎えが来ました

「ちわゝ迎えに来ましたよ、、、、ゲツ突撃ミッキーに冷酷シン、ゝゝゝ、やばい逃げよう。」

「逃げるな、ミサト、ミサ。」

喧嘩してたはずの二人ですが、新たな獲物が来たことに気が付きました

「ミサトよく来た、私が忘れられなかったふふふつ。」

「ミサよく来たね、歓迎するよくく。」

「いやだゝだから来るのいやだったんだ、こいつらいるのわかってたからいやだったんだ。」

「懐かしいね、またOTR名物ヘリバンジーやりたいかい、ふふふ、

くすくす。」

「なにがヘリバンジーじゃ、ヘルバンジーじゃないか、命綱なし救命胴衣だけで蹴りだされる何て、

二度と食らいたくないわ~~~~~」

「初めまして、こんにちは、惣流・アスカ・ラングレーです、葛城作戦部長さん。」

「はじめまして惣流・アスカ・ラングレーさん、よろしくね。」

「気軽に、アスカと呼んでください。」

「あたしのことは、ミサトって呼んで。」

「はい、ミサトさん。」

「ところで、ミサトさん、ヘリバンジーしたんですか?。」

「えっどういうこと?、アスカさん。」

「はい、私も体験しましたよ、スリルがあって楽しかった。」

「楽しかったって、あなた、怖くなかったの、ヘリバンジー。」

「ええっ、エヴァに乗ってると、そういう訓練をドイツでしていましたから、ヘリくらいじゃ

怖くないんです。」

驚いてあんぐりしてるミサトさん。

「なんちゅう、訓練してるんじゃ、ネルフドイツ支部は、、、。」

「名物食わしてやろうとウキウキしてたら簡単にこなすんだよな、この子は。」

「泣くかと思ってたら、まだやりたいって言ったなさすがの俺もミッキーも驚いたよ、

ミサとは大違いだったなあはははは。」

「だから、来るのいやだったんだ、このくそおやじどもめが、悪党め、幼気な新兵の時の私を

いたぶりやがって訓練だつゝうて重装備で艦内全力マラソン、同じく重装備での艦橋までの綱のぼり数えればきりがないわ、ふゝふゝふゝ。」

「ここじゃ当たり前だぞ、最後にはやりとつしたじゃないか、いまじゃ簡単こなせるだろう、ミサ  
そうそう悪い思い出ばかりじゃないだろう、ミサがやりとおしたとき、お前はO T Rのクルーになれたんだ。」

「そりゃそうだけど、ありゃひどいよ、今でも夢に出てくるよ、ミッキー、シン。」

（私も、ミッキーさんやシンさんと呼び捨てにできるよう頑張らないと、うふっ）

「言つとくが、アスカちゃんも、やったからな、ミサトがしたことを、ミサトみたいに

泣き言は言わなかったぞ、歯を食いしばって、頑張ってこなしてたぞ、根性ある子だよ、この子は、  
いまじゃ地獄の一丁目艦隊のアイドルだよミサトとためはるほどのな、今でもお前はこの艦隊の  
アイドルだよ、ミサト。」

「えっそうなの、アスカさん。」

「そんなわたしなんて、まだまだですよ、ミッキーさん。」

「謙遜するのがまたかわいいんだ、アスカちゃん。」

「積み下ろしも終わったようだ、楽しかったよ、ミサト、ミサ、アスカちゃん。」

というミッキーさんとシンさんです

「はっ、惣流・アスカ・ラングレー特務軍曹、退艦します、敬礼！。  
」

「はっ、葛城ミサト特務三尉、退艦します、敬礼！

「日本での活躍を期待する、アメリカ海軍太平洋艦隊司令長官ミッキー・トムキャット・サイフォン大将より

惣流・アスカ・ラングレー特務軍曹へ、敬礼！。」

「同じく活躍を期待する、アメリカ海軍太平洋艦隊旗艦オーバーザ  
レインボウ艦長、シン・ユニコーン・アザマ中将より  
惣流・アスカ・ラングレー特務軍曹へ、敬礼！。」

「ミッキーさん、シンさん、艦隊の皆さんお元気で、うつうつ」

「がんばれよ~~~~~」と手を振るクルーの皆さん

うつすら涙を浮かべるアスカちゃんでした

「がんばれよ~~~~~」と手を振るクルーの皆さん

「元気でね、ミッキー、シン、またうまいお酒、今度きたら飲みましょう、またね。」

「楽しみにしてるよ、ミサト、ミサ」

こうしてOTRから去っていきました、アスカちゃんとミサトさんでした

## 横須賀港での事（後書き）

横須賀港での出来事と

ミサトさんとアスカちゃんの出会い、ミサトさんの過去が少し出てきました

では次のお話をお待ちください

## アスカ告白（前書き）

アスカちゃん着任のあいさつです

## アスカ告白

横須賀から移送された二号機はネルフ本部、整備課に渡されました着任のあいさつをするために、司令室に案内されたアスカちゃん

「本日、ヒトマルマルネルフ総本部に着任いたしました、惣流・アスカ・ラングレー特務軍曹であります  
どうかよろしくお願いいたします。」

「惣流・アスカ・ラングレー特務軍曹、着任のあいさつご苦労、私がネルフ総本部、総司令の碇ゲンドウだ、  
こちらにいるのは、副司令の冬月コウゾウさんだ。」

「冬月です、ここの副司令をやっています、惣流・アスカ・ラングレー特務軍曹、長旅ご苦労だったね、  
着任早々のあいさつご苦労様。」

「そちらにいるのが、技術部長の赤木リツコ技術三佐だ、エヴァの装備等の開発をしている、何かと相談すればいい。」

「こんにちは、惣流・アスカ・ラングレー特務軍曹さん、これはという装備があれば、できる限り開発します、よろしくね。」

「そちらにいるのが、君を迎えに行った、作戦部長の葛城ミサト一尉だこれからは直属の上司になる、公私とともに世話になる人だよろしくしたまえ。」

「挨拶はもうしたからいいね。」



「幹部の紹介はこれで終わりだ。」

「次は君の同僚になる人物の紹介だ。」

「そこにいるのが、エヴァンゲリオン零号機パイロットの、綾波レイ特務軍曹だ。」

「綾波レイです、惣流・アスカ・ラングレー特務軍曹さんこれからよろしくね。」

「次が私の息子で、エヴァンゲリオン初号機パイロットの碇シンジ特務軍曹だ、仲よくやってくれ」

「碇シンジです、惣流・アスカ・ラングレー特務軍曹さん、これからはともに三人で頑張ろう。」

「皆様これからはよろしくお願いいたします、皆様、これからは、私のことはアスカと呼んでください、早く慣れたいと思いますから。」

（アスカ勇気を出すのよ）

「碇シンジさん、私はあなたのことが好きです。」

どよめきが起こります

「あなたをドイツで見たときから好きになってしまいました、付き合ってくださいとは申しませんが、  
ですが気に留めておいてください。」

「綾波レイさん、あなたがシンジさんを好きなのは、承知しております、ですが、この気持ちに嘘はつきたくない、ですから、シンジさんが振り向いてくれるまで待ちます。」

驚いているレイちゃん

「ありがとうございます、アスカさん、素直な気持ち私にもよくわかります、私もシンジ君が好きです、この気持ちに嘘偽りがありません、ですから、今日からあなたはライバルであり、同じ好きな人を守る同志となります、ですから私はアスカさんをアスカと呼び捨てにします、いいですねアスカ。」

「私も同じく、シンジさんを守りたいと誓います、ライバルそして同志になります、私もレイさんと呼び捨てにします  
レイ、これからもよろしくお願いいたします。」

「ちょっと、ちょっと、待ってよ、僕の意見は聞かないの？無視するの？。」

「これは女同士の会話です」「シンジさん」「シンジ君」は黙っててください。」

「とほほほ、」

落ち込むシンジ君

（やっぱり、こうなったかシンジ、こうなる予感があった）

（そんな~~~~~兄さん

（苦労するぞ、シンジ）

「とほほほ」

後ろで外野がささやいています

「やるわねシンちゃん、両手に花ね。」

「無様ね、シンジ君」

「この年でおじいちゃんになるのかニコニコ。」

「長生きはするもんだ、孫が抱けるなんて」

本当に勝手なことを言う方達です

「よし決めた、今日から、アスカ君、レイ、シンジ、同居を許可する。」

「ちょっと待ってよ父さん、行き成り同居なんて早いよ、先生も何とか言ってください。」

「シンジ君、私も碇の案に賛成だ、あきらめたまえ、シンジ君。」

「葛城君、そういうことだから今日からシンジを引越しさせる、拒否は認めない。」

「同居先は葛城君の隣、いまレイが住んでいるところだ。」

「同居を解消させるが、給料はアップさせる、これで文句はあるまい。」

「そっそんな~~~~給与が増えても~~~~シンちゃんの料理

が、、、、、とほほ。」

黄昏るシンジ君とミサトさんでした

力なくミサトさんに告げるシンジ君

「ミサトさん、料理は今まで道理、作りますから、、、、。」

「シンちゃ~~~~~ん。」

「給与が増えたんですからミサトさん材料代だけくださいね。」

「シンちゃんのいけず~~~~~」  
「~~~~。」

「うわ~~~~~」  
「~~~~ん。」

「リッコさんが一言」おお無様ね、ミサト。「

最後のリッコさんの一言がきついですね

## アスカ告白（後書き）

着任のあいさつと

シンジ君への告白レイちゃんへのライバル宣言

この恋の行方波乱が待ち受けてるのは間違いないと思うのは  
作者の思い込みでしょうか

では次のお話をお待ちください

**司令室での出来事、前篇（前書き）**

司令室での出来事です

## 司令室での出来事、前篇

引っ越しも決まり、ウキウキの二人と対象的に落ち込むシンジ君

（決まってしまった物はしょうがないぞ、おれの時はずっとひどかったぞ）

アエカさんとリョウコの喧嘩だったからな）

（兄さんに比べればましか）

（そうだ、二人とも、お前のこと好きと表明してるんだから。）

（わかりました、兄さん、前向きに行きます、アスカさんはきれいな子ですし）

と二人で会話していました

指令室では雰囲気が先ほどの甘い物ではなく緊迫したものになりました、それはアスカちゃんとは別便で

きた加持さんのもたらした物が原因でした

「司令、副司令、これが例の物です、正真正銘の、アダムの幼生固定されたものです、

これが、最初の使徒、アダム、盗み出すのに苦労しましたよ、司令、副司令」

「碇、またよからぬ事を考えてはいまいな、今度は、お前シンジ君とエヴァのユイ君に殺されるぞ。」

「冗談ではありませんよ、二人に殺されたくないですよ、やっと親子の仲直り出来たんですから、先生。」

「ならいい、碇。」

「ちょっと、お待ち。」

「それをちょっと見せてくれるかい、司令殿。」

鷺羽ちゃん登場

「おかしい波動があるから来てみれば、そういうことだったかい」

自らのキーボードをあやつり、アダムを精査する鷺羽ちゃん

「ふむ、これは偽物だよ、精巧作られた偽物、たぶん本物はゼーレで嚴重に隠されているというよりも

レイ殿のように人間化している恐れがあるよ、レイ殿を見ればわかる、司令殿、レイ殿は初号機のそばにいたといったね、以前。」

「ああ、私が初号機の前にたたずんでいると、いつの間にかレイがそこにいた、皆に話した通り。」

「同じように二号機の前に現れたはずだよ、アダムはね。」

「リリス由来の零号機のレイ殿、アダム由来の二号機のアダムの少年、辻褄が合うはずだよ。」

「国生みの物語を考えればわかるはずだよ、男性神、女性神、そして、塩の海をかき混ぜた棒。」

「すなわち、男性神、女性神、かき混ぜた棒。」



驚愕に陥るみんな

「アダム少年はゼーレが、リリスの少女がネルフ、そしてロンギヌスもこちらが握っている。」

「だが、そんなに心配しないでいい、すでに、向こうの思惑は外れているからね、シンジ殿さ。」

「なぜシンジが関係してるんだ。」

「考えてみればいい、シンジ殿には天地殿がいる、そしてこの鷺羽ちゃんがいる、もう計画が発動するはずがない。」

「こちらのリリスとロンギヌスは私が改造してる、キーとなるのが天地殿、天地殿が望まない限り、こちらのアイテムは動かない」

「すなわちシンジ殿がこちらにいる限り計画は破たんしてるということさ、そしてレイ殿も同じ理由さ。」

「いかな、むこうにアダムがあるといえそうそう向こうの思うようにはいかない、しかし、懸念材料があるのも事実だよ。」

「ゼロチルドレン、といえばわかるかな。」

驚愕するゲンドウ

「葛城君か……………」

「そう、ミサト殿、南極での実験で最初にアダムとシンクロしたミサト殿、懸念材料はこれさ。」

「ミサト殿の動きで変わってしまう可能性がある、今まで道理とは  
いかないよ、特にミサト殿は。」

「そこで加持殿、あんたの出番だよ。」

「おっおれ、おれに何をしろというんだい、」

「加持殿は、以前ミサト殿と恋仲だったね。」

「確かに、葛城とは大学時代、恋人関係にあった、しかし、おま  
まごとの延長みたいなものだよ。」  
昔のことを思い出す加持さん

「加持殿にはミサト殿ともう一度恋人になってほしい、早い話が、  
落としてしまえということさ。」

「今でも、ミサト殿がわすれられないんだろ、加持殿、女遍歴も其  
処が原因だからね。」

真っ赤になって口ごもる加持さん

「あとはミサト殿だけさ、うまく口説かないと、ドカンだよ。」

「いいかい、加持殿、シンジ殿のように誠実にミサト殿と付き合い  
なさい、男のプライドなんか捨ててしまつて

真剣に口説き落としなさい、これが今のあんたに課せられた義務だ  
よ、いいね加持殿。」

「どんな手をつかつて、どんなことをしてもミサト殿を守りなさ

い、これが最後のチャンスだよ、加持殿」

真面目な顔の加持さん

「わかりました、今度は葛城を守って見せます。」

「よろしい、加持殿。」

司令室での出来事、前篇（後書き）

ミサトさんと加持さんのお話でした

では次のお話をお待ちください

司令室での出来事、後編（前書き）

後編が始まります

## 司令室での出来事、後編

「おっと、もう一つの懸念材料があるのを忘れていたよ。」

「アダムの少年はいずれここに送り込まれるだろう、これからのキパーソンはその少年の動きにかかっている。」

「その少年の動き方で計画が発動する危険が生じる、シンジ殿、レイ殿、そして今日来た、アスカ殿の進展状況がカギになる。」

「シンジ殿、レイ殿は問題ないがアスカ殿だよ、幸にして、アスカ殿もシンジ殿に恋してる、しかしその恋が破れると、アダムの少年に付け入らせる隙が生じる恐れがある、だから、この三人の中をもっと深くさせる三人が深くなればなるほど、アダムの少年に付け入らせる

隙を与えないことになる。」

「アダムの少年とシンジ殿の接触も注意しておいた方がいい。」

「それに付随することだけど、ユイ殿とナオコ殿を顕現させるよ。」

「ユイが戻ってくる。」

「ユイ君が戻ってくる。」

嬉しそうにしている司令と副司令、ナオコさんのことは聞いちゃいません、ユイさんが復活することだけ聞いて

「三人の中を深めるためにはゲンドウ殿とユイ殿、リツコ殿、ナオ

コ殿が仲良く暮らすこと、四人の仲が円満であれば三人も、もっと仲良くなるうとするだろう。」

「いいかい、ゲンドウ殿、リツコ殿に精いっぱい謝罪をしなければいけないよ、ユイ殿がゆるせばだけど、リツコ殿を正式に妻とする」

それがゲンドウ殿がリツコ殿に与えた傷を償うことになる・・・」

司令室の端末から行き成り声が出て鷺羽ちゃん言葉を遮りました

「ちょっと待つてよ、私への謝罪はどうなるの、私は殺されたのよ  
そのゲンドウさんに、あんなに尽くしてたのに、レイちゃんも育  
ててあげたのに。」

「どうしてくれるのよ、答えてよ、ゲンドウさん、答えなさい、ゲ  
ンドウ、私をまた捨てるの、こたえてよ~~~~~」

と、マギのナオコさんが激白します

「どうするんだ、ゲンドウ。」

行き成りのナオコさんの言にうるたえて答えることができない司令  
そして、マギを通して初号機のユイさんが発言します

「あなた。」

「ユイ。」

「シンジやレイちゃん、アスカちゃんに免じてあなたを許します、  
やっぱりあなたは私がいなくて何にもできない人なのだから。」

「ありがとうユイ。」

「ちゃんと、私、リツコちゃん、ナオコを平等に愛してくださいね、  
く鬼の顔になるユイさん>、い、い、で、す、ね、あ、な、た、。」

「ナオコと浮気してたの昔から知ってましたよナオコ。」

「あらばれてたのね、ユイ。」

気軽にそう答えるナオコさん

青い顔を通り抜けて蒼白になるゲンドウ氏

「それと、顕現したら9割殺しますから覚悟しておいてください  
ね、あ、な、た、にこっ」

「おいゲンドウ9割殺しってなんだ？」

「ユイが究極に怒った時にされるお仕置き、精神的に追い詰め、肉  
体的に追い詰め、もう自殺しかないと思うほど恐ろしいお仕置きだ。」

「一度だけユイに内緒で買い物をしたとき、請求書の額をユイが見  
たとき発動した……。」

「どんな買い物をしたんだ、ゲンドウ？」

「ナオコ君に指輪を10億で買ってやった、ユイには1億のネック  
レスを買った、たまたま店がナオコ君の請求書を間違えてユイのと



を両方をユイに渡した  
時発覚した。」

10億の請求書を見たユイさん、自分とナオコさんの値段の差をみたユイさんが怒るのも無理はないと思う冬月さん、9割殺しもやむ得ないと納得しました。

「話はそれたけど、4人が仲良くすることこそ肝心だよ、いいね、ナオコ殿、ユイ殿。」

リツコさん呼びました

「リツコ君、今までの数々の君への狼藉許してくれとは言わない、ここにナイフがある、君の思うようにしてくれ。」

「今更そんなこと言われても、私はどうすればいいの、どうすれば、うううううううううううううううううううううううう。」

ナオコさんがいリツコさんに話をします

「りっちゃん、以前、あなたにゲンドウさんと別れなさいといったわよね、でもあなたはゲンドウさんとは切れていなかったわよね、どうして、レイプまがいに体を

奪われて、それから関係を持つて、赤ちゃんもいるわね、かわいい男の子を、私の母に預けて、だからなのそうなの、リツコ。」

「答えて、リツコ」

「そうよ、ゲンドウさんを愛してるのよ、今も、でもゲンドウさんにはユイさんがいた、ユイさんが憎かった、ユイさんに似ているレイが憎かった、でもシンジ君



のアップパーカットが決まりました。

憐れゲンドウ司令室の端までふつとばされて、気絶してしまいました

「見事なトリプルパンチだった、がくつ。」

「気が済みました、改めてユイさん、母さん、これからもよろしく  
お願いします。」

「めでたしめでたしだねみんな。」

「しかし厳しい戦いはこれからも続くよ気を引き締めてね、みんな  
!。」

「リツコ殿、ユイ殿とナオコ殿を顕現させる準備と実行の手伝い頼  
んだよ。」

「了解、鷺羽さん。」

司令室での騒動のお話でした。

**司令室での出来事、後編（後書き）**

後編をおおくりしました

ユイさんとナオコが顕現が決定しました

では次のお話をお待ちください

## カレー（前書き）

引越しのお話です

## カレー

大人たちが大変なお話をしてるとき子供たちはというと、家でプチ引っ越しをしていました

もともとそんなにたくさんの荷物があるわけではないシンジ君は簡単ですしレイちゃんもそんなに荷物はありません、問題はアスカちゃんです衣装とかはそれなりに

ありますが、問題はドイツで集めていたシンジ君グッズです

「アスカさん荷物はここでいいのですか？。」

「あつはい、それはそこに置いておいてください、中身は衣装だけが入っていますから。」

「これはどこに置くんですか、？。」

「これは本などが入っているので机の上に置いておいてください。」

「これはどこに・・・・・・。」

「そつそれはいいですあとで私が片付けますから」

「結構重そうですから・・・・・・。」

「いいですから・・・・。」

と、押し問答になっていましたそうこうしているうちに、中身をぶ

ちまけられてしまいました

「こっこれは、ぼっぼくの写真やプラグスーツ・・・・・・・・・・」

自分の部屋を片づけていたレイちゃんは、アスカちゃんの部屋で物音がしたので覗きにきました

足元にシンジ君の笑顔を写した写真があったので手に取ってみました  
写真を握りしめて、アスカちゃんのそばに来て、何も言わずにアスカちゃんを抱きしめていました

「アスカ、こんなにシンジ君が好きだったのね、会ったことないのに。」

「レイ、うん、会いたくて、会いたくて、狂おしいほど会いたかった、やっと会えた。」

2人とも抱き合って泣き始めました、シンジ君は何も言わずに二人の様子を見ていました

暫くそうしていた2人にシンジ君がつぶやきました

「アスカさん、そんなに僕を好きになってありがとう、うれしいです、こんな僕を好きになってくれて。」

「レイありがとう、好きになってくれて。」

「二人ともありがとう」

「僕も、もつと二人に好きになってもらおう頑張るから。」

「そして、これから三人で頑張ろう、使徒戦だけじゃなく僕たち

にこれから起こるであろうすべての闘いに、三人で乗り越えて行く。」

「はい。」「はい。」

きずなが深まる三人です

「まだ片付けが残ってるから頑張って終わらそう」

「そういえばこのプラグスーツって本物？」

「私のプラグスーツを改造して色を塗りなおして、シンジさんのプラグスーツを模して作ったの。」

恥ずかしそうに答えるアスカちゃん

「そっそうなんだ、今度リツコさんをお願いして僕の予備のプラグスーツ2つもらってあげるよ、レイとアスカさん用に。」

「レイもほしいでしょ。」

「ありがとう、シンジ君。」「ありがとう、シンジさん。」

レイちゃんとアスカちゃんはあれはどこに飾るとか、これはどこに飾るとか、二人で話し合いながら片づけていきました、シンジ君もどこに片付けるか聞きながら

時間が過ぎていきました

そして夕食の時間が迫ってきました



「買い物に行こうと思うけど、いくかい、二人。」

「行きます、行きますよ、「シンジ君」、「シンジさん」」

「何が食べたい？アスカさん、レイ。」

「わたしは何でもいいです、シンジさん、シンジさんが作ってくれる物なら。」

「私もアスカと同意見よ、シンジ君。」

「何にしようか、そうだカレーにしよう、チキンカレーにしよう、これなら食べられるでしょ、レイもアスカさんも。」

「それでいいですシンジさん。」「それでいい、シンジ君。」

「大量に作らなくちゃ、どうせ、ミサトさんの分も作るし。」

スーパーに行って楽しく買い物をする三人でした

シンジ君がカレー作る間、二人はまた片付けを再開していました。

「そうだ、ミサトさんやリツコさんたちにも声をかけよう。」

「ぶるるるる、ミサトさん、今日はチキンカレーですからリツコさんたちに声をかけておいてください、お願いします。」

「ぶるるるる、あっシンちゃんどうしたの、今日はカレーだからリツコに声をかけて、わかった、声をかけておくわね。」

内線でリツコさんに連絡するミサトさん

「あつリツコ、シンジ君から伝言で今日カレーするみたいだから、声かけてくれて言ってたから、伝えたわよ・・・ぷつ。」

「どうしたのよミサト、ふんふんシンジ君の作ったカレー食べに来ていつて、了解、っていう前に切っちゃった、ゲンドウさんに教えてあげましよう。」

「司令。」

「どうしたのかいリツコ君。」

「ちょうどいいです、副司令もいらっしゃったのでまとめてお伝えします。」

「シンジ君が、カレーを作ったそうです、一緒に行きませんか?。」

「シンジ君の料理が、おいしいといううわさがあるが、どうする碇?。」

「もちろん、問題ない、いくに決まっている冬月」

「君たちの時間と合わせて向かうことにしよう、いいな、碇。」

「ああ、問題ない。」

「お前はそれしか言えないのか、碇。」

「問題ない。」

シンジ君の料理が食べられることしか頭にない碇司令です

時間を合わせてシンジ君宅に向かう4人

「シンジの料理はそんなにうまいのか?。」

「はい、司令、五つ星レストランが開けますよ、今でも。」

「そうか、そんなにうまいのか、シンジ君は。」

「そうね、シンジ君の料理はお金がもらえるぐらいおいしいです、ゲンドウさん。」

と四人で話ししながらシンジ君宅に着きました

「シンちゃん、着たわよ、サプライズゲストと一緒にね。」

「父さん、先生、リツコさん。」

驚くシンジ君

「シンジ君お邪魔するよ。」「お邪魔します、シンジ君。」「邪魔をする、シンジ。」

「来てくれて、ありがとう、みんな。」

「さあ上がって、みんな。」

「うむ。」





それぞれシンジのこれからを考えて帰宅していききました、約一名を残して

## カレー（後書き）

アスカちゃんの引っ越しの片付けと  
シンジ君のカレーのお話でした

では次のお話をお待ちください

## ダンスパーティー（前書き）

第七使徒戦です華麗な踊りを踊ります



## ダンスパーティー

第七使徒襲来の報を受けるネルフ本部、緊迫した雰囲気は司令部をおそいます。

まずは護衛艦からの攻撃をしますが、フィールドに阻まれて攻撃が効きません。

水際作戦に切り替えることにしました、ジェットアローンに搭載されたエヴァ3機が到着しました。

ジェットアローン内に臨時作戦本部が設けられ、ミサトさん、リツコさん、鷺羽ちゃん、そしてパイロットの3人が敵使徒について作戦会議を行っています

「第三使徒が近距離型、第四使徒が中距離型、第五使徒が遠距離砲撃型、第七使徒が高速水中型となっております、次に予想される使徒は分裂型が予想されます。」

「マギに計算させてもそのような答えが返されています。」

「全機攻撃は避けたいわね、三機とも損害を受けると次に響くね、何かいい案ないかね、何かいい案ないかな、ミサト殿。」

「コアをたたき切っても分裂されるとやっかいよね、危険でもエヴァ単機の偵察しかないかな。」

「エヴァ単機となると、実験経験の多い、シンジ君、シンジ君なら応用が利くか……。」

「反対です、シンジ君、さん」にいつも無理ばかりさせて申し訳ないです。」

「といつても、二機出すのはあたしも反対よ、レイ、アスカ。」

「やっぱり僕が出るよ、二人には待機しててほしい、もし僕が倒れたらお願いするから。」

「シンジ君、さん。」

「決定ね、シンジ君、おねがいね。」

「はい、ミサト三佐。」

「危なくなったら、J Aに積まれているN 2爆雷で攻撃するから避けてね。」

「了解。」

初号機が発進します。

（シンジ、とりあえず一太刀浴びせてみよう）

（はい、兄さん）

正宗ソードで切りかかるシンジ君

「えいやあああああああああああ。」

見事使徒を切り裂きました、やはり予想道理分裂しました



「初号機回収、ネルフ本部に撤退。」

ネルフ本部に撤退してきたみんな、シンジ君はつ緊急入院しました

「病院より連絡シンジ君の回復に10日かかります。技術部から連絡。初号機修理完了までこれも10日かかります。」

「使徒が動けるまで10日と判断されました。」

今度ばかりはシンジ君には頼れません、のこった2人が頑張るしかありません。

「どうするのミサト。」

「今度ばかりはいい案が浮かばない、何かいい案ない？リツコ。」

「あるにはあるけど、加持君の発案よ、どうするのミサト。」  
加持という名前を聞いて少し喜んだミサトさん

「しつしょうがないっわね加持の発案じゃ、採用しますか仕方なしよ、し、か、た、な、し、よ。」

（んまあ、てれちゃってかわいいんだから、ミサト）

「シンジ君、さん、は大丈夫ですか？ミサトさん。」

「作戦には出られないけど、大丈夫よそんなに心配しないの二人とも。」

「作戦を伝えます、敵使徒の攻撃方法は二機による荷重同時攻撃しかありません、明日の朝からレイ、アスカあなただちの生活リズムを

すべて合わせてもらいます、なぜなら、使徒は一方を攻撃すると、すぐさま攻撃したほうにエネルギーを補給します、そのすきを与えないために、

「貴方たちはシンジ君が好きという点でお互いの事を考えられるからできると思います、朝から行うすべての行動が攻撃に有効なの、そして同時攻撃に必要な訓練としてクラシックダンスをしてもらいます、これはお互いの息が合わない」と華麗に踊れません息を合わせると見事なダンスになります。」

「はい、了解。」

その晩の事です

「アスカ、あなたに私の正体を話します、私はリリスと初号機により生み出された存在です、いわば、使徒のあいの子です、でも私は人間です、人間なんです」

何の感情も持たない人形に………う  
「。

二号機に取り込まれてしまいました、抜け殻状態です、私の顔を見ても私がだれかわかりません、何とか私に気付いてもらおうとお勉強に訓練を頑張りました、

でも気づいてくれません、努力だ足りないんだと思いもつと頑張りました、そして数年後、何とかエヴァのパイロットに選ばれたので、ママに知らせに行きました

でもママは首をつって無くなりました、悲しかった、死んでしまいたいほど悲しかった、つその時、ネルフ総本部にシンジさんが現れ、使徒を倒したその資料や

映像を見たとき私の心はシンジさんにとらわれてしまいました、一目ぼれです、レイと同じように人間になれたんだと思います、私もレイも人間です、

貴方も私も同じシンジさんを愛しているんです、今度はシンジさんに私たちの活躍を見てもらいましょう、レイ。」

陰で見ていた鷺羽ちゃん、ミサトさんはその様子に満足をして静かに去っていきました、

鷺羽ちゃんは思いました（じゅらい星の船穂殿、みさき殿を見ているみたい、彼女たちもいろいろありましたが姉妹のように仲がいいと、そしてここにも姉妹がいると）

姉妹のように仲がいい喧嘩もしたことがない姉妹の誕生しました、のちにネルフの三姉妹（のちに洞木ヒカリが加入）と呼ばれることになりました。

翌朝からすべての行動が一致するレイちゃん、アスカちゃん、歯を磨くタイミング、トイレのタイミング、食事、お風呂、そしてダンスの練習と

「鏡を見ているようだ」とミサトさんが唸る位完ぺきに一致してきました

そして10日後、再使徒戦です、華麗に攻撃、華麗に防御ダンス  
を見ているみたいに華麗でした、シンジ君が見て「レイとアスカさ  
んが実際に踊ってるみたい」とほめていました

そしてフィニッシュ、見事と2機による同時攻撃が決まり使徒を殲  
滅しました。

シンジ君のけがが治り、3人でのダンスパーティーをしました

たどたどしいシンジ君のリードでしたが見事3人で踊り切りました

## ダンスパーティー（後書き）

レイちゃんにアスカちゃんの過去を話します  
二人の結束がますます深まりました

では次のお話をお待ちください



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9742z/>

---

新世紀エヴァンゲリオン 天地君の受難

2012年1月13日18時51分発行